魔法姉弟ツインクロノ

白いサンタクロース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法姉弟ツインクロノ

【Ｎコード】
Ｎ７２７６Ｙ

【作者名】
白いサンタクロース

【あらすじ】
クロノ・ハラオウンは転生者である。
クレア・ハラオウンはＴＳしたクロノである。
それは、一人の神のミスから始まるストーリー

EP．1　転生しました（前書き）

以前試しに書いた物が、思った以上に好評でしたので、不定期ですが連載します

EP．1　転生しました

【転生】

二次創作では非常にポピュラーなジャンルである。
神のミスにより死亡してしまい、お詫びとして桁違いの力…チート能力を得て新たな命を持つ事だ。

そしてこの世界の神の有り得ないようなミスから物語は始まる。

彼によって死亡した人数は数億人。なにしろ、月を地球に落としてしまったのだ。
未曾有の大災害によって死亡した大量の人々は、神が一人づつ転生させた。同じ世界に何人もの人間が転生し、それぞれが制限はあるものの、願い通りに転生した。

そう…【願い通り】に。

そしてこの物語の主人公である、【彼】が転生する順番になった。

「ここは…」

彼がいたのは光りしかない空間。

何もない、先の見えない場所に。

「あの世なんだろうな」

「その通り！」

彼が振り向くと、いかにも神様的な人物が立っていた。
腰まで届く長い銀髪に髭。白装束に杖。
誰もが思い描くであろう老人が立っていた。

「えっと…」

「ワシは神じゃ。君はワシのミスで死なせてしまっての～。すまんな」

「ミスって…」

実際、彼は自分の死が神のミスによるものだとは信じられなかった。
自分以外にも大勢の人々が亡くなっているのだから。

しかし神の口から信じ難い事実が語られる。

「間違って月落としてしまったのじゃよ」

「ハァ！？」

なんてことを仕出かすんだコイツ…

神の行いに、ただ唖然とするだけだった。

「という訳で、お前さんを好きな世界に転生させてやろう。勿論色々と特典付きでな」

「もしかして、二次創作であるアレですか？」

彼の頭に過ぎったのは【チート転生】という言葉。

「正解。ただ、本来のとは少しばかり違う世界じゃ。違うといっても、一部の登場人物の性別や年齢が違ったり、容姿が少し違う位と、物語に大きな変化を起こさない程度じゃがな」

所謂パラレルワールドの世界。

「ただし特典には制限がある」

「あるんですか？」

「同じ世界に転生させる人間が多いからのう。そのせいで問題が発生する可能性があるからな」

神の言葉からして、転生者は多数存在しているようだ。

死者は多いのだ。当然と言えば当然である。

「まず一つ。意図的に原作の登場人物の親族にはなれない」

「意図的に…って事は、偶然は有り得ると？」

「うむ。生まれる場所位なら選択させてやれるからのう。運が良ければ…な」

この制限が無ければ、原作そのものが崩壊する恐れがある。

例として【インフィニット・ストラトス】の世界で考えてみよう。

この世界では、男性が原作に介入するのは非常に困難だ。いや、ほぼ不可能と言っても過言ではない。

織斑家か篠ノ之家に生まれない限り。

だからこそ、こぞって両家に転生を希望する者が殺到し、その先は言わずとも解るだろう。

おそ松くんなんてレベルではなくなってしまうからだ。

「二つ目は、ニコポ、ナデポ等の精神操作、魅了能力は不可能じゃ」

「これも皆が使うからですね」

「その通り。例えお前達から見れば、ただのキャラクターかもしれん。だが彼らもお前と同じ命がある、魂がある一人の人間なのじゃ。四方八方から魅了をかけられては精神が崩壊しかねんからな」

「僕は嫌いなんで、ちょっと嬉しいです。ん?じゃあ僕と同じって事は…」

「察しが良いな。お前の生きていた世界も、他の世界では物語の世界だったのだ」

「まじですかい…」

「どんな世界かは教えられんがの。とある一組の男女の恋愛話かもしれん、昔の戦国時代話しかもしれん、逆に未来の話しかもしれん」

つまり彼も、もしかしたら物語の登場人物だったかもしれない。逆に物語には登場しないような背景の一人だったかもしれないのだ。

「三つ目、知識や技術は不可能じゃ」

「自力で手に入れろって事ですか」

「自らの努力、経験で得てこそ意義があるからの」

神の言う事も、尤もである。技や知識は、その人の人生で得た掛け替えの無いモノだからだ。

「最後に死者を蘇らせる事はできない。死者を蘇らせた時点で、同じ者にはならぬからな。お前達転生者と同じく…の」

それは、彼も別の人間に生まれ変わる事を意味している。

「以上じゃな。あ、それと転生については、同じ転生者以外には話したり伝える事はできんから」

「はい…」

（つまり話したりできる人が転生者って事か）

そして神は杖を彼に突き付ける。

「では、転生するか？勿論拒否する事も可能じゃぞ」

彼は少し考え転生する事を選んだ。

「ではまず何処の世界にする？」

「えっと…魔法とかあったら嬉しいです」

「ならば【魔法少女リリカルなのは】はどうじゃ？お前さんも好きなやつじゃろ。まあかなり人気があって、転生者も多いがの」

生前の彼が好きな作品だ。
やはり人気なようである。

「……そうですね。お願いします」

「よろしい。さあ、お前の願いを言え。お前の望み通りの力、容姿、年齢、場所に生まれさせてやろう。…そう、【願い通り】【間違いなく】な」

その言葉に僅かに違和感を感じる。
特に最後の【願い通り】【間違いなく】の部分が。

（まさか…）

彼は感づいた。この神は本当に願いを叶えるだろう。だがそれだけだと。
正確には【願いしか叶えない】のではと。

「男性で、ＳｔｒｉｋｅｒＳの時点で成人になっている年代の管理世界に生まれる事、魔法の才能、良い家系、悪くない容姿、でお願いします」

「……そんなんで良いのか？宝具とかＥＸランクとかいらんのか？」

大抵の者は圧倒的な力と、完璧ともいえる美貌を望むからだ。

「いりません。これが一番リスクがありませんし」

「…ふむ。どうやら感づいたようじゃの。お前さんは賢いのう」

神は彼の心を読んだ。

「やっぱり…」

「左様。ワシは願い通りにしか叶えん」

要約すると、ドラエモンの四次元ポケットを望んだ場合、ポケットだけしか貰えないのだ。道具が一つも無いだだの入れ物でしかない。オッドアイで生まれれば、疾患を持って生まれる可能性すらある。

「どうしてこんな事を?」

「何。ただ欲望にまみれた者、考えの浅はかな者にはロクな事はできんからの。まあお前さんと同じく、ワシの意図に気付いた者も少なくないがな」

「つまり気付かない人の方が多いと」

「そうじゃ。言っておくが、お前さんの望みもかなり運任せじゃぞ。願ったからにはもう変えられんがな」

魔法の才能も平均以上からなのはと同等、それ以上とかなり幅広い。生まれる家も同じだ。

「わかってますよ」

「よろしい。因みに原作知識と自分の能力は、絶対に忘れんからな」

つまり彼は能力と同じく、リリカルなのはについては一切記憶から消えないのだ。

「では、第二の人生を楽しむが良い」

「さようなら」

彼は光りに包まれ、その場から消えた。

「さて、次は……何？銀髪オッドアイ、ニコポ、ナデポ、魔力無限、無限の剣製？ニコポ、ナデポ以外は可能じゃぞ……生まれてすぐ死ぬかもしれんがの（ボソ）」

ここはミッドチルダのとある病院。

その産婦人科の病室に一人の男性と幼い少女が入って来た。

彼の名はクライド・ハラオウン。その手に引かれる幼い少女は、二年前生まれた彼の娘、クレア。

二人が入った病室には、緑の髪をした女性がベットに横たわっている。
彼女はクライドの妻、リンディ。

「男の子ですって」

リンディは隣に眠る生まれたばかりの息子に視線を送る。

「ああ。ほら、クレア。弟だぞ」

「……ん」

クライドはクレアを抱え覗き込む。
新たに生まれた命。己の息子と対面する。
少女は初めて見る弟という存在に困惑する。なにしろまだ二歳なのだ。無理もない。
だが、これだけは理解していた。この子は自分が守るべき存在だと。

「ねえ。名前はやっぱり…」

「クレアの時に考えておいた、男の子の名前だな」

「ええ。フフッ♪」

二人は揃って息子の頬を撫で、その名を口にする。

「「クロノ」」

そしてその翌年、クライド・ハラオウンは、二十五歳という短い生涯を終える。

二人の子供と妻を残し、いくつもの悲劇を生み出した、深い闇に飲み込まれた自らの艦と、運命を共にしたのだった。

EP．1　転生しました（後書き）

基本的に三人称視点です

EP. 2　生まれた世界（前書き）

続けて行きます

近い内、無印の前に設定を書きます

EP．2　生まれた世界

クロノ・ハラオウン。

彼は転生者である。

ただ、原作のクロノに憑依したのではない。本来のクロノは、彼の姉であるクレアだ。この世界は、クロノの性別が逆な世界なのである。

自分は、クロノの名を与えられただけの別人だと。

その事を確信したのが、クロノが三歳の時。クレアが士官学校に入学、さらにグレアム提督の使い魔に弟子入りし、魔導師として訓練を始めたのがきっかけだ。

意識がはっきりした以前から、妙だと思っていた。自分の魔力資質が高いのは神によるものだとしても、父、クライドが自分が生まれてから一年で死亡した事、姉の年齢が二つ上だという事。

そう、この世界の原作と違う部分を理解した。

その年は主人公であるなのはが生まれた年だ。この一年間、ミッド等の管理世界で大量の赤ん坊が出生後死亡したり、脳や身体に重大な障害を持って生まれる事態が続発した。

勿論転生者達である。

なのはの運動が苦手という事に魔力が原因といった説があが、それが正しいと考えると、なのは以上の魔力を生まれながらに保有しているのだ。無事でいられるはずがない。

無闇矢鱈に力を求めた結果、人間に扱える力でなくなり、その身を滅ぼしたのだ。

勿論地球の海鳴でも、同じ事が起きている。
管理局は把握していないようだが…

「お母さん。僕も魔法の勉強がしたい」

さらに二年後。クロノは、母リンディに、自分も魔法を学びたいと伝えた。

当初クロノは、魔法を学ぶ事を恐れた。他の転生者達である。
ＫＹと嫌われ者である彼と同じ名前、容姿を持って生まれた彼は、四歳の時やはり転生者に襲われた。自分より二つも年上の少年に。
彼が望んだのはカブトゼクターで、ゼクターに認められてなく、クレアが助けに入った為、命に別状は無かった。そしてこれが、クレアにとって初めて人間を魔法で攻撃した事である。

見ず知らずの年上の少年にいきなり殴られるなんて、四歳の子供からしたらトラウマものの事件だ。しかしクロノも転生者。自分が襲われる理由も、彼が言ってた意味も理解できている。
これからはもっと大勢の人に襲われる。それから逃れるには、名前

を変えたり、余所の家に養子になるなりして自らの存在を隠すしかない。
だが、クロノは戦う事を選択した。

彼が【リリカルなのは】と出会ったのは、二次創作からだった。
読んだ物全てではないが、大半の作品でクロノが【神聖な少女達の誇りを賭けた戦いを邪魔した愚か者】【自分の思い通りにならないとわめく子供】と散々な扱いを受けていた。
しかし、いざアニメを見てみるとどうだろうか？
彼は危険行為を止めに来ただけで何の非も無い。さらにフェイトの無罪の為に奔走し、その後の闇の書事件も、はやてやヴォルケンリッター達の為に動いたのだ。
自らも闇の書の遺族であるのに…

だからこそ、クロノは自分に与えられた名に恥じぬ生き方をすると。
身勝手な解釈や欲望に塗れた者に負けまいと。

クレアと同じく、リーゼ姉妹に弟子入りしてからというもの、クロノは目まぐるしくその能力を磨いていった。神に与えられたのはあくまで才能。それを力にできるかは己次第だからだ。
クロノは努力した。自分の身を守る為、家族を守る為、そしてこれから起こるであろう数々の事件と戦う為に。

姉のクレアも同じだ。
才能で劣るとはいえ、姉の意地、そして弟を守る為、【こんなはずじゃない人生】と戦う為、同じ思いをする人を一人でも多く救う為に。

二人の特訓は過酷だった。
姉妹との模擬戦は元より、無人世界でのサバイバル、戦術を組む為

の座学、魔力総量を上げる為の負荷訓練。何から何まで幼い姉弟には耐え難い事だった。
しかし二人はこなしていった。譲れない思いがある。勝たなければならない戦いがあるから。

ここは時空管理局、ギル・グレアムのオフィス。

「ふむ…」

「どうですか、父様」

「二人共優秀だよ♪」

そこの主である彼は、自らの使い魔達から渡された、ハラオウン姉弟の特訓の報告を見ていた。

親しい間柄であり、部下であったクライドの子供達。彼にとっては孫のようにも思える存在だ。
だからこそ自分が許せなかった。あの闇の書事件で死ぬのは自分であるべきだった。彼は死ぬべきでなかったと。
そして独自に闇の書を追い、封印方法を探った。それが半ば違法であろうとも。

そしてついに見つけた。封印方法を。後は闇の書を見つけるだけ。

グレアムの視線がクロノの報告に止まる。

「……素晴らしい」

クロノには氷結系の変換素質があり、さらに変換技術も高く、才能を伸ばし続けてると。

「確実に封印する為に、クロノの力が必要だな…」

「クロ助ねぇ…」

「これからも二人を頼むぞ」

「「はい」」

二人が部屋から出て行く。

闇の書の永久凍結。クロノの協力があればより確実になる。

だが同時に罪悪感がよぎる。この行いは復讐に近い。そんな事に彼を利用しようとしている自分がいる。

しかしクロノには親の敵討ちをする権利がある。ならばその機会を与えてやるべきではないか?

見苦しい自己弁護だが、これ以上犠牲者を出さない為には必要だ。

そう自分に言い聞かせる。

強制はしない。ある意味命を奪うより残酷な事だから。

グレアムはデスクに置かれた地球儀に触れる。

（あと少し……地球に転生したのはわかったのだ。あとは主を突き止めるだけ）

地球儀を回転させると、一つの国が目に止まる。

日本。

彼も何度か行った事のある国であり、十年程前から多くの局員が移住した世界。

勿論その局員は、転生者の親となる人々。確実に魔力とデバイスを得る為に、親が局員であると願ったのだ。

（…少し調べてみるか）

何か運命的なものを感じたグレアムは、日本の調査に乗り出した。

そして半年後。八神はやてを見つけたのだった。

クレア・ハラオウンが九歳の時、史上最年少の執務官となった。

彼女は自宅のリビングで一つの資料を見ながら頭を悩ませていた。

「姉さん、どうしたの。溜め息なんかついて」
クロノが牛乳の入ったコップをクレアに渡す。
「ありがとう。ちょっとね…」
コップを受け取り、一口飲む。
「それ、何？」
「私の補佐官の立候補者リスト」
クロノが見ると、数人の少年少女の顔写真とプロフィールが書かれた資料だった。その程がレアスキル持ち。そして何処かて見たような顔。
クレアが何者か気付いた転生者達である。
「周りからの評価も、スキルに頼ってるだけって連中でね。面接しても、なんか嫌な感じで…」
彼女の補佐官となり原作に介入する。そんな魂胆が丸見えな上、クレアに対し下心を持つ輩が多いのだ。
ＫＹでも女性なら話しは別。そんな考えなのだろう。
「クロノ。私の補佐官にならない？」
「それも魅力的だけど、姉さんの下だと甘えちゃいそうだから遠慮しとく」
「ええ～お願い！」

手を合わせてクロノに頼み込む。

「…エドワードがいるじゃないか」

本名、エドワード・リミエッタ。この世界のエイミィである。当人の性別が変わっているのなら、将来結ばれる相手も変わっていて当然である。

「なんでエドが出てくるのよ！」

テーブルを叩き立ち上がる。

「優秀なんだろ？良いじゃないか、仲良いんだし」

「う…。なんでそんなに嫌がるのよ…」

「嫌な訳じゃないよ。執務官に興味が無いだけ。とりあえず今は捜査官の資格を取って、色々と見ようと思うんだ」

「…わかったわ。エドに頼む」

「そうしなよ」

実際、クロノは氷結といった、ロストロギアの封印に有効な手段を持っている為、特別捜査官になる事を薦められている。

（しかし、どうしよう…これ）

クロノは一枚のカードを取り出した。先日、グレアムからプレゼン

トされたデバイス。【ローラン】である。

「それ、提督からプレゼントされた杖でしょ？」

「うん」

「デザインはＳ２Ｕに似ているけど、中身は別物ね」

「氷結強化機構が組み込まれてるからね」

ローランはＳ２Ｕとよく似た形の杖だが、クロノの氷結系を強化し、より一層強力な魔法が高速で運用できる杖である。
デバイスとの相性も抜群。だがクロノには少しだけ嫌な予感がしていた。

これはデュランダルのプロトタイプなのではと。

その予感は的中しており、グレアムはこの杖を元にデーターを収集しデュランダルを作り上げ、クロノに託すつもりでいた。

「あんなにインテリジェントを欲しがってたのに…。やっぱり提督からのプレゼントからかしら？」

「それもあるけど、やっぱりストレージの方が軽いんだ」

「そうよね。処理速度がねぇ…」

クロノも当初は、相棒たるデバイスに憧れた。だが、いざ使ってみては勝手が違った。
自分の命を預ける物だ。確実で自分に合った物の方が良い。

クロノは戸惑いつつも、ローランを自らの杖と決めたのだった。

この世界で大事件が起きた。クロノが八歳…なのはが五歳の時。高町士郎が重症を負った年である。

第９７管理外・地球。

事件の内容はこうだ。
第９７管理外・地球の日本、海鳴という町にて十数名の少年少女が戦闘し、多数の死傷者を出した。現場はギル・グレアム提督の指示の下、直ぐさま鎮圧された。
この事件の逮捕者の半分は、局員の子供であり、残りは現地住人だが、違法デバイスを所持している事がわかった。

要するに、なのはの気を引こうとした転生者達が、お互いに殺し合いを始めたのだ。局員の子供は親から貰った物を…そうでない者は拾う等、なんらかの手段でデバイス、能力をテバイスとした物を使い争った。
勿論グレアムが介入したのは、最近発見したはやてを隠蔽する為だ。

こうしてはやてを隠蔽し、事件は無事解決。事件に関わっていない、

多くの移住した局員までもが管理世界に戻り、現地住人でさえリンカーコアに封印処置が施され、武具を没収された。

物語は確実に近づいている。

介入者を間引きながら。

EP．2　生まれた世界（後書き）

多分次の次から無印かな？

EP．3　目前（前書き）

少し修正しました

原作介入までです

次回設定を書きます

EP．3　目前

原作が始まる日が刻々と近づいている。

ハラオウン姉弟は順調に腕を磨いていった。

度重なる転生者との戦い。局員としての実戦。

クレアに至っては原作以上に力を付け、十四歳でありながらＳ－にまで成長した。クロノも負けじとＡＡＡに合格し、特別捜査官としての資格を取った。本来のクロノには一歩劣るが、それでも彼の能力は他の局員とは飛び抜けた実力を有していた。

そして転生者の襲撃といえば、ギル・グレアムにも起こった。はやてを封印しようとしたからである。

しかし今彼が亡くなれば非常に危険だ。はやての生活は彼に依存していたのだから。

彼の身に何かあれば、はやてへの支援が止まり、はやてが施設に入る可能性すらある。そうなってしまえば、身体の悪い彼女は格好の獲物となり、イジメの対象になるだろう。それは心優しい彼女でさえ、確実に心を蝕み、力を手に入れたはやての行動を変え、最悪の事態を起こしかねない。

しかしそんな事は起こらず、彼は転生者達を返り討ちにし、尽く逮捕していったのだ。

彼の人物像をよく考え欲しい。グレアムは地球出身でありながら提督の地位に就き、【時空管理局歴戦の勇士】と呼ばれる程の人物なのだ。最低でもオーバーＳランクは確実である。

さらに彼の使い魔の存在もある。アルフの存在がフェイトの評価になってるように、使い魔の性能が主の優秀さに繋がってるのだ。

彼女達はどうだろうか?作中では、なのは、フェイト、クロノを手玉に取り、不意打ちとはいえヴォルケンリッターを闇の書に蒐集させ、全滅させたのだ。並大抵の実力ではない。
いくら神から力を与えられたとはいえ、そんな桁違いの実力を持つ人間に戦いを挑むのは、正直簡単では無い。例えるなら、強いキャラを使うチャンピオンに、最強キャラで挑む素人のようなもの。無謀である。

そしてここは地球。

ここにこの物語に深く関わる、二人の転生者がいた。

一人の名は神道刃(しんどうやいば)。
彼は生前読んだアンチ転生の創作物から、万が一の事を考え能力を得た。自分が最強になれるように…自分が主人公になる為に…
結果として刃の目論みは成功。海鳴に生まれ、士郎の件も転生者達の自滅のスキを狙いなのはと親しくなり、さらに私立聖祥大学付属小学校に入学した。そして、転生者同士の争いで少しずつだが腕を磨き、さらになのは、アリサ、すずかを上手く魅了し、原作にも介入し始めた。
しかし彼は一つだけミスをした。ユーノの扱いである。刃はユーノをぞんざいに扱い、接した。ユーノも自分が巻き込んだ負い目から

何も言わなかったが、それになのはが感づき出し、少しづつ刃に対する不信感を生み出していった。

もう一人の名はカレル・小川。

彼は原作には関わらず、ただ有意義な人生を送る事を望んだ。クロノと同じように才能を求めただけである。

たしかにカレルも、心の奥底には原作に介入したいといった気持ちはあった。だが数多くの転生者の存在が、カレルの介入する気持ちを失せさせた。

だが彼に転機が訪れる。

ジュエルシードを拾ったのだ。そこに他の転生者が現れ、ジュエルシードを渡すよう脅した。当然、転生者の目論みはフェイトに渡し、原作に介入する為である。

それだけでなく、その場にフェイトとアルフも現れた。転生者はカレルを悪役にしようとフェイトに言い寄ったが、その邪な感情に感づいたアルフに切り捨てられてしまった。

カレルはジュエルシードをフェイトに渡し立ち去ろうとしたが、転生者は逆上しカレルに襲い掛かった。しかしフェイトとアルフが助けに入り、撃退したのだ。その事がきっかけで、カレルは二人の頼みで現地強力者として、原作に介入する事になった。

そしてカレルは決意する。彼女達を先程のような転生者から守らなければならないと。物語を破壊する者と戦おうと。

カレルの予想は的中した。神道刃である。

刃の言動から、カレルは刃を最低な男と判断した。この少年が敵なのだと。

ユーノを盾にし道具のように扱う。自分に対し殺傷設定で攻撃してくる。

幸い、実戦経験と能力は劣るものの、母が元聖王教会所属の騎士で

あった為、鍛えていたおかげで二度に渡る戦いを生き抜いた。

カレルは戦った。フェイトの代わりにジュエルシードを抑えた。助けに行けなかった、プレシアから虐待を受けるフェイトを支えようとした。少しでも物語を良い方向に向かわせようと。

何人もの転生者に出会った。中にはカレルを応援する者もいた。しかしカレルを邪魔者として排除しようとする者の方が多かった。

彼は努力した。母に、フェイトに教えを請うた。

強くなる為に。邪悪な者に打ち勝つ為に。

ここはアースラ。

「みんなどう？今回の旅は順調？」

アースラの艦長である緑の長髪の女性、リンディが乗組員に聞く。

「はい。現在第三船足にて航行中です」

「目標次元到達には、今から凡そ百六十ペクサ後に到達予定です」

「前回の小規模次元震以来、特に目立った動きはないようですが、二組の捜索者が再度衝突する危険性は非常に高いですね」

「そう」

艦長席に座りながら思考を巡らせる。

小規模とはいえ震。次元リンディに僅かだが不安がよぎる。

「失礼します。リンディ艦長」

そこに一人の少年が紅茶を持ってきた。あほ毛が特徴な、中性的な少年。

彼はエドワード・リミエッタ。クレアの補佐官で、アースラのオペレーターである。

「ありがとう。エド」

リンディは紅茶を一口飲み呟いた。

「小規模とはいえ次元震の発生は…ちょっと厄介だものね」

小規模次元震は、昨夜のなのは、フェイトが衝突した事により起きた、ジュエルシードの暴走によって起こった物である。

「危なくなったら急いで現場に向かってもらわないと」

リンディはそう言って、黒いバリアジャケットの背中くらいの長髪の少女と銀色のバリアジャケットの少年に目を向ける。

「ね。クレア、クロノ」

「大丈夫。わかってますよ、艦長」

「僕達はその為にいるんですから」

二人は己のデバイスであるカードを握りしめた。

そしてついに介入の時。

「現地ではすでに戦闘が始まっている模様です」

「中心となっているロストロギアのクラスはＡ＋、動作不安定ですが無差別攻撃の特性をみせています」

乗組員が今の状況を話す。

モニターにはなのはとフェイト、そしてカレルと刃が映っていた。

その映像を見ながらクロノは僅かに顔をしかめる。

転生者の存在だ。

おそらく自分ま真っ先に攻撃される可能性が高い。だが逃げるなんて真似はしない。この名に賭けて。

「…次元干渉型の禁忌物品、回収を急がないといけないわね」

リンディが報告を聞き、立ち上がりながら判断を下す。

「…クレア・ハラオウン執務官、クロノ・ハラオウン特別捜査官、出られる？」

リンディがクロノとクレアに出撃出来るか尋ねる。

「転移座標の特定はできてます。命令があればいつでも」

「僕達にご命令を。艦長」

「それではクレア、クロノ、これより現地での戦闘行動の停止とロストロギアの回収、そして、関係者達からの事情聴取を」

「「了解です！艦長！」」

リンディは二人の返事に目を瞑り、頷く。

二人は転送ポートに向かった。

［どうしたのクロノ？なんか緊張していない？］

［ロストロギア関係だ。緊張するよ］

いや、正確には転生者絡みの方が強い。しかし、だからこそクロノは気合いを入れ直した。

自分は今まで何人もの転生者に出会った。

士官学校の頃は、自分を敵視し陥れようとした連中に何度も襲われた。逆に自分を助け、原作に介入しようと下心が見え見えな連中もいた。

だがそれだけでない。本当に自分の味方になってくれる転生者もいる。彼らには自分も転生者である事を伝えた。
皆はクロノを応援した。
頑張れ。負けるなと。
彼らはクロノの掛け替えの無い戦友となった。共に次元世界を守ろうと。邪悪な考えと欲望に塗れた転生者と戦おうと。

だからクロノは立ち上がれる。一人ではない。
背負うべきものが、守るべき人がいるのだから。

［行こう、姉さん］

［あ…うん］

クレアはその顔に父の面影を見出だし、少しどぎまぎするが、直ぐさま自分も気持ちを入れ替える。

「気を付けてね～」

振り向くとリンディが白いハンカチを振りながら言ってきた。
二人はリンディの行動に戸惑うような、呆れるような感じになりながら転移する。

「はい…行ってきます…」

「行ってきます」

そして二人はアースラから姿を消した。

現地ではハルバード型のアームドデバイスを持つカレルと、魔導書型と銃と刀が合体したようなデバイスを持つ刃が対峙している。

［運が良いな。今回はＫＹ討伐があるから見逃してやるよ］

［お前…本当に最低だな］

［黙れよホモ。オリ主の俺と戦えるだけ有り難く思えよ］

余りにも身勝手な言動をする、赤い長髪の美少年…刃を睨む。

この男はクロノを攻撃する。だが自分が残ればフェイトにも迷惑がかかる。だから信じるしかなかった。原作キャラの実力を。

対称的に刃は心の中で舌なめずりをした。

ついにこの時が来たと。クロノ・ハラオウンを痛め付ける瞬間を。

両親も管理局とは関わりが無いから、知らない事にして、存分に攻撃できる。そして痛め付けた後はリンディを言い負かし、なのはに格好良い所を見せ付けようと。

しかし彼は知らなかった。

自分が敵視する存在が、欲望の対称である美しい少女であると。その名を持つ者が自らの野望を打ち砕く、凍てつく剣である事を。

そして遂にその時が来た。

なのはとフェイトが飛び出した瞬間、水色の魔法陣から二つの人影が現れる。クロノとクレアが。

二人の魔導師、なのはにはクロノが。フェイトにはクレアが、それぞれデバイスを受け止める。

「ストップよ！」

「この場での戦闘は危険過ぎる！」

カレルと刃が驚いて目を見開く。自分の知る人物と違うからだ。

一人は銀色のバリアジャケットと杖を持つ少年。もう一人は黒いバリアジャケットと杖を持つ少女。

転生者か？それとも原作との相違点か？

混乱した二人を相手にせず、少女は威厳と正義感に満ちた声で名乗る。

「時空管理局執務官、クレア・ハラオウン」

少年は誇りと信念を持ち、その名を名乗る。

「同じく時空管理局特別捜査官、クロノ・ハラオウン」

クロノは今、職務だけでなく、醜い欲望を打ち砕く為にその場にいる。

「「詳しい事情を聞かせてもらおうか（かしら）！」」

クロノの本当の戦いが、今始まる。

EP. 3　目前（後書き）

設定の次は戦闘です

設定（前書き）

修正しました

設定

クロノ・ハラオウン

外見：原作クロノと同じ（無印時の身長も同じ）

年齢：無印で十二歳

魔力：Ｓ－（水色）

ランク：ＡＡＡ、ミッド

バリアジャケット：原作クロノのものを銀色にし、肩のトゲや裾、手甲を黒にしたもの（ようするに色を逆転にしたもの）

趣味：魔法とお茶

好きなもの：家族

嫌いなもの：ヘイト系、最低系転生者、すっぱい食べ物

特技：お茶をつぐ事、気温を当てる事

苦手な事：料理（シャマル以下）

この物語の主人公。魔法の才能と家柄、良い容姿を望み、ハラオウン家長男として生まれる。

自分に与えられた【クロノ】の名に恥ぬよう、頑張る努力家。

度重なる転生者との襲撃やリーゼ姉妹の特訓により、かなりハイス

ペック。今でも鍛練は欠かさない。
全ての転生者を嫌ってる訳でなく、士官学校でも転生者の友人がいた。
氷結に関する能力が高く、その技能を認められロストロギア封印を得意とする特別捜査官の資格を取った（階級は二等空尉）。
原作については、やれるだけの事をやると決めている。
料理の腕前は、見た目は普通だが味が壊滅的である。

ローラン

外見：銀色のＳ２Ｕで、先端の円柱部分が六角柱になっている
待機形態：カード型

クロノの杖であるストレージデバイス。正体はデュランダルのプロトタイプで、デュランダルには劣るものの、氷結強化機構が組み込まれている。
声はデュランダルと同じ。

クレア・ハラオウン

外見：背中にかかる位の長い黒髪の少女、体格は幼い、身長もクロノと変わらない

年齢：無印で十四歳

魔力：原作クロノと同じ

ランク：Ｓ－、ミッド

バリアジャケット：原作クロノのものに、下半身をロングスカートにしたもの

趣味：仕事、ぬいぐるみ集め

好きなもの：家族、仕事

嫌いなもの：犯罪者、甘い食べ物

特技：覚えた事を忘れない

苦手な事：特に無し

この世界の本来の【クロノ】。

女性なので、原作より多少丸い性格をしている。ハイスペックな弟の存在や度重なる転生者との戦いで、原作以上に強い。

自分の体格を気にしており、よくマッサージなどをしている（リンディにはばれればれ）。

因みに家事の腕前は普通。

若干ブラコン。

Ｓ２Ｕ

原作と同じ。

カレル・小川

外見：耳が隠れるくらいの水色の髪に青い瞳で中の上程度の顔、身長はフェイトと同じ位

年齢：無印で九歳

魔力：ＡＡ＋（青緑色）近代ベルカ

ランク：無し

バリアジャケット：ダークグリーンの着物に紺色のマフラー、肩に銀色の金属鎧がついている（イメージはうたわれるもののベナウィ）

趣味：お笑い番組を見る事

好きなもの：運動、お笑い番組、辛い食べ物

嫌いなもの：ヘイト系、最低系転生者（特に刃）、粘り気のある食べ物（納豆など）

特技：身体が柔らかい

苦手な事：鈍感（自分以外にも）

才能、家を望んだ転生者。父は地球人だが、母が元聖王教会所属の騎士。

遠見市に住み、私立聖祥大学付属小学校に、バス通学をしている。
なのは達とは違うクラス。
真面目で熱血漢だが、暑苦しい部分もある。
偶然フェイトと関わるようになり、原作に介入する事になった。フェイト、アルフとの仲も良く、物語を少しでも良くしようと思ってる。
母親からの手ほどきで、地球の転生者では上位に入る実力を持つ。

ゼファー

外見：柄が緑のハルバード
待機形態：緑と銀の玉が順番に繋がった数珠のような腕輪

人格搭載型アームドデバイス。柄の先端、斧や槍がつく所のすぐ下に、グラーフアイゼンと同じタイプのカートリッジシステムが搭載されている。
声は若い男性。テンションが高く熱血馬鹿。

神道刃

外見：背中まである赤い長髪、紫の瞳をもつ桁違いの美少年、身長はユーノより少し高い

年齢：無印で九歳

魔力：ＳＳ（虹色）

ランク：なし、古代ベルカ

バリアジャケット：胸元を開けた黒いコート（イメージはＤＭＣのダンテ）

趣味：女の子と遊ぶ事（美少女のみ）

好きなもの：美人、自分

嫌いなもの：原作の男性キャラ、他の転生者全て、自分の思い通りにならない事、自分より優れている男

特技：ナンパ

苦手な事：すぐに興奮し周りが見えなくなる

最強の肉体、リンカーコア、海鳴に生まれる、女たらし、戦いの才能、最高の容姿、強運、自分の考えたロストロギアクラスのデバイスの適合者になる事を望んだ転生者。自分こそ主人公と信じ、行動している。自分勝手でハーレムを狙っている。

幼少の頃からなのはと付き合いがあるが、高町家からは好ましく思われてない。

多少鍛えてはいるが、あくまで我流な上、実戦も素人である転生者だけなので、カレルと互角なのも能力のおかげ。全力のフェイトには劣る。ただしそれは現在の状態で、潜在能力は高いので鍛えれば強い。

新月の書

外見：赤黒いカバーに銀の逆十字架が描かれた魔導書

待機形態：銀の逆十字架のネックレス

刃のイメージを魔力で再現する能力を持ち、所謂【自分の知る漫画やアニメ全ての技、能力全部の使用】を疑似的に可能にしたデバイス。燃費も恐ろしく良く、使い方によっては、文字通りなんでもできる。刃にしか扱えず、刃が死亡した場合消滅する。

アカシックセイバー

外見：金と銀の大型で銃身の長い銃に下部から手の部分まで刃が伸びている（イメージは、ディバイダー９９６の第二形態を簡略化したもの）

待機形態：新月の書の一部なので同じ

銃の中心にリボルバータイプのカートリッジが搭載されている。人格搭載型だが殆ど喋らず、時々刃を肯定するくらい。声は低い女性。

リンディ・ハラオウン

原作と変わらず。

エドワード・リミエッタ

エイミィをそのまま男性化させたようなあほ毛の少年。
クレア、クロノとも仲が良く、よくクロノと二人掛かりでクレアをからかう。

高町なのは

基本原作通り。刃に対して恋心を抱いていたが、最近不信に思っている。

ユーノ・スクライア

刃の家に世話になってるが、扱いは悪い。ジュエルシードの件で、自分にも非があると思い耐えている。
今の所は、なのはに対しての恋愛感情は、少し気になる女の子程度。

フェイト・テスタロッサ

カレルとの出会いて、原作より明るい。カレルに対しては今の所、友愛のみ。

アルフ

基本原作通り。カレルの事も信頼している。ただし刃は【臭い】らしい。

ギル・グレアム

闇の書封印にクロノの協力を求めようと考えてる事以外は原作通り。

リーゼ姉妹

原作通り。

八神はやて

幼い頃から転生者に言い寄られた結果、男性恐怖症になってしまった。人付き合いも苦手になっている。

クロノの使用魔法

スティンガーレイ／Ｓｔｉｎｇｅｒ　Ｒａｙ.

原作と同じ。主に対人非殺傷攻撃に使用。

フロストキャノン／Ｆｒｏｓｔ　Ｃａｎｎｏｎ.

ブレイズキャノンの氷結版。上手く使えば、敵を凍結停止させられ、最大出力なら封印にも使用できる。

アイシクルバレット／Ｉｃｉｃｌｅ　Ｂｕｌｌｅｔ.

氷柱を撃つ射撃魔法。物理的な攻撃なので、対物攻撃として使用。

アイシクルブレイド／Ｉｃｉｃｌｅ　Ｂｌａｄｅ.

ローランの先端から氷の剣を形成する。近接武装として使用。大きさも変えられ、大型の薙刀としても使える。
勿論槍術は習得済。

ダイヤモンドダスト／Ｄｉａｍｏｎｄ　Ｄｕｓｔ.

氷弾の拡散弾。連射はできず一発の威力は低いが、遠距離での弾膜による牽制、零距離での破壊力は高い。

グラスコフィン／Ｇｌａｓｓ　Ｃｏｆｆｉｎ.

エターナルコフィンの簡易縮小版。ローランで触れた相手を凍結させる。
なお、この魔法はグレアムから直々に教わった。

ランページブリザード／Ｒａｍｐａｇｅ　Ｂｌｉｚｚａｒｄ.

クロノの奥の手その一。自身の周囲を無差別に凍結させる空間攻撃魔法。デアボリック・エミッションの氷結版のような魔法。消耗が激しく、二回使用はできない。

アイスドール／Ｉｃｅ　Ｄｏｌｌ．

奥の手その二。自身に何かが触れた瞬間、その部分を凍結硬化させる防御魔法。発動中は魔力を消費し続け他の魔法の使用が難しくなる。攻撃能力は著しく低下する分防御力は高い。

EP．４　開戦（前書き）

先日、日刊ランキングにランクインしていました…

皆さんありがとうございます

EP．4　開戦

顔をマフラーで隠したハルバードを持つ少年、カレルは混乱した。
ハラオウンと名乗る人物が二人現れた事に。
転生者か原作との相違点かはわからないが、アルフが攻撃するのに便乗して逃げる。おそらく刃もフェイトを逃がす為に行動するだろう。
そう思い、今はこの場から離脱する事にした。クロノに謝罪しながら。

絶世の美少年、刃も驚いた。クロノのバリアジャケットが違う。そしてもう一人のハラオウンに。
おそらく相違点なのだろう。あの少女も、自分のハーレムに追加される為に存在するオリキャラであると。
そう思いながアカシックセイバーを握り締めた。

「双方武器を収めて」

「そこの君達もだ。事情聴取に応じてもらう」

クロノとクレアは戦闘を中断するのを呼び掛ける。

「時空管理局？知らないな！」

先に行動を起こしたのは刃だ。

「魔法を使用していて知らない？」

（やっぱりそう来たか）

クロノの予想通りだった。

知らなければ何をしても許される。そう簡単なものじゃないから。

「おそらく現地住人ね。偶然魔法と出会う。有り得なくはないわ」

クレアは冷静に判断した。

実際、彼女達の師であるグレアムも偶然魔法と出会った。考えられる事である。

「とにかく、このまま戦闘行為を続けるな…っ！」

突如上空から魔力弾が降り注ぐ。アルフだ。

クレアの障壁で全員無事だが…

「フェイト、カレル！撤退するよ！離れて！」

さらに自分の周囲のスフィアから魔力弾を発射する。

クロノはなのはを腋に抱えて飛び上がり回避する。

「クロノ、そっちは任せたわよ」

「了解」

同じく回避したクレアにフェイト達を任せ、自分はなのはに声を掛ける。

「君、大丈夫か!?」

「は、はい!大丈夫です」

抱き抱えられている状況に驚きつつも、なのはは落ち着いて答えた。

「このＫＹ!なのはから離れろ!」

刃は銃口をクロノに向ける。

クロノがなのはに触れているのが気に入らないのだ。

「またＫＹか。僕の何処がＫＹなんだい?」

「決闘の邪魔をすんな!ジュエルシードを賭けた神聖な戦いを妨害するなんて、頭おかしいんじゃねえか?」

クロノは呆れた。このまま戦い続け、ジュエルシードが暴走したらどうするつもりなのかと。

「決闘を神聖化するなんてナンセンスだ。それよりもこのまま戦い、暴走したらどうするつもりなんだい?」

「何度でも止めるさ!それに時空なんちゃらって、怪しい連中の言う事なんか聞くか!」

(さあ、怒れ。そんで攻撃してこい!そうすれば正当防衛も成立する!)

刃はクロノが攻撃するのを待ち、ひたすら挑発した。しかし当然ク

ロノはその事を読んでいる。それに、クレアも攻撃する訳がない。そんなに気の短く、考えの浅はかな人間に、執務官など勤まらないからだ。

「…まあここは管理外世界だ。管理局を知らない可能性も否定できない」

「管理外？だったら来るなよ！見ず知らずのよそ者がでかい顔すんじゃねえ！」

（こいつ…典型的すぎる）

あまりにも予想通りすぎて笑ってしまいそうな位だ。刃の言う事は、ウル〇ラマ〇に地球から出て行けと言ってるようなものである。とにかくクロノは刃の暴言を受け流し続けた。戦わずにすむならそれにこした事はないからだ。

フェイトは原作通りジュエルシードに飛び掛かるが、クレアの魔力弾によって迎撃される。そして墜落したフェイトを受け止めたアルフに狙いを定めた。間に割り込むなのははいない。

「させるか！」

『いよっしやあ！』

カレルが割り込みゼファーに魔力を込める。その魔力と展開された

ベルカ式の魔法陣に驚いた。

「斬空牙！」

ゼファーの斧が輝き、振るうと同時に斬撃波が放たれる。そして続けて、槍の部分を地面に突き刺す。

クレアは防御は危険と判断し、上空に回避。再度Ｓ２Ｕを向ける。

「爆裂剛波！」

突き刺さった場所に魔力を流し爆発を起こす。爆煙が巻き上がり、姿をくらました。

「煙幕！？」

無理に戦う必要は無い。捕まらなければ良いだけ。

カレルもアルフに掴まり転移、離脱した。

「エド！」

『多重転移？ごめん、逃げられた！』

相棒の報告に顔をしかめるが、逃走を許してしまった自分のミスと判断し、すぐさま残りの一組…なのは達に視線を移した。

（畜生！どうしてこいつは冷静なんだ！）

刃は焦っている。目の前のクロノは一向に襲ってこない。何を言っても受け流してしまうのだ。
なのはも呆れ始めている。

「刃、落ち着いて。彼らは敵じゃないよ」

時空管理局を知るユーノは刃を止め出した。管理局と敵対する必要は無い。むしろ、味方になってくれるはずだから。

「うるせえ！てめぇは黙ってろ！」

ユーノを無視し、クロノを睨みつける。

（ユーノへの態度もアレか。ここまで欲望に忠実だと、いっそ清々しいな）

だが、あまり時間を掛けるのも得策ではない。

「君が僕達を信用できないのは重々承知している。だが今は話しを聞かせてもらえないか？こちらに君達に危害を加える気は無い」

クロノは優しげに声を掛ける。事情聴取に応じてほしい。ただそれだけだから。
しかしその態度が、余計に刃を苛立たせる。しかし、このままだとクロノと戦えない。オリ主である自分がクロノを嬲る事ができない。
ならばいっそ…

「黙れ！怪しい奴は立ち去れ！」

銃口に魔力を収束させる。
自分は管理局は知らない。だから攻撃して良いんだ。子供のような言い訳を考えながらその魔力を放つ。

「ゲシュタルトバスター！」

銃口から虹色に輝く大型の砲撃が放たれ、クロノに襲い掛かる。

（馬鹿！なのはもいるんだぞ！？）

当たればなのはを巻き込む。防ぎきれるかもわからない。
クロノはジュエルシードから離れるように回避する。

［姉さん、こいつは僕がやる。姉さんはロストロギアを！］

［魔力に反応して、暴走するかもしれないし…うん、任せたわ］

クレアはジュエルシードの確保に向かった。
あの少年はクロノ一人で十分だろう。あの少年は、今まで戦って来た連中に似ている。力に頼りきった連中と。

「なにをしているんだ刃！なのはを巻き込む所だったじゃないか！」

「あいつがなのはを盾にしてんだよ！卑怯者め！」

刃は焦りによって周りが見えていない。とにかく自分を正当化させる事に必死だった。

「ちっ…」

クロノは顔をしかめる。彼は自分を狙う。だがこのままだとなのはを巻き込む。

（仕方ない）

「君、飛べる？」

「はい」

「すぐに離れて。そこのフェレットと一緒に」

「わ、わかりました」

クロノはなのはを放し、直ぐさま彼女から離れる。なのはもユーノを連れて離れた。そしてなのは達の前にクレアが盾になるように立つ。

「彼、あなた達の友達？」

「はい…」

「あまり言いたくないけど…付き合い方、考え直した方が良いわよ」

「……」

（刃君、私がいるのに撃ったよね。わざと？それとも気付かなかっただけ？）

なのはは困惑している。

彼は優しかった。自分にも、友人達にも。だが、最近の彼はおかし

い。ユーノへの態度は冷たいし、先程の少年への言動もだ。その疑心は少しずつ少女の中で大きくなっていった。

「なのは、大丈夫？」

「大丈夫だよ。ありがとう」

なのははユーノに小さく微笑んだ。

「さて…公務執行妨害で、少し拘束させてもらう」

「権力の犬め！平伏すが良い！」

『Ｐｅｎｄｕｌｕｍ　Ｓｈｏｏｔｉｎｇ』

銃口から十本のレーザーが広がるように放たれる。そしてクロノを囲むように、四方八方から襲い掛かってきた。

「この軌道…誘導弾か」

素早く分析し、高度を上げる。予想通り追い掛けてきた。

「逃げても無駄だ！」

刃は追撃するように飛翔しクロノを追い掛ける。

クロノの後方には、魔力のレーザー…ペンダラムシューティングとその後ろに刃がいる。

（レーザーで防御を崩して本体で攻撃…って訳か。なら！）

クロノは停止しローランを構える。

そしてレーザーが命中する瞬間、下に落ちるように避けた。

「何！？」

レーザーはクロノがいた場所で衝突し合い爆散。追撃で振り下ろしたアカシックセイバーも空振りする。

「凍えろ！」

『Ｆｒｏｓｔ　Ｃａｎｎｏｎ．』

ローランの先端から冷気の砲撃が放たれる。

「防げ！」

『Ａｃｃｅｌｅｒａｔｏｒ．』

新月の魔導書が開かれ、頁が一枚破れ刃の前にバリアが展開される。

そのバリアはフロストキャノンが命中するとそれを反射した。

「っ！」

直ぐさまシールドを張り防ぐ。そしてシールドは凍り付き崩れた。

（反射か。面倒なモノを…）

心の中で舌打ちするが、直ぐに体制を立て直す。
アカシックセイバーを振り上げた刃が迫っているからだ。

「そら！」

「させるか！」

『Ｉｃｉｃｌｅ　Ｂｌａｄｅ．』

ローランの先端が凍り付き、そこから氷の剣が伸びる。アイシクルブレイドで受け止める。刃は続けて切り付けるが二度、三度と受け流し、弾き飛ばした。

「なんなんだよお前は！」

原作と違う魔法。こんな魔法はクロノは使わないはずだから。

「最初に名乗ったはずだ。クロノ・ハラオウンだ！」

自らの名を叫び、薙刀の形になった杖を構える。

（まさか転生者？いや、落ち着け…）

原作キャラと同じ名前…有り得ない。だが自分のやる事は変わらない。なのはに自分の強さを見せ付けるだけだ。

「調子に乗るなＫＹ！」

刀身に魔力を追加し切り掛かる。その刃は受け止めようとした氷の剣を切り裂いた。

（破壊力は上か。だが…！）

大振りの攻撃はスキが大きい。振り下ろされたアカシックセイバーの銃身を踏み回し蹴りを繰り出す。

「げふ！？」

勢いよく頭を蹴られ、一瞬視界がブラックアウトする。よろけたスキに地面に蹴り飛ばした。

「こ…の…！」

「とどめだ！」

ふらつきながら立ち上がる刃を地面に押し倒し、馬乗りの状態でローランを鳩尾に押し付ける。

「頭を冷やしてろ！」

ローランが触れた部分を中心に刃の身体が凍り付いていく。

「ば…ま、待て！」

「凍てつけ！」

『Ｇｌａｓｓ　Ｃｏｆｆｉｎ.』

ついにデバイスもろとも全身が凍り付いた。
だがその姿は決して美しいものではなかった。敗北への落胆と怒りが入り混じった形相は、その美しい容姿をも歪めている。

「こ、凍っちゃった…」

「対人用の凍結魔法…」

二人共目を見開き驚いている。
自分達より圧倒的な魔力を持つ者が、いとも簡単に凍り付けにされたのだ。

「死んではいない。後で解凍してあげるから、安心してくれ」

クロノは杖を離しなのは達に歩み寄る。

「「はい…」」

二人が頷いたと同時に、タイミングを見計らったかのようにモニターが現れる。そこに映っているのはクロノの母、リンディだ。

「二人共、お疲れ様」

「すみません…片方は逃がしてしまいました」

「僕も、戦闘になってしまいました」

モニターの向こうにいたリンディに謝る。

「んま、大丈夫よ。でね、ちょっと話を聞きたいから、そっちの子

達をアースラーに案内してあげてくれるかしら?」

「了解です。すぐに戻ります」

通信が切れ、モニターが消える。

「すまないけど、ちょっと来てもらえないかな?話しを聞きたい」

「はあ…」

「わかりました…」

二人はクロノの言葉に頷きアースラへと転移するのだった。

EP．４　開戦（後書き）

お気に入り２００超え？いつの間に…

EP．5　アースラ（前書き）

低スペックの私の脳ではこれが限界でした…

私の考えを後書きにまとめました

EP．5　アースラ

ここは時空管理局の巡行艦【アースラ】。クロノ達はその艦内にいた。
クレアの手には新月の書が、クロノは凍り付いた刃を担いでいる。

［ユーノ君、ここは？］

［時空管理局の次元空間航行艦船の中だねえっと…簡単に言うといくつもある次元世界を自由に移動するための船］

［あ…あんま簡単じゃないかも…］

薄暗い通路を歩きながら、なのははユーノの説明を聞いている。
すると不意にクレアが立ち止まり振り向く。

「いつまでもその格好とゆうのも窮屈でしょ？バリアジャケットとデバイスは解除して良いわよ」

「あ、そっか。そうですね、それじゃあ…」

なのはがレイジングハートを待機状態にし、制服姿に戻る。

「君も元の姿に戻ってもいいんじゃないか？」

続けてクロノがしゃがみ、ユーノに変身魔法を解くよう促す。

「あ、そういえばそうですね。ずっとこの姿でいたから忘れてました」

「？」

二人の会話の意味がよくわかってないなのはは、ユーノの方を見ながら首を傾げた。するとユーノの身体が光りだし、一人の少年へと姿を変えた。

「なのはにこの姿を見せるのは初めてになるのかな…？」

「……え？…ふぇぇぇぇ！？」

なのはは取り乱し、ユーノは不思議そうに首を傾げる。

「ゆゆ、ユーノ君って、男の子だったの！？」

「……あ、あれ？なのはに話してなかったっけ？ていうか、刃から聞いてない？」

「え！？聞いてないよ！知らないよ！！」

「……本当？」

頭を掻きながら首を傾げる。

「うん！私は知らなかった！」

「ごめん、刃は気付いてたから話てて…。なのはにも知らせてると思ってた…」

「私だけ仲間外れ！？酷いよ～！」

なのはは手を振り回しながら駄々っ子のように吠える。

「本当にごめん……」

物腰低そうに謝罪する。しかしその様子はユーノの容姿もあってか、可愛らしくも見える。

「ああ、そういえば彼もそろそろ解凍してあげた方が良いわね。クロノ」

「了解」

クロノは刃を下ろし、額にローランを突き付ける。

『Ｔｈａｗ.』

すると表面の氷が割れるように元の状態に戻った。

「な、なんだ!?ここは!?」

床に座り慌てふためきながら周りを見渡す。いくら原作を知っていても、自分の状況を理解できていないようだ。

「ここは僕達の所属する艦、アースラの艦内だ」

そう言ってアカシックセイバーを拾う。

「あ!俺のアカシックセイバーを汚い手で触るんじゃねえ!お前もなんか言ってやれ!」

『触らないでください不細工。霜焼けになります』

クロノから取り戻そうとするが、子供から玩具を取り上げた大人のようにヒラリとかわす。

「まったく…所持者に似て口の悪いデバイスだな」

先程は霜焼けどころか凍り付けになっていたというのに…

それでもなおクロノから取り上げようとする刃をクレアが制止する。

「悪いけど貴方はこちらに攻撃してきた。私達としても相当の対応をさせてもらうわ」

「決闘の邪魔をしたKYが悪いだろ？親戚だからってこんな男無理して庇わなくて良いだぜ」

刃はいつも少女達にするような優しげな笑顔で言う。しかしその言葉も笑顔もクレアの神経を逆なでるだけだった。

「あなた、何を考えているの？あのまま戦闘行為を続けていたら、いつ暴走してもおかしくないのよ？」

「それに時空管理局を知らないといっても、いきなり攻撃してくるんだ。危険人物扱いされても良い位だ」

刃は再び噛み付くようにクロノを睨む。

「フン。俺は怪しい奴から身を守ろうとしただけだ」

「どう見てもあなたから攻撃して来たわよね？」

「…なのはを変態から助けようとしただけだ！」

「まあ、女性の身体をベタベタ触るような状態になってしまったのは謝罪しよう」

いくら攻撃から逃れる為とはいえ、なのはを抱き抱えていたのだ。下心が無いとはいえ謝るのが紳士だろう。

「ほら見ろ！なのはだって嫌だったろ？」

自分に惚れている少女が、他の男に触れられている。刃はなのはを味方に付けようと試みた。

「えっと…別に嫌じゃなかったよ。私を守ろうとしてくれてただけだし」

「それに刃はなのはごと攻撃していたじゃないか」

なのはも否定し、ユーノからダメ出しされる。まさに四面楚歌の状況だ。

（な、何故だ？この女も俺に味方しないし、なのはも嫌がってないだと！？）

刃は今までずっと女性に好かれていた。いつも女性達が味方してくれている。

ニコポもナデポも無くても確実に魅了できるよう、【女たらしの才能】と【最高の容姿】を手に入れた。幸運があったので思惑通り…

それ以上の効果を得られた。
他の転生者が自滅しなのはと関係を持ち、アリサとすずかを誘拐されたのをも助けられた。
だが何故こんな事に？
（まさかＫＹ好きの転生者？）
有り得る。
今まで女性転生者とも争った事がある。百合ハーレムを目指す者、自分の好きなカップリングを目指す者、ハーレムを妨害する者。どれも敵である事は変わらない。美少女を攻撃するのは心が痛んだが、転生者と割り切り戦ってきた。
（今は部が悪いか）
とりあえず今の所は我慢し、リンディを負かして惚れ直させれば良い。この少女より早くリンディを説き伏せ、後日確認すれば良い。万が一転生者じゃないなら、この件で自分の株が上がるはずだ。良い言い方をすればポジティブであるが、考えている事は実に邪である。
「…ごめん」
謝ったが、そこに心は全くこもっていなかった。
「さて、艦長が待っている。行こう」
クロノの呼び声で再び歩き出した。

「艦長、来てもらいました」

クレアがそう言いながら扉を開けると、そこには盆栽がいくつも置いてあり、畳とその上に茶道用具一式、そしてししおどしも置いてあり日本のイメージを無理矢理表したような光景が広がっている。そして赤い絨毯の上に、優しそうな笑みを浮かべた女性…リンディが正座していた。

「お疲れ様、まぁ三人とも、どうぞどうぞ。楽にして」

リンディに驚きながら、対面にするように三人は正座をし。その後クロノとクレアがお茶と羊羹を差し出し、リンディの両隣に座った。そしてお互い自己紹介をし、事のいきさつを話し始めた。

「なるほど…あのロストロギア……ジュエルシードを発掘したのはあなただったんですね」

「…それで、僕が回収しようと」

「立派だわ」

「だけど…同時に無謀でもあるわ」

笑顔のリンディに対し、クレアは厳しい口調で続けた。
その言葉に少しショックだったのだろう。ユーノは顔を伏せる。

「あの、ロストロギアって、何なんですか？」

なのはが話題を変えるように質問をする。

「遺失世界の遺産。……って言ってもわからないわね」

そこからロストロギアについて話しを始めた。

しかしクロノは別の事を考えている。この後のリンディの言葉だ。

【なのはの好意を利用しようとしている】【自分から協力を申し出させる】と言われているアレだ。この真意を知りたかった。母は本当に利用しようとしていたのだろうか？

もし本当ならこればかりは許せない。刃に便乗するのは癪だが今回は別だ。

［艦長、彼らをこれからどうさせるつもりですか？］

話しを続けながら念話を飛ばす。マルチタスクを利用すれば造作ない事だ。

［とりあえず民間人だし、介入しないよう伝えてから一旦帰ってもらって、落ち着かせてからまた話しを聞きましょう］

［何故一旦帰らせる必要があるのですか？今この場で止めさせれば良いだけでしょう？］

だからこそ誘導しているようにしか思えなかった。

［そうね。でも、きっとこの子達は無理強いすると黙って行動するわ。だからこそ自分の置かれた状況を理解し、いかに危険かを考える時間を与えるべきだと思うの］

クロノは絶句した。たしかに相手は九歳の子供なのだ。下手に抑えると反発し、勝手な行動に走る。自分の住む町に危険が迫りなおかつそれと戦う術を持つのだ…予想は難しく無い。
だからこそ、なのはの代わりを勤める管理局の存在を示し、ユーノと話し合い危険を冒す必要の無い事を理解させる時間が必要。そう判断しての事だろう。

［お互いに話し合って、また明日って伝えるわ］

だが目の前の男はそうは思わない。自分もついさっきまで同じ考えだったから。

［ですがそう言うと、自分から協力を申し出るのを待っているように聞こえますよ］

［あら、そうかしら？］

［たしかに僕達だけで回収は可能です。ですが三人の能力を見る限り、こちらの指揮下にいた方がスムーズに事が運びます］

［それもそうなのよね。正直に言うと【欲しい】わ。だけど危険に誘導するなんて言語道断。諦めてくれるのを祈りましょ］

［万が一協力を申し出たら？］

［もう突き放しても無駄って事ね。三人の安全を確保する為の準備をして、こちらの指揮の下協力してもらいましょ。じゃないと危なくて見てられないもの。本当はこのまま諦めてくれるのが嬉しいんだけど…］

リンディは緑茶に砂糖とミルクを入れて飲み、湯呑みを置いた。

「これよりロストロギア、ジュエルシードの回収については、時空管理局全権を持ちます」

「少し言い方を変えてみるわ。アドバイスありがとう♪」

クロノは少しホッとし胸を撫で下ろした。これならいらぬ誤解も無さそうだ。

「「え……？」」

リンディの言葉になのはとユーノは困惑する。逆に刃は心を踊らせニヤつく。クロノはそれを見逃さなかった。

「あなた達は今回のことは忘れて、それぞれの世界に戻って、元通りに暮らすといいわ」

クレアはそんな事を話していたのを知らずにリンディに続く。

「でも、そんな…」

「次元干渉に関わる事件だ。民間人に介入してもらうレベルの話じゃない」

クロノは刃を見据えて突き放すように口を開く。

なのはとユーノは押し黙る。

「あなた達は本当に危険な事に首を突っ込もうとしているの。たし

かにこの町が心配なのはわかるわ。だけど私達を信じてちょうだい。とりあえず今日は帰って、三人でよく話し合って…ね？」

刃は一瞬ギョッとする。言っている事が少し違う。原作では帰って話し合えとしか言わなかった。何故？

しかしこのまま帰る訳にはいかない。少しでも格好良く見せたいからだ。

「おい！なんかおかしくないか？」

刃が腕を組みリンディを睨む。

「なんで話し合う必要がある？介入してほしくないならそう言えば良いだけじゃないか」

「私は危険を理解してほしいだけよ。それに、無理強いしても勝手に介入するでしょう？」

リンディの言葉を無視して刃は話し続ける。

「ハン！どうせ俺達を利用したいだけだろ？そうだよな、こんなに優秀なんだ欲しいに決まってる」

なのはに視線を移し、再びリンディを睨む。

「俺達から協力を申し出れば自分達の指揮下に入れて好きなように利用できる…卑怯だな、あんた」

「君、艦長に何を…っ！」

リンディは怒りをあらわにするクレアを真剣な表情で制止する。

「何を言いたいのかしら？」

静かに、そしてまっすぐ見据えながら口を開く。

「なのはや俺を利用しようとするお前らは信用できないって事だよ！」

立ち上がってリンディを指差し、声を張り上げる。

「人手が足りないんだろ？そんでついでに管理局にもスカウト…か。こんなせこい上に汚いやり方は許さねえな！正面から正直に言いやがれよ！あんた、最低だな！」

（決まった！そんでリンディが謝ってそんで…）

自分の行動に自画自賛しつつ、今後の事を考える。あの少女も何も言って来なかったから転生者でない、または原作知識無しの可能性がある。

またもハーレム要員が増える予感に心を踊らせていたが…

「…そう。なら無理に手伝わなくて結構よ」

「え？」

リンディは笑顔で答えた。余りにも素敵な笑顔が逆に怖い位に。

「たしかに管理局は万年人手不足よ。それにあなた達がいるとより作業が楽になるのも事実…。でもあなた達にだって人生があるから

強制はしないわ。それに今回の件もクレアとクロノで対応できるし…」

「こんな奴が？い…言っておくが、俺は本気を出してないぞ！」

「クロノも同じ。それにクレアの方がクロノより魔導師として上よ」

二人の実力に言葉を失う。あのＫＹより強い？信じられなかった。いや、信じたくなかった。

「ああ、あとユーノ君とジュエルシードの捜索願いもさっき確認したわ。だから安心して良いのよ」

「あ、そうなんですか」

ユーノは安堵したが、部族の皆に心配をかけてしまった事に罪悪感が沸き上がる。

「ぐ…」

「でも、あなたが私達の妨害をするなら…」

リンディは笑顔を止め、刃をキッと見詰める。

「それ相当の対応をさせてもらいます」

威圧感。いや、彼女の艦長としての、一流の魔導師としての迫力に刃は圧倒される。

なのははただ呆然とし、ユーノは管理局に喧嘩を売る刃に慌てふためいている。

「……まあ、そういった事もよく考えて話し合ってちょうだい♪誤解させるような言い方をしてごめんなさいね」

再び優しげな笑顔に戻る。先程までとは別人のように。

「送っていこう。元の場所でいいね？」

「「「……はい」」」

クロノが立ち上がり、三人はその後をついて行った。

その道中、刃はずっと不機嫌だった。今日は何一つ良い事が無い。

［あの…ごめんなさい。なんかリンディさんを怒らせちゃったりして…］

なのはは周りに聞こえぬよう念話で謝る。

［構わないさ。こちらも誤解を招くような言い方をしてしまったし。とにかく一度話し合ってくれ］

そして転送ポートの前に着いた時、クロノはユーノに小さなメモをこっそりと手渡す。

［何かあったらここに連絡してくれ。僕で良ければ力になる］

［あ、ありがとうございます］

クロノは細く微笑むと転送の準備を始める。

「じゃあ…気をつけて」

「はい」

「あの、ありがとうございました」

「チッ…」

こうして三人を元の公園に送り、クロノも仕事に戻った。

三人…できれば二人が協力を申し出るのを祈りながら。

無事、原作を進められる事を。

EP．5　アースラ（後書き）

あくまで【リンディはなのはを利用する気は無い】を前提とします
なのは達を一時帰宅させたのも、危険を理解させる為
後日なのは達の協力を受け入れたのも、断って勝手な行動をされる
より、指揮下に入れた方が安全だと考えたから（協力してほしいと
いった気持ちもあるにはあったが、民間人である二人の安全の方が
重要）

シリアル？でなのはとユーノしか出撃していなかった件
攻撃性が高くなかったから？

あくまで私の考えです
人によって考察は様々ですから、【こんな考えもあるんだな】程度
でかまいません

EP．6　一緒に（前書き）

ＰＶ４００００…

あ、ありがとうございます！

EP．6　一緒に

三人が帰ってからも管理局の仕事は終わらず、今は前回のなのは達の戦闘記録を調査している。

「うは、すごいね。どっちもＡＡＡクラスの魔導師だ！」

そしてパネルを操作し、その調査を行っているのが、アースラの通信主任兼執務官補佐のエドワードである。エドワードの後ろにはクロノとクレアが立っており、映像をじっと見つめている。

「ええ……」

「男の子三人組も凄いし…」

ユーノ、カレル、刃へと視線を移す。そしてなのはを見た後、ニヤニヤしながらクロノの方を向く。

「こっちの白い服の子は、クロノ君の好みっぽい可愛いらしい子だし。どうだ、実際は？」

「ノーコメントで」

クロノはそっぽを向いて受け流す。彼は恋愛事に興味が薄いからだ。

「おやおや～？じゃあ義妹候補としてはどうかな？クレアちゃん」

続けてクレアに話題を振る。義妹候補と言いながらもからかっているような口調だ。

「少なくとも、クロノの手料理を笑顔で完食できる娘じゃないと認めないわ」

腕を組み、当然のように言う。

「うわ！余程味覚が狂ってない限り、そんな娘いるわけないじゃん！ハードル高すぎだぞ！」

「う、うるさい！いいじゃないか料理くらい！」

顔を赤くし喚く。その表情はただの十二歳の少年の顔だ。

「そんなんじゃ女の子にモテないよ～」

「料理が得意でもあんまりモテてない君に言われたくない！」

エドワードも振り向き、からかうように肘で突っつく。

「でもあれは酷いわね。拷問に使えるレベルよ」

「艦長でさえ砂糖加えても食べれないしね。調理過程も見た目普通なのに、どうしてあんなにマズいんだろ？」

「ううう…知るか」

姉と友人からの評価に少し涙目になるクロノであった。

そうしている内に、リンディが扉を開けて入ってきた。その格好は制服ではなく、落ち着いた雰囲気の私服である。

「あ、艦長…」

それに気付いた三人がリンディの方を向くと、リンディも笑顔で答え、そのままクロノとクレアの間で同じようにモニターを見る。

「ああ、この子達のデータね？」

「はい」

リンディの問いかけにクロノが答えると、彼女は真剣な表情でモニターを見上げる。

「確かに、凄い子達ね」

「これだけの魔力がロストロギアに注ぎ込まれたら、次元震が起きるのも頷けます」

「あの子達、なのはさん達がジュエルシードを集めている理由はわかったけど…」

視線がフェイトとカレルに移る。

「…こっちの黒い服の子達は何でなのかしらね？」

「随分と必死な様子に見えたし……何か、余程強い目的があるのかも」

クレアもアップになったフェイトの映像を見る。

クロノは黙って二人の会話を聞いていた。原作を知ってるとはいえ、

余計な事は言えない。下手に話しても情報の出所を聞かれてはアウト。転生に関わる事は転生者以外には知らせる事ができないのだ。たとえどんな手段を用いても…

それともう一つ気掛かりがある。フェイトに付いた転生者だ。カレルという名前以外は程情報が無い。何が目的で介入をしているのか、原作知識があるのかどうかも不明だ。

幸い、刃のように馬鹿げた力も無い。しかし、それ以外は別だ。ハルバードなどという複雑な複合武器を使いこなし、魔力運用も無駄が無い。対処できない程のレベルではないが、簡単にはいかないはずだ。

（せめて、刃と違うタイプだと良いが…）

そう祈りながら、心の中で小さくため息をついた。

なのは達三人はまだ公園にいた。刃の家は高町家から距離があるので、帰宅しては話すのが難しくなってしまうのだ。

「やっぱり、ここで終わりなのかな…」

なのははそう呟くが、このまま引き下がりたくない気持ちもある。この町を守りたいから。

「……畜生…」

刃は焦っていた。何めかもぶち壊されたこの状況。なのは達のやる気も失せ始め、介入どころかここで終了になってしまうかもしれないのだ。

「……僕は、正直潮時だと思う。これ以上二人を危険な目に合わせたくないし…」

「ユーノ君…」

ユーノは二人を巻き込んでしまった責任を感じている。だからこそここで手を引いて欲しいと思った。

しかし刃は諦めなかった。なんとしてでも介入すると。なのはのやる気を上げるにはどうすれば良いか?簡単な事だ。フェイトがいる。

「俺は止めないぜ」

「刃君…」

「刃、流石に管理局と敵対するなんて無茶だ。やっぱりプロに任せた方が…」

「いや、敵対なんかしねえよ」

立ち上がり二人の前に立つ。

「管理局に協力する…癪だけどな。第一、俺達がいた方が楽だって言っていた。つまり協力してくれた方が嬉しいに決まってる」

自信に満ちた声で二人に呼び掛ける。その容姿もあってか、何か一種の魅力すら感じる程に。

「俺はこの町を守りたい。管理局と協力すれば、より早くジュエルシードを回収し解決できる…違うか？」

「うん…」

なのはは小さく頷く。

「それにこのまま引き下がればフェイトと話しもできなくなっちまうぞ」

「……あ！」

そう、この件から手を引くという事は、フェイトとも関われなくなってしまうのだ。なのははなんとしてでもフェイトと話したい、決着を付けたいから…

「うん！頼んでみようよ！」

「決まりだな！ユーノはどうする？べつに部族に帰って良いぞ」

むしろ帰って欲しい。刃にとってユーノも邪魔でしかないから。

「二人を置いて帰れる訳ないだろ！僕も行くよ」

「ユーノ君……うん！皆で！！」

当然ユーノは帰る気は無い。むしろ自分が原因なのだ。一人で管理

局に協力する気でいたくらいだ。

（やっぱりか…。仕方ねえ。精々俺を引き立てろよ淫獣）

それぞれの思惑は違えど、介入する事を決意した三人であった。

ここはフェイトの拠点であるマンション。あの場から撤退したカレル達は、ひとまずここに戻って来た。

フェイトはソファーに横たわっている。やはりクレアの攻撃は効いたようだ。

「ダメだよ！時空管理局まで出てきたんじゃ、もうどうにもならないよ。逃げようよ…二人でどっかにさ…」

「それは…ダメだよ」

管理局という組織を相手にするには部が悪すぎた。いくら優秀な魔導師とはいえ、個人が組織に勝つのは簡単では無い。

しかしフェイトは止める事はできなかった。母親の為に…。絶対に。

「だって！雑魚クラスならともかく、あの二人は一流の魔導士だ！本気で捜査されたら…ここだっていつまでバレずに居られるか……あの鬼ババ、あんたの母さんだって、訳わかんないことばっか言うし！フェイトに酷いことばっかするし！」

アルフは我慢ができなかった。プレシアの行いに。こんなにも一生懸命な娘を…あんなふうに扱える彼女が理解できなかった。

「母さんのこと…悪く言わないで」

何をされようと、どんな仕打ちを受けようと堪えた。自分が悪いから、期待に答えられなかったから…そう自分に言い聞かせて。全てが終われば、また笑ってくれる、元に戻ると信じて。

「言うよ！」

アルフは涙ぐみ俯く。

「だってあたし…フェイトの事が心配だ！フェイトが悲しんでると、あたしの胸も千切れそうに痛いんだ……フェイトが泣いてるとあたしも目と鼻の奥がズンとして、どうしようもなくなるんだ！フェイトが泣くのも悲しむのも…あたし嫌なんだよ！」

ずっとフェイトが心配だった。誰よりも大切な人だから。

「……私とアルフは…少しだけど精神リンクしてるからね。ごめんね、アルフが痛いなら、私もう悲しまないし泣かないよ…」

「あたしは…フェイトに笑って幸せになってほしいだけなんだ！なんで……なんでわかってくれないんだよぉ」

「ありがとう、アルフ。でもね…私、母さんの願いを叶えてあげたいの…母さんの為だけじゃない…きっと、自分の為…だから…」

「約束して。あの人の言いなりじゃなくて…フェイトはフェイトの

為に…自分の為だけに、頑張るって。そしたら…あたしは必ずフェイトを守るから…」

それしか言えなかった。せめて彼女の意思の為に自分も戦う。必ず守る…絶対に。

「うん」

フェイトは小さく頷いた。

するとドアが開き、学校の制服姿のカレルが入って来た。

「追跡とか無さそうだぜ」

「ああ、すまないねカレル」

アルフは顔を拭いカレルの方を向く。カレルも気付いたが何も言わなかった。理由はわかっているから。

「……カレル。管理局も来たし、もう良いよ。これ以上はカレルに迷惑をかけちゃうし」

フェイトはソファーに座りながら言った。あくまでカレルは現地協力者。これ以上関わらせれば犯罪者として狙われかねない。

「あのな。今さら無いだろそれは」

近くの椅子に腰を下ろす。

「ここまでやったんだ。最後まで付き合うぜ」

「だけど、管理局なんだよ？一応あんたの母親も管理世界出身なんだろ。マズいじゃないか」

二人にはすでに自分の家族の事を話している。だからこそ管理局の存在も認知していた。

「もう遅いっての！」

椅子から跳ねるように立ち二人へと歩み寄る。

「すでに攻撃しちまったし。だから手遅れって訳だ」

微笑みを崩さず手を差し出す。

「刃ってやつとも決着を付けたいしな。トコトン付き合うぜ！」

あの男の自由にはさせない。絶対に。

「「カレル…」」

フェイトアルフは顔を見合わす。

「本当に良いの？」

「俺がいつ嘘ついた？」

「覚悟はできてるんだろうね？」

「あったりめえよ！」

最初に会った時から。原作に介入すると決めた時から。

「……まあ、あの臭い奴の相手も必要だし…フェイトが良いならあたしもかまわないよ」

アルフにとって刃は本能的にも嫌悪する存在だ。まるで発情期の猿のような…とにかくフェイトに近づけちゃいけない。
カレルを盾に使うようで心が痛むが、彼ならフェイトを守ってくれる。そんな予感がした。

「……ありがとう。うん、これからもよろしくね」

フェイトは笑顔で答えた。アルフだけじゃない。傍にいてくれる【友達】の存在に、言いようの無い喜びがあった。

「お、おう！俺に任せな！アッハハハハハハ！！！」

誤魔化すように高笑いをした。何故なら、自分の顔は熱いくらい赤くなっていたのだから。

（な、なんか顔が熱いんだが…。熱でも出たか？これからって時に冗談じゃねえぞ！）

少年の心に小さく芽生えた想いに気付かぬまま、少年と少女、その使い魔の夜は過ぎていった。

EP．6　一緒に（後書き）

フェイトは鈍感でも良いと思います

あれ？早くも候補から脱落？

EP．7　艦の日々（前書き）

少しですが彼女の登場です

EP．7　艦の日々

八神はやては普通の少女ではない。車椅子生活の孤児……それだけでは無い。彼女の周りはいつもトラブルが絶えなかった。
本を借りに図書館に行けばいつも誰かが本を取ってくれる。だがすぐに取ってくれた子は他の子と喧嘩をはじめてしまう。
しかも取ってくれた子は皆おかしい。善意を程感じないのだ。少女達は自分でない何かを見て、少年達の舐めるようないやらしい視線は寒気すら感じる。
そして今年に入ってからは、自ら【孤児】を名乗る者が何人も現れた。まるでその事をアピールするように話すのが信じられなかった。
それがとても不気味で、得体の知れない恐ろしさがあった。

高町なのは、ユーノ・スクライア、神道刃の三人はアースラに民間協力者として搭乗する事になった。
そして翌日、ここアースラの会議室にてアースラスタッフにリンディから伝達があった。
そこは薄暗いながらも床から明かりが差し込み、何か不思議な雰囲気を醸し出している。

「というわけで…本日0時をもって本艦全クルーの任務をロストロギア、ジュエルシードの捜索と回収に変更されます。また本件については…特例として…本ロストロギアの発掘者でもあり…結界魔導師でもあるこちら…」

「はい、ユーノ・スクライアです」

リンディの紹介にユーノが席を立ち挨拶をする。

「それから彼の協力者でもある現地の魔導師方」

「た、高町なのはです」

「神道刃だ」

なのはは緊張しながら、刃はふてぶてしく立ち名乗る。対照的な二人だが、聖祥の制服姿である事だけは同じだった。

「以上三名が臨時局員として事態に当たってくれます」

「「よろしくお願いします」」

「フッ…」

礼儀正しくお辞儀するなのはとユーノとは違い、刃はカッコつけるように小さく笑う。たしかにその美貌があってか格好良くは見える。だが状況が状況なだけで非常に態度が悪い印象を与えてしまっている。

クロノは刃の高慢な態度に頭を痛め眉間にシワを寄せ、クレアも苦笑いしながらなのは達を見る。するとなのはと視線が合い、なのははニッコリと微笑んだ。クレアはそれに答えるように小さく微笑む。刃が自分に向けられたと勘違いしているのには気付かなかったようだが。

そして会議が終わり、なのは達はクレアに呼ばれアースラの一室に集まった。

「さて、どうやらなのはと刃の二人は正式な魔法教育を受けていないのよね？」

なのは、刃には机が与えられ、ユーノは二人の前に立つクレアの隣にいる。

「はい」

「まあな」

またもなのはと違い自慢げに刃は答えた。

「……このままロクな教育も無く魔法を扱うのは危険…という訳で、私があなた達二人に教える事になったわ」

付け焼き刃だが有ると無いとでは大違い…と判断したのだろう。いくら能力が高くとも民間人、安全を確保する為に必要である。

「あれ？じゃあユーノ君は？」

「僕は学校を出てるから…」

「だからユーノには私の助手をしてもらう事になったの」

「ふ～ん。じゃあよろしくね、ユーノ君、クレアちゃん♪」

なのはは二人から魔法を教わる事に心を踊らしている。ユーノからも今まで教わって来たが、適性の異なる彼には限界がある。そこにクレアが加わるのだ、今までと違い、より一層魔法について学べる。刃も同じく楽しみにしていた。なのはと違い、クレアという美少女に教われる事にだ。十四歳にしては幼い容貌に艶やかな黒髪…リンディの容姿から予想できるように、将来が楽しみな少女である。

「そういえばクロノはどうしたの？」

「ああ、クロノならさっき海鳴に行ったわ。仕事にね」

「ＫＹが海鳴に？」

ここは海鳴の市街地。クロノは何人かのスタッフと共に現地に赴いていた。現地の調査とサーチャーの設置の為である。万が一市街地で発動した場合等、あらゆる可能性を考慮しながら調査をしていく。

「じゃあここからは各自サーチャーの設置に入る。作業終了後はここに再び集合、その後転移魔法でアースラに帰還する」

「「「了解」」」

クロノの指揮の下、スタッフ達は散開し作業を開始した。

「よし、行くか」

クロノも作業を開始したが、彼には一つだけ目的があった。仕事には関係の無い事…海鳴の景色をゆっくり見たかったのだ。
彼は転生者で、元々は日本人。日本の風景は懐かしい。実に十二年ぶりだ。
たしかに日本に似た世界も管理世界にある。だが地球では無い。だからこそここで作業をするのが楽しみだった。

（日本か……何もかも皆懐かしい…）

そんな某宇宙戦艦の艦長の台詞のような事を考えながら海鳴を歩き回っていた。勿論仕事も忘れてはいない。

（しかし…かなり忘れているな）

日本語だ。流石に十二年も触れなければ忘れてしまう。文字も読めないのが多い。それだけでなく、見た事のある店もあったがどんな店なのかがわからない。

（まあ良いか）

今の自分は異世界人なのだ。深く考えるのはよそう。クロノはこの風景を楽しみながら作業に戻った。

しかしクロノは気付いていなかった。自分を見るいくつかの視線がある事を。
転生者達だ。クロノ・ハラオウンの出現。それはアースラが現れた

事を意味している。何人かはこっそり覗いていたが、黙々と作業をするクロノに飽きて覗くのを止めていった。時折玉の輿狙いの転生者が声をかけるが、相手にせず作業を続け、いつしか転生者はいなくなっていた。

いや、一人だけまだ監視している転生者がいる。刃である。彼は新月の書を使いクロノを監視していた。理由はクロノが転生者かどうか調べているのである。

呼び出して転生について話せるか確認する方が手っ取り早いが、二人きりになるなんて気色悪いし呼び出す理由が見当たらない。よって監視をしていたのだ。

クロノが転生者なら、今考えられる行動ははやてとの接触である。地球に来て、なおかつ海鳴で一人で行動したのだ。実に怪しい。

自分も何度か接触する為に図書館に行ったが、転生者同士の足の引っ張り合いに巻き込まれたりと、遠目で一度見たっきりである。おそらくこいつも転生者のいざこざに巻き込まれるはず。残念がるクロノを見ようと監視を続けた。

しかしクロノは図書館に行かず作業を終え、集合場所へと歩き出した。結局刃は転生者でないと判断し監視を止めてしまったのだ。

そのため、この後の出来事を見逃してしまった。

クロノは手にした端末機でサーチャーを確認しつつ集合場所へ向かっている。すると前から声が聞こえた。

近づくとそこには、車椅子の少女と刃のように桁違いに整った顔をした一人の少年がいた。

（……まさか）

クロノの予想は的中している。車椅子の少女は八神はやて、少年は

転生者だ。しかしこの二人の様子がおかしい。

「俺さ、家族がいないんだ。両親も死んじまってさ」

「そ、そうなん……えっと…大変やな…。まあ私も似たようなもんやし…ほな私はこのへんで…」

自分が孤児である事を必死にアピールし、はやては顔を引き攣らせていた。

はやてに家に招待されそのまま住み着くつもりなのだろう。だがその思惑は失敗に終わりそうだ。どう見てもはやては少年を拒絶している。自分の立場からして今は接触するのはまずい。それにこのまま無視しても少年ははやてに嫌われて終わりだ。無視しよう。

そう思ったがクロノは通り過ぎなかった。

「君もか。寂しかったんだな…」

「い…嫌……」

少年がはやての頭を撫で出した。するとはやては泣きそうな表情でぎゅっと目をつぶり、怯えるように身体を震わした。

その様子があまりにも痛々しく、とてもほっとけない状況だった。

「君、止めないか！」

気が付いたら少年の手を取り、はやての頭から退かしていた。

「なっ！？」

「……！」

少年はここにいるはずのないクロノ・ハラオウンに、はやては突如現れたクロノに驚く。

「くっ…！このＫＹが！」

少年はクロノ睨みつけ腕を振り払う。

「初対面の人にＫＹ呼ばわりされる筋合いは無いんだがな」

「はあ？空気読めよお前。どう見ても…」

「どう見ても彼女は嫌がっているだろ！」

若干怒りが込み上げて来た。はやてが嫌がってなければ何も言うつもりは無い。だが泣きそうな程嫌がっているのだ。とても無視はできない。

「嫌がってる？そんな訳ないだろ？」

微笑みながらはやての頬に手を伸ばす。だがその手は払いのけられた。

「嫌……来ないで…」

「な！？」

はやてに拒絶され驚く。ニコポもナデポも無いのにどうして気に入られたと思ったのか不思議だ。

「馬鹿な……俺は超イケメンなんだぞ…有り得ねぇ……はっ！」

何か思い付いたようにクロノに振り向く。

「てめぇ、何しやがった！」

「何もしていないさ」

「嘘つくな！俺が嫌われるなんて有り得ない。お前が何かしたんだろ！」

そして殴り掛かってきた。

勘違いも甚だしい。顔が良ければ良いって問題じゃない。

クロノは呆れながらパンチを避け腕を掴み、背負い投げをする。

「がっ！？」

勢いよく地面に叩き付けられ、無様にのた打ち回る。

「今すぐ立ち去るんだ。次は本気でやるぞ」

「ぐっ……なんで…オ…主の……ちっ！！」

腰を押さえながら逃げていく。その姿はあまりにも惨めに見えた。

「大丈夫かい？」

「ヒッ！？」

クロノが話し掛けるとはやては身体を強張らせる。

「ああ…すまない。怖がらせてしまったかな？」

クロノは少しはやてから離れる。

「あの…えっと…ごめんなさい。私、男の人が苦手で…」

「ああ、そういう事か。ならこのまま帰るとしよう。じゃあ、気を付けて」

正直クロノもあまりはやてと関わりたくなかった。グレアム達が見ているかもしれないからだ。

「あ、あの！」

クロノは立ち去ろうとしたが、はやての呼び声に振り向く。

「助けてくれて、ありがとうございました」

はやてはペコリと頭を下げ、車椅子を操作して行ってしまった。

（……大丈夫だよね、これくらいなら）

はやては車椅子だ。もしかしたらアースラスタッフの誰かが、困っているはやてを手助けしたりしたかもしれない。それにすぐに別れたのだ。名前すら名乗っていない。何一つ問題無い。

そう言い聞かせながらクロノは歩き出した。

EP．7　艦の日々（後書き）

同じ孤児だからってすぐ一緒に住もうって事にはならない気がします

EP．8　学ぶ（前書き）

皆さん色々とアドバイスありがとうございます
矛盾点等を解決できるよう頑張ります

EP．8　学ぶ

三人がアースラに乗艦してから三日後。ここはアースラの食堂。
そこにクロノは座っている。現在は昼食の時間、目の前のプレートにはサラダやパンが並んでいた。

（……寿司が食べたい）

そんな事を考えながらパンに手を伸ばす。
折角日本に来たのだ、久しぶりに本物の寿司を食べたい。だが勝手に外出する訳にもいかず、ましてやアースラに生食用の魚なんかあるはずがない。あったら衛生上問題である。

「あ、クロノく～ん！」

同じように昼食を食べに来たのであろうなのはとその後ろから刃、ユーノが続く。三人の手にはそれぞれ昼食のプレートが見える。

「一緒に食べよう」

「ああ、かまわないよ」

「じゃあお邪魔するねクロノ」

クロノの対面側の席に三人が座る。刃が何も言わなかったのが不気味だが、下手な事を言ってなのはの反感を買わないようにしているのだろう。

「どうだい、順調か？」

「うん。クレアちゃん教えるの上手だし」

ドレッシングを取りながら笑顔で答える。

「姉さんは教えるの上手だからね」

「姉さんか……なあ、ちょっと気になってたんだけどよ、お前ら双子か？」

刃が珍しくまともな会話を振ってきた。

「いや。姉さんは僕より二つ上だ」

「「「え？」」」

三人とも驚く。流石に二つも上なら年齢的に身長差があってもおかしくない。なのに二人の背格好はあまり変わらないのだ。

「じゃあクロノは…」

「僕は十二、姉さんは十四だ」

クロノの身長は年相応か少し低いくらいだ。それを考えると二次成長の真っ只中であるクレアがいかに小柄かわかる。その上女性の方が成長期に入るのが早いため、若干不安さえ感じる。

「クレアちゃんって、私達より五つも上だったんだ…」

「僕、刃と同じくクロノと双子かと思ってた…十二くらいの」

「……ありだな」

なにやら不穏な言葉が聞こえた気がしたが聞き流す事にする。

「おやおや～。皆お揃いだね！」

両手にプレートを持つエドワードと、その後ろからクレアが現れた。

二人も昼食に来たようだ。そして二人はクロノの隣に座る。

「クレアちゃんとエドワードさんもお昼ご飯ですか？」

「ええ。エドに誘われて」

「まあ時間も時間だし、皆来てるからね」

刃がクロノが転生者ではないかと疑った理由に、エドワードの存在もあった。彼の苗字はリミエッタ…そう、彼はＴＳしたエイミィだと気付いたのだ。それならクレアはＴＳしたクロノであるはず。そう考えて行動を起こしたのだが結果はこの通り、勝手な思い込みで転生者でないと判断したのだ。

そうして一層賑やかになり、ランチタイムは過ぎていった。

「じゃあ僕はこの辺で…」

食事を終えたクロノが立ち上がる。

「あれ、もう行っちゃうの？てか量少なくない？」

「うん。午後は訓練室に行くから軽めにしたんだ」

満腹で身体を動かすのはあまり良い事ではない。だからこそ昼食は軽くすませたのだ。

「じゃあね」

クロノは後片付けにカウンターへ向かって行った。

「訓練室かぁ…」

なのはが呟く。

実はこの三日間、ずっと座学の講義だったのだ。そのため程魔法を使っていない。

そんななのはの気持ちを察したのか、クレアがある提案をした。

「じゃあ、午後は訓練室の見学に行く？」

「「行く！！」」

なのはと刃の声がハモり、二人して身を乗り出した。

アースラの訓練室。ここにはクロノと何人かの武装局員がトレーニングをしていた。

自主トレの時間なのか、みなやっている事はバラバラである。身体を鍛える為に筋力トレーニングをする者、ＳｔｒｉｋｅｒＳでティ

アナがやっていたようなターゲットを用いる動作訓練をする者、的を用いて魔法の効果を確認する者様々だ。
するとドアが開き、クレア達四人が入って来た。何人かは気付き、上官でもあるクレアに挨拶をする。

「ここが…」

「うわぁ…」

「ほう…」

なのはとユーノは一生懸命自らを鍛える局員達に感激していたが、刃は模擬戦をしたくてウズウズとしていた。
この三日間は実に暇であった。たしかに座学はためになるが、力のある自分には実戦で鍛える方が相応しいと思っていた。それよりも魔法を使いたい、自分の力を使いその快楽を味わいたかったのだ。

「あ、クロノだ」

「え？どこ？」

「あそこ。何人かの局員さんと一緒にいるよ」

ユーノが指差した方向にクロノはいた。三人の局員と四角になるように並び、目を閉じて瞑想するように集中している。よく見ると、彼ら一人一人の周囲にはいくつもの魔力弾がその身体を包むように走っている。
クロノ達が行っているのは魔力の制御訓練だ。魔力弾を自分の周囲を様々な向きに飛び回らせ、お互いにぶつからないよう操作している。それだけでなく、各自の魔力弾の道が重なるように立っている

ので、難易度はさらに上がっている。
当然クレアもこういった誘導制御訓練を日頃から行っている。スティンガースナイプのような桁違いの操作性を持つ魔法も、厳しい訓練の賜物なのだ。
他にも設定された出力の違うターゲットをランダムに撃ち抜く出力制御訓練、魔力を用いない体術訓練など厳しい訓練を他の局員と共にこなしていった。

「すっごい！」

「今日はちょっと激しい方かな。もしかしたら皆が来ると思って張り切ってるのかも」

実はあながち間違いでは無い。やはりクロノも見られるかもしれないといった状況では張り切ってしまうものだ。

クロノは一通りの訓練が終わり、汗を拭きながら壁に寄り掛かる。

「クロノ二尉、どうぞ」

「ああ、ありがとう」

短く刈り込んだ短髪の局員からドリンクを受け取り一口飲む。身体に水分が行き渡る感覚が心地好い。

彼らはクロノを名前で呼んでいる。実際、なのは達がいなければア

ースラで最年少の局員であり、ハラオウン姓を持つ人物が三人もいるのだ。階級は違ってもややこしい部分がある。さらにはリンディのおおらかな人柄もあってか、仕事に支障が出ない程度にフレンドリーなのである。

「あ…なんか模擬戦始めるみたいですね」

見ると刃が一人の武装局員を連れ、訓練所の真ん中に移動した。そして四人は各々のデバイスを構える。

(何故模擬戦を?挑発?まさか、彼がそんな幼稚な人ではないし…。多分、模擬戦をしようと言い出した刃を少しからかうつもりなんだろうな)

大人の現実を見せてやろう、力だけではどうにもならない事を教えてやる。そんな事を考えていたのかもしれない。

[クロノ]

[何?姉さん]

不意にクレアから念話が入る。

[刃がやり過ぎる可能性があるわ。一応止める準備はしといて]

この男ならやりかねない。そんな事が頭を過ぎり、サーっと血の気が引く。

[なんで許可したの!?]

［ごめん。彼が忠告を聞いてくれなくて…。笑って聞き流すのよ］

実際、刃の実力は一般の武装局員よりは高い。あの火力で暴れれば、B～Cランクには脅威だ。

［わかった。準備はしておく］

［お願い。私も一応医務室に連絡しておく］

厄介な事にならない事を祈り、待機状態のローランを握った。

模擬戦は見ていてて気持ちの良いものではなかった。辺り一面を被うように魔力弾をばらまく。一発一発がかなりの威力であり、反撃を許さないような弾膜を展開している。幸い軌道は単純なため、回避は難しくないが局員は劣勢を強いられていた。

「ハハハハハハ！バオウ・ザケルガ！！！」

ついに特大の攻撃魔法を放った。新月の書の頁が破れ、放たれた巨大な雷の龍が襲い掛かる。

（あれはまずい！）

非殺傷設定とはいえ、あんな火力をくらっては危ない。考えるより先に感じた二人は飛び出した。

局員を掴み、攻撃の範囲外に離脱する。

そして目標を失った龍は床に衝突し、あたりに雷を撒き散らした。

「ハア…ハア…。刃！何をやってるんだ！」

「あんな大出力の魔法、危ないでしょ！」

息を荒げながら叫ぶ。

「ああ、ごめん！つい力んじまってさ」

「…次からは気をつけて」

模擬戦を止めれなかった自分にも責任はある。そう思ったのか、クレアは追及しなかった。

（もう絶対に模擬戦はさせないわ。下手に暴れて怪我人を出したり、ここを壊されちゃたまらないもの）

クレアは小さくため息をついた。

局員は攻撃そのものは程避けていたため、特に問題も無く部屋から出ていき、なのは達もクレアに連れられ自室へと戻っていった。

「さっきの模擬戦、どう思う？」

先程の短髪の局員に話し掛ける。

「一言で言うなら……技術も無い野蛮な戦い方…ですね」

そう、刃の戦闘スタイルはごり押し。魔力任せの目茶苦茶な戦い方なのだ。

「同感だ。ああいう【力のある馬鹿】は二番目に質の悪い奴だ」

「一番は？」

「【力があって、尚且つ使いこなしている馬鹿】だ」

ただ力があるだけなら押さえられる。しかし使いこなしているのならより一層厄介だ。

「っ！じゃあなんで魔法教育なんかしているんですか！」

「僕も艦長に言ったんだが、万が一があった場合、何もしていなければこちらに非ができる。だから必要最低限に留める事にしたんだ」

刃が民間人である事が災いし、彼の事をほうっておけないのだ。

「しかし…。せめてデバイスを没収するなりどうにかできないのですか？あの子は危険すぎます！」

「やろうとしたさ。だができなかった。魔導書の一部である銃もだ」

乗艦した際に、出所不明で、さらに危険行為の可能性があるため新月の書をアースラで預かる事になった。しかしこの魔導書は刃の手元に自在に転送できるのである。

「しかも凍結させても強制解除するんだ。どんな手段を用いても、あの魔導書を彼から引き離す事ができない」

「そんな…」

刃の身柄を拘束したとしても、留置場や刑務所に入れても呼び出して逃げれる。絶対に失わない力なのだ。

「だけど、一つだけ穴があるかもしれない」

「穴？」

「まだ予想だけど、あの魔導書は自動的に動けず、刃の意識でのみ力を発揮するんじゃないかと思う」

「意識のみ…」

クロノは軽く頷く。

「初め彼を連れて来た時、刃は凍結状態だった。魔導書を凍結させても解除できるのに、何故刃自身は解除されなかったのか」

「……あっ！でも、そうなると…」

「ああ。刃を犯罪者として対処する場合、高い確率で逮捕でなく殺害処分になる…」

管理局では基本的に非殺傷設定で魔法を使用するため、殺傷設定の使用が許可されるのは極めて稀である。

「彼が更正してくれるのを祈るしかないな…」

EP．8　学ぶ（後書き）

役職と階級は別のようなので、設定を修正したようにクロノの階級を二等空尉にしました

EP．9　嵐の日（前書き）

…今回はちょっと庇護しきれませんでした

例のアレです

EP．9　嵐の日

カレルとフェイトはシリアルVのジュエルシードを新たに発見、封印した。本来この時期に発見したシリアル？は、カレルとの出会いの時に回収していたのである。

そして今、彼らは海の上にいる。海は少し波打っているが、特に異常は見当たらない。

（正確な位置は掴めないから、海に魔力流を撃ち込んで強制的に発動させて捕まえる…か。どうやらあっちは海のを見つけてないみたいだな）

カレルの目の前ではフェイトが巨大な魔法陣を展開し詠唱を始めている。

「アルカス・クルタス・エイギアス。煌めきたる天神よ。いま導きのもと降りきたれ…」

本当なら男である自分がやるべき、しかし自分にはこういった広域魔法は習得していない。ならば封印に力を注ぐまで。

［悪いなアルフ。封印しか力になれそうにない］

［それだけでもましさ。ちゃんと働いてもらうよ］

［当然！］

ゼファーの柄を強く握りしめる。

「バルエル・ザルエル・ブラウゼル。撃つは雷、響くは轟雷。アルカス・クルタス・エイギアス…」

フェイトは詠唱を終えて魔力を撃ち込む体勢に入った。そして大量にあった金色の魔力スフィアに目のような模様が浮かび上がり、雷を海に降らせる。

「はぁぁぁ！！！」

掛け声と共に魔力が撃ち込まれた。そして海から光が立ち上り、巨大な竜巻となる。それはあまりにも巨大で、吹き飛ばされそうな風も吹いていた。

「ハァハァ…見つけた！残り…六つ…！」

肩で息をしながら海から立ち上る六つの竜巻を見つめる。

「アルフ、空間結界とサポートをお願い」

「ああ、任せといて！」

カレルはフェイトの前に立ち、ゼファーを構える。

「後は俺達に任せて少し休みな」

「ううん、私も行くよカレル。バルディッシュ、頑張ろう！」

『Ｙｅｓ，Ｓｉｒ．』

フェイトはそのまま荒れ狂う海へと飛んで行ってしまった。

（全く…無茶しやがって）

カレルも後を追うように飛び出した。願わくは、なのは達の介入が早くなる事を祈りながら、彼女を守れるよう己の愛斧を構えた。

一方アースラ。

さらに数日が経過し、三人がアースラに来てから十日。新たにジュエルシードを三つ回収したのだが、それ以来全く反応は無かった。勿論、フェイトとカレルとも鉢合わせる事も無く。

そんなある日、なのははクレアの部屋にいた。

「……で、お話しって何かな？」

クレアはコーヒーを自分となのはの前に置いた。勿論なのはの所にはミルクと砂糖も忘れない。

「えっと…相談と言うかなんと言うか……」

もじもじしながらコーヒーにミルクと砂糖を混ぜる。

「私にって事は、女の子にしか相談できない事？」

「えっと…二つあるんですけど、まず刃君の事なんですけど…」

クレアは少し顔をしかめたが、すぐさま優しく微笑む。

「彼がどうしたの？」

「あの……実は…」

要約すると恋愛相談であった。小さい頃から好きであった事、友人達も彼に好意を持っている事…

どれも刃に対して良い印象が無く、恋愛経験も無いクレアにとっては反応に困る話しであった。

「でも、なんだか最近疑問に思うの。本当に私は刃君が好きなのかなって…」

「どういう事？」

促すように言いながらコーヒーを口に運ぶ。

「ジュエルシードを集めるようになってからなんだけど、刃君がおかしいの」

クレアの目には最初からおかしくは見えた。それに最近は自分に妙な視線を送るようになっているのが実に気味が悪い。

「最初は二人だけの秘密で嬉しかったんだけど、ユーノ君やフェイトちゃんと一緒の子…カレル君に対してなんだか乱暴に見えて、クロノ君にも…」

「まあクロノも嫌っているから問題は無いけど」

実際はお互い嫌っているなんてレベルでは無かった。クロノにとっては超危険人物、刃にとってはハーレムの邪魔者でしかないのだ。

「そういうのが少し怖くて……今まで優しかったのも嘘みたいに思えちゃうんだ…。そしたら急に刃君の事が…」

「…成る程ね」

クレアは理解した。刃はただの女好きで、自分以外の男性が目を付けた女性の傍にいるのが嫌なのだと。

だから自分にもやたらと格好つけた視線を送り、なのはの近くに来るであろうユーノを嫌い、フェイトの傍にいるカレルを嫌い、なのはに触れたクロノに攻撃を仕掛けたのだろう。なんて身勝手で独占欲の強い少年なのだろうか。

（これで九歳ってのが信じられないわ）

正直、なのはに刃はどうしよもない変態だと言ってやりたかった。しかしあまりストレートに言うのも気が引ける。ならば少し言葉を選ぶしかない。

「多分…なのはが抱いていたのは恋じゃないんじゃないかな」

「？」

首を傾げるなのはに、クレアは続ける。

「彼は…まあ、顔は良いじゃない？それで優しかったら、少しは【良いな】って感情があると思うの。なのはそれをオーバーに捉えちゃったんじゃないかしら。だから彼がプレイボーイ気取りな所とか

が嫌になって離れたくなっちゃったのよ」

「ふむふむ」

なのははクレアの言葉に頷く。

「本当に好きなら彼を正そうするものよ。そういう気になれないなら好きじゃないのよ…きっと」

半ば出任せのような事を一気に言う。クレアも思春期の少女なのだ、恋愛にも人並みには興味がある。しかし仕事も楽しく周りに同年代の異性が少ないため、自然と機会を逃している。今のもあくまで個人の妄想に近い恋愛価値観によるものだ。
しかしなのはの心を動かすには十分な説得力を持っていた。

「そっか……うん。ありがとう！なんだか少しすっきりしたよ」

クレアの手を取り、笑顔でお礼を言う。クレアもたじろぎながらも笑顔で応える。

「そうそう。男なんて星の数ほどいるんだし、まだ九歳。いくらでもチャンスはあるわ」

「うん、そうだね」

まるで合コンに失敗したＯＬのような会話だ。誤解の無いように言っておくが、彼女達は十四と九歳の少女である。

「それでもう一つは？」

「えっと…フェイトちゃんの事なんだけど…」

フェイトの名前が出たとたん、クレアの顔が一瞬厳しくなるがすぐに表情を戻す。

「彼女がどうし…」

その瞬間、艦内に警報が鳴り響いた。

『エマージンシー！捜索域の海上にて、大型の魔力反応を感知！』

おそらくジュエルシードであろう。

クレアとなのはは立ち上がる。

「話しは後にしましょ」

「うん」

なのはは軽く頷き、二人はブリッジへと駆け出した。

ブリッジにはすでにクロノやユーノ、刃が到着しており、目の前のモニターには戦闘しているフェイトとカレルが映っていた。フェイトは疲弊し、カレルとアルフも手こずっているのがわかる。

「なんとも無茶する子ね…」

「フェイトちゃん！あの…私…急いで現場に！」

「……」

すぐにでもなのはは現場に向かおうとするなのはと違い、刃は行くかどうか決めかねていた。
フェイトとアルフだけならとっくに出ている。しかしカレルの存在が彼を悩ませていた。カレルが撃墜されてからフェイトを助けるのがベストだが、どう見ても疲弊しているフェイトの方が先にやられるだろう。カレルを助けるのは吐き気がするような事だ、可能ならやりたくない。ついでにこの竜巻に飲まれて死んでほしい、そこに颯爽と現れてフェイトを慰める…そんな醜悪な事を考えていた。

「その必要は無いわ。放っておけばあの子達は自滅する。自滅しなかったら力を使い果たしたところで叩く」

「そんな…フェイトちゃん…」

「気持ちはわかるけど、私たちは常に最善の選択をしないといけないの。残酷に見えるかもしれないけど…これが現実」

クロノは苦虫を噛みつぶしたような表情をする。
そう、これが無印最大の問題行動と言われる、フェイトを見捨てるような行動…。クロノには黙って見る事ができなかった。
管理局が求めるのは次元世界の平和。間違いなくフェイトがしてきたのは危険行為で犯罪である。だからこそ、こうした非情な手段もとる必要があるのはわかるが…

（僕にはできない…）

問題視されている点を考えてみる。
まずは子供相手という事だ。これはミッドチルダの就職可能年齢が低く、能力さえあれば誰でも社会人になれるのだ。そうなってしまえば、子供であろうと容赦はしない風習ができてしまうのも考えら

れる。
次に暴走したジュエルシードの危険性の無視。これはリンディの存在が関係している。彼女は【フェイトが暴走させた六個】よりも大掛かりな【プレシアが暴走させた九個】を抑えてみせたのである。
それならば防ぐ事が可能であろう。
そして一つ考えられる事が、なのは達を向かわせたくなかったのではないだろうか。六個のジュエルシードの暴走地点なんて危険な場所に行かせるのはとてもできなかったのだろう。

だがそれでもクロノにはこの選択が良いとは思えなかった。
フェイトの捕獲なら原作の戦力差でも容易いなはず。疲弊した魔導師とその使い魔…対するは三人の優秀な魔導師にさらには武装局員までもいる。戦力差は歴然だ。自滅を待たずとも可能なのだ。

（考えろ……母さんを…艦長を納得させられる方法を…）

クロノは考えた。急いで、なのはが勝手な行動をする前に。

（…そうだ！）

クロノは意を決してリンディに話し掛けた。

「艦長、僕は彼女に賛成です」

「クロノ？」

リンディが振り向きクレアも目を丸くする。

「無理に自滅を待つ必要は有りませんよ」

賭けに近い。だがやるしかない。
虚勢とはいえ自信に満ちた声で話し出した。

EP．9　嵐の日（後書き）

今回ばかりはリンディの行動は良いとは思いきれませんでした
問題視されている部分もできるだけ考えたのですが、考えれば考えるほど、逆に新たな問題ができてしまって…

EP．10　対するは六つの魔石（前書き）

これで良いのか少し疑問でした

EP．１０　対するは六つの魔石

「無理に自滅を待つ必要はありませんよ」

正直言って部の悪い賭けだ。話術で勝つ事はまず不可能。しかし打ち負かす訳では無い、説得できれば良いだけだ。

「彼女達を捕獲するのは現時点でも容易です。向こうは疲弊した魔導師とその使い魔、刃と同レベルの騎士のみ…」

「同レベルだと！？」

刃が然も不満げに言う。

「いや、いっつも互角っぽかったじゃないか」

「ぐ…」

ユーノのツッコミに反論できずに黙る。

「いいえ、この映像を見る限り、刃より技量は上よ」

「むぐ！？」

さらにクレアの追い撃ちにがっくりとうなだれる。

実際、刃がカレルと互角なのは能力によるごり押しによるものだ。特に切り合いでは完全に弄ばれている。

「…対するこちらは、ニアＳランクにＡＡＡランク…火力だけなら

僕らを上回る二人に結界魔導師。戦力差は歴然です」

「だとしても、あのような危険空域に民間人を向かわせる訳にはいかないわ。それにあの場所に転送するのも危険よ」

現在フェイト達のいる場所は膨大な魔力が渦巻いている。転送させた瞬間に嵐に飲まれてしまう危険性すらあるのだ。

「あの、だったらもっと上空に転送すれば！」

ユーノが手を上げて意見する。

よくよく考えると、原作でなのはを転送させたのはユーノだ。そしてなのはは遥か上空に転送され、セットアップしてからフェイトのもとへ行ったのだ。つまり出鱈目に転送させたのではなく、態勢を整え、十分な準備をする時間を考えて転送させた事がわかる。

「それに悔しいですが、彼女達の力が必要です」

「クロノ特別捜査官、あなたは民間人をあんな危険空域に行かせる気！？」

リンディにもわかってはいた。だが、彼女はなのは達だけでなく、アースラの乗組員全員の命を預かる立場にある。安全かつ確実に任務をこなすのが最優先なのだから。

「だからこそ僕が行くんです！」

「あなたの実力はわかっているけど、一人で三人の安全を確保しつつ六個のジュエルシードを封印、さらに彼女達の逮捕をやれると思っているの？自惚れるのいいかげんにしなさい！」

「やってみせます！艦長、許可を！」

なおもクロノは食いつく。たしかに困難だ。原作では無事に封印できたが、転生者の存在などで何が起きるかはわからない。だがこのままにはできない。

「……艦長」

黙って聞いていたクレアが口を開く。

「たしかに一人では困難ですが、二人でならば可能性は格段に上がります」

「あなたまで…」

リンディは飽きれたように額を押さえる。

「その上、【事情徴収ができない状態】になってからでは遅いかと。それに…」

なのはに視線を送り、再びリンディの方へ振り向く。

「私には不可能には思えません」

自信に満ちた笑顔で言った。

負ける気がしないとはこの事だろう。自分達ならできる、そんな気がした。

「……失敗は許されないのよ？」

「勿論」

「わかっています」

自信に満ちた顔。子供の我が儘にも見えるが、それだけでない何かがあった。

この子達に賭けてみても良い。そんな気がする程に。

「ハァ……わかったわ。クレア執務官、クロノ特別捜査官にジュエルシード回収と捜索者の逮捕を命じます。民間協力者三名の同行も許可します」

ついに出撃を許可した。その事なのはとユーノは顔を見合わせ喜ぶ。

「さあ、行くよ」

「時間もあんまり無いし急ぎましょ」

クロノとクレアが転送ポートに走り出す。

「ありがとう！クロノ君、クレアちゃん！行こうユーノ君」

「うん！ほら、刃も」

なのはも続き、ユーノが走り出す。

「フン。足を引っ張るなよ」

今回は仕方ない。モタモタしていた自分が悪いのだ。原作は長いの

だ、いくらでも時間はある。
刃はまだ自信があった。自分が主人公であると。しかし彼は気付いていなかった。なのはが自分を呼んでなかった事を。

カレルは顔を隠していたマフラーがずれても直す余裕が無いほど追い詰められていた。

（くそっ！まだ来ないのか？）

カレルは焦っていた。フェイトも限界が近い上、自分とアルフも危険だ。
まさか本当に力尽きるのを待っているのだろうか？いや、なのはは来るはずだ。刃だってフェイトを見捨てるはずがない。

（まさか、俺が力尽きるのを待っているのか？）

ありえる。だが、どう見てもフェイトの方が先だ。
不安は募るばかり。だが、それは杞憂となった。はるか上空から一人の少女が現れたのである。白い衣装に胸の赤いリボン。高町なのはだ。

「フェイトの……邪魔を、するなぁぁぁ！！」

アルフが自らに纏わり付く雷を食いちぎり襲い掛かる。彼女にとってなのはは敵でしかなかった。
いまにも飛び掛かりその牙で噛み付こうとしたが、緑の光りに阻ま

れる。

「違う、僕達は君達と戦いに来たんじゃない！」

さらにクロノ、クレア、刃も現れる。

「今はジュエルシードの封印が最優先！あなたも手伝って！」

「ユーノ！」

クロノの呼びかけにユーノは頷き、アルフから離れチェーンバインドを放つ。緑の鎖は竜巻を捕らえ、アルフに伸びた雷を押さえる。

「フェイトちゃん！手伝って！ジュエルシードを止めよう！」

なのははフェイトの側に行き、レイジングハートをバルディッシュに近づける。すると桜色の光りがバルディッシュに注ぎ込まれ、魔力供給がされる。

『Ｐｏｗｅｒ　ｃｈａｒｇｅ.』

『Ｓｕｐｐｌｙｉｎｇ　ｃｏｍｐｌｅｔｅ.』

バルディッシュから金色の魔力刃が伸び、再び輝きを取り戻す。

「二人できっちら半分こ」

フェイトは敵である自分に力を分け与えるなのはに戸惑いを隠せなかった。

一方カレルもクロノに支えられ態勢を立て直す。

「君は大丈夫か？」

「フェイトほどじゃない。心配はいらねえよ」

少々乱暴な口調だが敵意は感じられなかった。

「なら良い。今はこれを止めるぞ」

「協力しろってか。上等！」

ゼファーを握りしめフェイトの下へ飛び出す。

アルフもユーノと共にチェーンバインドを竜巻に向け抑え出した。

「各員、二人が抑えている間に一斉砲撃！力技だけど、これが一番確実よ！」

クレアの指示に頷くクロノとなのは。そんな中、戸惑うフェイトにカレルが寄る。

「フェイト、今はつべこべ言ってる場合じゃない。とりあえず協力するぞ。バルディッシュ」

『Ｓｅａｌｉｎｇ　ｆｏｒｍ　ｓｅｔ　ｕｐ.』

カレルが促すとバルディッシュは姿を変えた。カレルの言う事が正しいと判断したからであろう。

「バルディッシュ……うん」

意を決してバルディッシュを構え、足元に金色の魔法陣を展開する。
周囲では全員が魔法陣を展開し、己の相棒にその力を込め出した。

「ってー！！！」

クレアの合図と同時に、全員が力の限り叫びその全力の一撃を撃ち込む。
閃光が辺りを覆い尽くす。
その一撃は六個のジュエルシードを封印するには十分すぎるほどの力を有していた。光りが収まると眼下には六個のジュエルシードがうっすらと輝きながら浮かんでいた。先程の嵐の正体とは思えないほど、あまりにも幻想的な光景だった。

なのははようやくわかった。フェイトに何を言いたいのか、彼女とどうなりたいのか。今なら言える。伝えたい、自分の気持ちを…

「友達に…なりたいんだ」

ただ一言。自分の素直な気持ちだった。
当然刃もチャンスと近づこうとするが、空気読めといった様子でユーノとクレアに取り押さえられていた。クレアはフェイトが投降してくれる切っ掛けになると考えていたし、ユーノはなのはの邪魔をさせたくなかった。

「すまないが、投降してくれないか？こちらも悪いようにはしない」

クロノはカレルとアルフに投降を呼びかける。この場でフェイトを捕らえれば早い段階でプレシアを発見、逮捕ができるかもしれないからだ。クロノとしても、虚数空間に消えてしまうのは避けたい。

「「……」」

アルフは悩んでいた。自分の主人はフェイトであり、勝手に投降する事などできない。それに管理局に捕まる事がフェイトの為になるかわからないから。

カレルも同じだ。自分だけが捕まっても二人の迷惑になるだけ。本当に今捕らえられる事が良いのかわからなかった。

そんな一時はすぐに崩れ去った。

『次元干渉!?別次元から、本艦及び戦闘区域にて魔力攻撃来ます!あ、後六秒!』

「「!?!?」」

突然のエドワードからの通信。それと同時に空が雲に被われ、紫の雷が鳴り響く。

「か、母さん…?」

フェイトにはわかっていた。この魔法を使っている人物を。しかしその表情は、母親から手を差し延べられた安堵より怯えるようなものだ。

「「!!!」」

原作を知るカレルと刃は飛び出した。純粋に彼女を守りたい、彼女の気を引く為とそれぞれの思いは違えど、フェイトを迫り来る雷から守るために駆け出した。

「フェイトォォォ！！」

先に到達したのはカレルだった。刃はクレアとユーノを振りほどく事で、一歩遅れてしまったのだ。
彼はフェイトの手を引きその場から離脱する。その瞬間、フェイトのいた場所に落雷が通りすぎた。間一髪である。
雷はフェイトだけでなく、クロノ達にまで襲い掛かる。クロノはなのはを、クレアはユーノを守るようにシールドを張る。刃はフェイトを助けられなかった事に苛立っていたが、自分の身を守らなければならないので、仕方なくその場から離れた。
その隙を狙いアルフが飛び出し、ジュエルシードに手を伸ばす。

「させない！」

クレアが間に割り込み、Ｓ２Ｕに阻まれる。
アルフの顔が見る見る怒りに染まる。あの女…プレシアの介入が意味する事、ここでしくじればフェイトに何をするかわからない。

「邪魔を…するなぁぁぁ！」

力の限り突き飛ばす。

「キャァァァ！？」

「姉さん！」

突き飛ばされたが、海面で体制を立て直す。アルフは一安心とばかりにジュエルシードに視線を移す。しかし…

「っ！？三つしかない？」

まさかと思い、先程自分が突き飛ばした魔導師の少女を見る。彼女の左手の指の間には三つのジュエルシードがあった。
クレアはＳ２Ｕの先端を展開させ、ジュエルシードをしまう。

「くぅぅ！」

悔しさや怒りが入り混じった表情で唸る。
なんという失態。自分の不甲斐なさに頭が真っ白になる。

「アルフ！」

フェイトがカレルと共に飛んでくる。

「逃がさない」

後方にはクロノが、下からはクレアが杖を突き付ける。しかし。

「悪いな！」

『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ．』

カートリッジをロードしゼファーを回転させた。

「待って！」

二度も逃げられてたまるかと、クレアはスティンガーを放つ。しかしカレルは竜巻を起こしスティンガーを弾き、それは海水を吸い上げカレル達を包んでしまった。

「水なら！」

『Ｆｒｏｓｔ　Ｃａｎｎｏｎ．』

クロノはフロストキャノンを撃ちこみ竜巻を凍結させる。

「とどめ！」

『Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ．』

続けてクレアがブレイズキャノンを放ち凍り付いた竜巻を破壊する。

だがそこには誰もいなかった。

「～～！！！」

「もう転移したのか。全く…本当に優秀な使い魔だな…」

クロノはアルフの能力に驚き、クレアはまたしても逃げられた事にいらつきを隠せないでいた。

（しかしカレルはどうするんだ？この後はアルフが見つかるはずだが…）

彼はプレシアとどう戦うのか、はたまた説得を試みるのか。場合によっては今後の展開に大きく影響する。

（そろそろ大詰めだな。……いかん、緊張してきた）

失敗すれば大惨事だ。気を抜けはしない。

クロノは雷雲が晴れた空を見詰めていた。

EP．１０　対するは六つの魔石（後書き）

プレシアがフェイトをどう思っているかで話しがかなり変わるな……

あと私は【アリシアを生き返らせてやるからフェイトを娘として見ろ】といった事を言うのが一番嫌いです

フェイトはおまけじゃありません

EP．11　思いを胸に（前書き）

昨日、A-ｓ最終決戦のＴＶとＤＶＤ比較動画を見ました

シャマルの一部の増量っぷりが最高です

EP．11　思いを胸に

「ジュエルシードを三つ奪われて、さらに逃げられたと…」

「面目ありません…」

「私もです…」

クロノとクレアはアースラに戻った後、リンディに報告に来たのだが……結果は芳しくない。ジュエルシードも全て回収できず、逮捕も失敗。任務失敗と言っても間違いでは無い。

「……まあ、全員無事だったし、結果としていくつか得る事がありました。よって今回の事は厳重注意のみと致します」

「「え？」」

二人はあまりの処罰の軽さに唖然とする。半ば強行的に出撃し任務も失敗。本来なら減俸ものだ。

「今は事態の収拾が最優先。ですからこの件はもう終わりです」

余計な事を言ってる暇があれば仕事しろ、結果を出せ。そんな意味もあったのだろう。リンディは反論を許さなかった。

「さて、問題はここからね。クロノ、事件の大元について心当たりがあるようだけど？」

「はい。エドワード、モニターを」

「あいよ」

すると机の中心にいくつものモニターが現れ、その一つに一人の女性が映し出された。

「あら！」

リンディはこの女性に心当たりがあるようだ。

「はい、僕らと同じミッドチルダ出身の魔導士、プレシア・テスタロッサ。専門は次元航行エネルギーの開発。偉大な魔導士でありながら、違法研究と事故によって放逐された魔導士です。登録データとさっきの攻撃の魔力波動も一致しています。フェイトはおそらく…」

そんなクロノの言葉に思い当たる節があったのだろう。なのははある事を思い出した。

「そういえばフェイトちゃんあの時母さんって…」

彼女は聞き逃していなかった。フェイトの怯えるような声を。

「親子…ね」

同じ姓、そしてフェイト自身から告げられた【母】という言葉。想像は容易である。

「ですが、それだと彼が何者なのかがわかりませんね」

クレアがカレルの映像を出す。マフラーがずれ素顔があらわになっていた。

「……あれ？」

なのははその映像をじっと見詰めると、何かに気付いたようだ。

「この子…カレル君、どこかで見たような……」

「「「「え？」」」」

「何ぃ！？」

以外な出来事に全員驚く。

「どこだ！誰なんだなのは！」

刃は必死だ。彼女に手を出したのではないかといらぬ疑いがあった。

「えっと……ごめん、よく覚えてないや。クラスメートとかだったらわかるんだけど…」

特に親しくなくてもクラスメートならばすぐに気付く。だが知らない…けど何か引っ掛かる。

クロノはハッとする。彼は転生者だろう。ならば…

「もしかして同じ学校の子なんじゃないかな？他のクラスなら見た事はあるかもしれない」

「あ！そうかも！」

「よし。僕は彼の事を少し調べて来ます」

所属がわかれば調べるのは簡単。海鳴の住人である可能性も高い。

「お願いね。エドワード、プレシア女史についてもう少し詳しいデータ出せる？放逐後の足取り、家族関係、その他何でも！」

「了～解。すぐ調べます」

リンディはなのは達に振り向く。

「とりあえず、一旦三人は休憩を取ってもらっていいわ。ただ、データが出次第、また呼び出すからそのつもりはしておいてね」

「「わかりました」」

「仕方ないか…」

それからしばらくし、またしてもなのは達は会議室に呼ばれた。

「…プレシア・テスタロッサ。ミッドの歴史で二十六年前は、中央技術開発局の第三局長でしたが……当時彼女が個人で開発していた、次元航行エネルギー駆動炉【ヒュードラ】使用の際、違法な材料で実験を行い失敗…結果的に中規模次元震を起こした事が原因で、中央を追われ地方へと異動になりました」

エドワードは先程調べた事を報告し出した。内容も重苦しいだけあって、眉間にしわを寄せ、いつもの明るい雰囲気は無い。

「随分揉めたみたいです…失敗は結果に過ぎず、実験材料にも違法性は無かったと、辺境に異動後も、数年間は技術開発に携わっていました。しばらくの後行方不明になって、それっきりですね」

「家族と、行方不明になるまでの行動は?」

フェイトについての情報であろう。彼女を見れば、フェイトが生まれたのは行方不明になってから。父親である人物などから、何かわからないかと考えたのだ。

「その辺のデータは綺麗サッパリ抹消されてます。今、本局に問い合わせて調べてもらっているので…」

「時間はどれくらい?」

「一両日中には、と」

エドワードの報告に一息入れ、次はクロノの方を向いた。

「…で、そっちはどうかしら?」

「大当りですよ」

モニターにカレルの写真が映し出される。その姿は騎士甲冑ではなく、なのは達と同じ聖祥の制服姿だった。

「本名、カレル・小川。年齢はなのは達と同じ九歳。クラスは違いますが、二人と同じ学校の生徒です」

「やっぱり…」

クロノとなのはの予想は大当りだった。

「父親は現地…地球の方ですが、母親は元聖王教会所属の騎士でした」

「成る程。ご家族と連絡は？」

「確認した所、十日前に手紙を残して家出……現地の警察にも捜索願いが出てます」

管理局の介入と同時にフェイトの拠点であるマンションに行方をくらましたのだ。

「両親からは【遠慮はいらないので、馬鹿な事を仕出かす前に捕まえてください】…との事です」

「仕方ねえな。俺がきついお仕置きを…」

「誰も刃君に頼んでないよ。だからお留守番してて」

冷ややかなツッコミ。半ば飽きれたような口調である。

「うぐ…」

「……と言う訳です。フェイトはユーノのように、偶然彼と出会い

現地協力者となってもらったのでしょう」

「そうね…」

リンディは顎に手を当て少し考える。

「…プレシア女史もフェイトさんも、あれだけの魔力を放出した直後では早々動きは取れないでしょう。その間にアースラのシールド強化もしないといけないし…あなた達は、一休みしておいたほうがいいわね」

何か思い付いたように立ち上がる。

「あ、でも…」

「特になのはさん達、あまり長く学校を休みっぱなしでもよくないでしょう。一時、帰宅を許可します。ご家族と学校に少し顔を見せておいたほうがいいわ」

「……はい」

「それもそうだな」

家族も心配するだろう。説明と言う言い訳の為にリンディも同行する事になった。

ここは時の庭園。薄暗く魔女の館を思わせるような不気味さが漂っている。
そこにある巨大な扉の前にカレルとフェイト、アルフはいた。

「カレル、私が行くから別に…」

「いや、俺も行くよ。俺が足引っ張っちまったのもあるしさ」

「だけどさ…」

フェイトは心配だった。母が彼に何かするのではと。
アルフもカレルがフェイトの身代わりになろうとしているのがわかっていたが、いくらなんでも彼を身代わりにするのは心が痛んだ。

「ほら、行こうぜ」

「……うん。アルフ、ここで待ってて」

「ああ…」

扉が開き二人は中に入って行った。

（二人共、無事でいてよ…）

アルフは座り込み、二人を待つ事にした。

一方、中に入ったカレル達を待ち構えていたのはここの主、プレシア・テスタロッサだった。
腰までとどく髪、胸元の大きく開いた紫のドレスは深い色香を醸し出し、年を疑うような豊かな乳房と美貌を持つ美しい女性だった。

しかしそれらを台なしにするほど彼女の肌は青白く生気を失い、瞳は逆に異常なまでにギラつき狂気じみた恐ろしさが見える。

「……」

プレシアは蝙蝠の羽のようなものがついた杖に寄り掛かるようにゆらりと立ち上がる。その時カレルと視線が合った。

その瞬間、カレルの身体が固まる。魔法などではない、例えるならば【蛇に睨まれた蛙】といった状態である。命を狙われた事は今まで何度もある。しかしそれとは違う恐怖感があった。所詮今までのは小物。そう、格が違いすぎるのだ。

（やばい、冷や汗が止まんねえ。なんだよこいつ、本当に病人かよ!?）

足が震えるなど、みっともない姿をさらさなかっただけでも御の字である。それ程彼女は桁違いの存在だった。

「あの……母さん…」

フェイトの言葉に意識を戻す。そう、彼女を守るために来たのだ、ビビっている場合ではない。

「今回の件で謝りに来た。俺が管理局を抑えられなかった所為で…」

「坊やに用は無いわ」

プレシアはカレルを無視しフェイトへと歩み寄る。

実際、偏にカレルの責任とは言えない。あの場でなのはの言葉に耳を傾けなければ、ジュエルシードの確保も可能だったかもしれない

のだ。
しかしカレルも無視されて黙ってはいない。ここに来た目的を、フェイトに手を出させないためにも。

「カレル？」

カレルはフェイトとプレシアの間に割り込む。そしてプルシアをまっすぐと見上げた。

「聞こえなかったのかしら？坊やに用は無いのよ」

「俺にはあるんだよ」

ただ一点。その目を見据えた。

「あんたに話しがな」

謝りに行く気なんてのはこじつけだ。フェイトの虐待を防ぐ事、そして彼女との対談が目的なのだ。

「……フェイト、この坊やをつまみ出しなさい」

「話しがあるっつてんだろ！」

フェイトが返事をするよりも早く叫ぶ。プレシアは僅かに目を細めると…

「…まあ良いわ。フェイト、少し出てなさい」

「え…」

対話に応じるようだがフェイトは不安であった。もしかしたらと思うと気が気でなかった。

［大丈夫。少し話しをするだけだ。すぐに終わる］

［……うん］

アルフと同じだ。自分の事を心配してくれている。だからこそ弱い自分が許せなかった。

だけど祈るしか無い。本当に話しをするだけで終わる事を。

フェイトが出て行くとプレシアは椅子に腰を掛けた。

「で、何かしら？」

頬杖をしながら興味の無いように言い放つ。

実際彼女はカレルにはたいして興味を抱いていない。特別魔力が高いわけでも無い、レアスキルも無い、使うのも近代ベルカ式、アルフと同じようなフェイトの手助けをする程度の存在。ただそれだけである。

「なんでフェイトにあんな事をする？」

半ば怒気を孕んだ声。

「これは私達親子の問題よ。坊やの出る幕じゃないわ」

「だからと言ってもやり過ぎだろ！あんた、フェイトを何だと思ってんだよ！」

カレルの怒気に全く動じず、プレシアは小さくため息をついた。

「フゥ……最近の子供は礼儀知らずね」

「話しをずらすな！俺はなんであんな事をするのか聞いてるんだ！」

のらりくらりとした態度に、フツフツと怒りが込み上げてくる。

「部外者に話す事は無いわ。しかし随分と気に入っているようね。まあ、あの子見栄えは良いもの…」

プレシアはカレルとまともに会話をする気が無かった。適当にあしらって消えてもらう気でいた。

「それともフェイトが欲しいのかしら？良いわよ、全部終わったら好きにしても」

プレシアにとっては軽い冗談のつもりで言ったのだろう。しかしその一言で、カレルは完全にキレた。

「ふざけんなぁぁぁぁぁぁ！！！」

ゼファーを起動させ、無我夢中で突っ込んだ。

フェイトとアルフは扉の前で寄り添うように座っていた。

「大丈夫かな、カレル」

「…多分」

膝を抱かえ部屋に残った少年の身を按じていた。
本当なら自分も一緒にいるべきだろう。だけどカレルは一人残る事を望んだ。

（母さん、カレルに何かしないと良いんだけど…）

そう思い扉を見上げた瞬間、中から爆音が鳴り響いた。

「え？」

嫌な予感がした。すぐさま扉を開けて中に入る。

「カレル！？」

「あんた…！」

そこにいたのは椅子に座り静かに視線をフェイトに向けるプレシアと、彼女の足元で全身から煙りを上げ倒れたカレルだった。

「カレル、しっかり！」

二人はカレルに駆け寄った。意識を失っているが幸い怪我はたいした事はないようだ。

「あんた、カレルに何してんだよ！この子は関係無いだろ！」

「あら、坊やから仕掛けて来たのよ。私は返り討ちにしただけ…」
するとプレシアは立ち上がりフェイトの顔を掴む。
「駄目じゃない。こんな子を連れて来ちゃ」
「…はい」
アルフは今にも殴り掛かりたかった。おそらくカレルは自分と同じ気持ちだった。プレシアが許せず、攻撃を仕掛けたのだろう。
「全く…この坊やといい使い魔といい、駒を用意するのが下手ね」
「違う！」
珍しくフェイトが抗議した事に驚いた。
「カレルは友達…なんです。アルフも駒なんかじゃ……ない」
（……友達…ねぇ…）
フェイトの反論に驚きはしたが、すぐに何事もなかったように冷ややかな視線をアルフに送る。
「すぐにそれを片付けなさい」
「なんであんたの命令なんか…！」
アルフは立ち上がろうとするがフェイトに制止される。

［アルフ、カレルを帰してあげて］

［帰すって…］

［やっぱり巻き込んじゃった私が悪いんだ。カレルに、今までありがとうって伝えといて］

［だけど…］

アルフはプレシアを見る。彼女は自分に出て行けと言っている。この後何をするかは容易に想像できる。

［お願い。これ以上迷惑を掛けたくないの］

どうにもできない。自分一人の力ではフェイトを助けられない。アルフは狼の姿に変身し、カレルを背負いゼファーを銜えて走り出した。

（フェイト…）

悔しさから泣きそうになるのを堪えひたすら走る。アルフは決意した。フェイトを止めるにはプレシアをどうにかしないといけない。半ばフェイトを裏切るような行為だが、彼女にはそれしか選択肢がなかった。

EP．11　思いを胸に（後書き）

よくプレシアとの対話ですぐアリシアの事を教えたりしますが、実際どうなんでしょうか

こちらでは話さずに終えましたが…

EP．12　狂気の母（前書き）

一気に飛ばします

EP．12　狂気の母

アルフはとある施設の前にいた。その大柄な狼の姿もあってか非常に目立ち、施設に出入りする子供達の視線が集まる。
ここは私立聖祥大学付属小学校。カレルが通い、管理局についた少女…高町なのはが通う学校だ。
フェイトを止めるには管理局の力を借りるしか無い。それにカレルの手当てもだ。だからこそ彼女とコンタクトを取れるであろうこの学校の前に張り込んでいるのだ。

そして下校の時間。アルフは二つの臭いに顔を上げる。
温かな臭いと腹が立つような嫌な臭い。なのはと刃だ。二人はアルフに気付かず、友人であろう二人の少女と話していた。

［…ちょっと］

二人はどこからともなく聞こえた念話にギョっとする。すぐさま周りを確認すると、橙色の大柄な狼が校門の近くに座っていた。

［あ…］

［あんた…］

二人共アルフの存在に気付いた。

［…話しがあるんだ］

ここはアースラ。その一室にクレアとなのは達はいた。

「二人の話しと現場の状況、そして彼女の使い魔のアルフの証言と現状を見るに、嘘や矛盾は無いみたい」

アルフは管理局に投降し、カレルの手当てとフェイトの救助を求めたのだ。

「どうなるのかな…」

「プレシア・テスタロッサを捕縛する。アースラを攻撃した事実だけでも、逮捕の理由にお釣りが来るわ。だから、艦長の命があり次第、任務をプレシアの逮捕に変更する事になるわね。あなた達はどうするの？」

答えはわかっていた。だが、改めて彼女の気持ちを聞きたかった。

「私は…私は、フェイトちゃんを助けたい！」

「ああ。俺が必ずな」

「こんな話しを聞いて、黙ってなんかいられないよ」

思惑は違えど、フェイトを助けたい気持ちは同じだった。

「アルフさんの思いと私の意思。フェイトちゃんの悲しい顔は、なんだか私も悲しいの…だから助けたいの、悲しい事から！それに、友達になりたいって伝えたその返事、まだ聞いてないし」

「そうだな」

実際フェイトにとって、刃は眼中に無いのだが…

「わかった…こちらとしてもありがたいわ。フェイト・テスタロッサについてはなのはに任せる…それで良いわね？」

隣にいるアルフに聞く。

「うん……なのは…だったっね…頼めた義理じゃないけど…だけど、お願い。フェイトを助けて」

アルフは縋るように身を乗り出す。その目は必死に訴えていた。フェイトを心配し、彼女を助けてほしいと。

「あの子、今本当に一人ぼっちなんだよ…」

俯き手を握りしめる。

「うん、大丈夫、任せて！」

なのはは笑顔でアルフの手を握った。

アースラの医務室。カレルは目を覚まし身体を起き上がらせる。その隣には一人の少年がいた。

「クロノ…」

「ああ、ゆっくりして良いよ。酷くないとはいえ怪我人だからね」

カレルを寝かし椅子に座る。

「アルフが連れて来たのか？」

「そうだ。君とフェイトを助ける事を条件に投降したんだ」

「そう…か」

そして目を隠すように腕を顔に載せる。少しカレルの身体が震え出した。

「畜生…！」

助けるために彼女と共にいた。しかしこのザマは何だ？助けられたのは自分ではないか。

言いようのない悔しさ、自分への怒りで悲しくなってくる。

「悔しいのはわかる。だがここで燻ってる場合じゃないだろ？まだ彼女を助けられる」

カレルはハッとしクロノを見る。

「君の力が必要だ」

「……俺は…」

差し延べられた手に戸惑うも、カレルはクロノの手を握った。

「フェイトを助けられるなら何だってする。俺もアルフも同じだ」

「ああ。頼む」

クロノはの微笑みに応えるように、カレルの瞳は強く燃え上がっていた。

それからはとんとん拍子に事は進んだ。

なのははフェイトとジュエルシードを賭けた決闘を提案し、クレア達はそれを了承。翌日の朝にはフェイトもなのはの呼び掛けに現れ、二人の決闘が始まった。始終カレルと刃が睨み合ってはいたが、決闘は無事なのはの勝利に終わったのだった。

しかし簡単には終わらない。なのはは墜落したフェイトを支えた途端、再び空を雷雲が被った。

「フェイト！！！」

カレルは無我夢中に飛び出しフェイトに襲い掛かる紫雷を切り払った。

だがそうしている内にジュエルシードが輪を描きながら何処かへ飛んで行く。

「させるか！」

クロノがジュエルシードに手を伸ばす。
ここで奪いに来るのは知っていた。だからこそ後に起きる次元震を軽くするために、プレシアにジュエルシードを渡す訳にはいかなかったのだ。

「うおぉぉぉ！」

あと一本で手が届く。だが、標的をフェイトからクロノに変えた紫雷が降り注ぐ。

「ぐあぁぁぁぁ！？」

反応の遅れたクロノは、防御も回避もできず、その雷に撃ち落とされてしまった。

「クロノ！」

海に落ちる前にユーノがクロノを支える。

「大丈夫？」

「大丈夫だ。だけど…」

見上げるとジュエルシードが雷雲の中に消えて行くのが見える。
クロノは阻止できなかった事に、悔しそうに顔をしかめた。

クロノ達は一旦アースラに戻った。フェイトも着替えさせられ、手には手錠をかけられていた。

「お疲れ様。それから…フェイトさん、はじめまして」

ブリッジに案内されたフェイトにリンディは話しかけるが、フェイトは俯いたまま何も言わない。

［母親が逮捕される姿を見せるのは忍びないわ。なのはさん、彼女を別の部屋へ］

［はい…］

「フェイトちゃん、よかったら私の部屋…」

なのははフェイトを連れて行こうとしたが、彼女は動こうとしない。

『総員、玉座の間に侵入』

モニターには武装局員達がプレシアがいる玉座の間に突入しているのが見える。

彼らは椅子にふてぶてしく座るプレシアを囲みデバイスを突き付ける。

『プレシア・テスタロッサ！時空管理局法違反、及び管理局艦船への攻撃の容疑で、貴女を逮捕します』

『武装を解除して、こちらへ』

彼女は余裕の表情を崩さない。プレシアにとって、人数がいようとも彼らは恐るに足らぬ存在なのだ。しかし何人かが隣の部屋へと入った瞬間、見る見る顔色を変える。

そこは変わった通路だった。中は薄暗く、柱や壁には青々とした蔦が巻きつき、より一層不気味な雰囲気を出している。その薄暗い通路の先、行く手を阻むように円柱状のポッドがある。

その中にあったのは…

「え！？」

「うっ！？」

「……」

青白く光る液体の中には、なのは達よりも幼い裸の少女が膝を抱きかかえるように浮かんでいる。

その長い金髪といい、フェイトと瓜二つだ。

『私のアリシアに…近寄らないで！』

プレシアが局員を後ろに投げつけ、庇うように割り込む。

『く……撃て！』

局員が隊列を組み、デバイスをプレシアに向けて砲撃を撃つが不可視の壁に阻まれる。彼らの力ではそれを貫く事はできなかった。

『うるさいわ…』

「危ない、防いで！」

プレシアの前に紫の魔力が渦巻く。リンディは危険だと判断し指示を出すが、それよりも早く局員に襲い掛かった。
ブリッジに局員達の悲鳴が鳴り響く。
そして力無く倒れ伏す局員達と、悍ましい声で高笑いするプレシアが映し出されていた。

「いけない！局員たちの送還を！」

「了解っ！」

「……アリ…シア？」

エドワードがコンソールを叩いて局員たちをアースラに戻し始めた。

フェイトはアリシアと呼ばれた自分に似た少女に困惑する。
彼女の心には言いようの無い恐れがあった。だが動けない。まるで身体が縛り付けられたように。

「座標固定０１２０、５０３！」

「固定、転送スタンバイ！」

一方、エドワード達は局員達の回収を急いでいる。

『もう駄目ね、時間が無いわ。たった九個のロストロギアでアルハザードにたどり着けるかどうかはわからないけど…』

プレシアが愛おしげにポッドにしがみつきながら、ゆっくりと顔を後ろに向ける。フェイト達が見ているのを知っているかのように。

『でも、もういいわ…終わりにする。この子をなくしてからの暗鬱な時間も…この子の身代わりの【人形】を娘扱いするのも』

人形…その言葉を聞いてフェイトが体をびくつかせる。

『聞いていて？貴女のことよ…フェイト。折角アリシアとの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけ。役立たずでちっとも使えない…私のお人形』

いたぶるように、心を隅から削るようにフェイトに向けて言う。

「……以前言ってた事故でね…プレシア・テスタロッサは実の娘…アリシア・テスタロッサを亡くしてるんだ。安全管理不慮で起きた…魔動炉の暴走事故……アリシアは、その事故に巻き込まれて……そして、彼女のその後行っていた研究は…使い魔を越えた…人造生命の生成。そして、死者蘇生の技術」

エドワードは言いづらいように言葉を繋げる。

「フェイトという名前は、当時彼女の研究の開発コードなんだ…」

開発コード。全員に嫌な予感が走る。

『よく調べたわね。そうよ、その通り。だけど駄目ね。ちっともうまくいかなかった。作り物の命は所詮作り物……失ったもの代わりにはならないわ……アリシアはもっと優しく笑ってくれたわ。我侭も言ってたけど…私の言うことをとてもよく聞いてくれてた。アリシアは、いつでも私に優しかった』

「やめて…」

これ以上言わせてはいけない。だがなのははには懇願するしかなかった。プレシアは自分の手の届かない所にいる、止める事はできない。

『アリシアは、いつでも私に優しかった。フェイト、やっぱり貴女はアリシアの偽者よ。折角あげたアリシアの記憶も、あなたじゃ駄目だった』

プレシアはポッドを撫でる。狂おしいほど愛おしげに。

「やめて、やめてよ」

『アリシアを蘇らせるまでの間に、私が慰みに使うだけのお人形。だから貴女はもういらないわ。どこへなりと消えなさい！』

「お願い！もうやめて！」

皆、あまりの異常さに言葉を失う。

クロノも【原作】として知ってはいた。だがそれを差し置いても、彼女の言動は異常だ。何故自分のために尽くしたフェイトにこんな事ができるのか、こんな事を言う事ができるのか。

『ハハハ…いいこと教えてあげるわフェイト。貴女を造り出してからずっとね、私は貴女が……大嫌いだったのよ！！！』

「！！！」

フェイトはまるで糸の切れた人形のように力なく膝を着く。

「フェイトちゃん！」

なのははフェイトを支えるが、何を言えばわからない。ただ抱きしめる事しかできなかった。

「な、なんだこりゃ！？庭園の中で魔力反応、多数！」

「何が起こってるんだ！？」

時の庭園の各所では床から滲み出るように西洋の騎士を模したロボットが現れる。どれも剣や斧で武装し、管理局を拒むように立ち塞がった。

「庭園敷地内に魔力反応、いずれもＡクラスです！」

「その数六十…八十…まだ増えます！」

「…プレシア・テスタロッサ！一体何をするつもり！？」

プレシアはアリシアの入ったポッドを浮かせ歩き出す。

『私たちは、旅立つの。忘れられた都……アルハザードへ！』

プレシアの周りに九個のジュエルシードが浮かび上がる。

「まさか！」

「なんて事を！」

『この力で…取り戻すのよ。私たちの…全てを！』

警報が鳴り響き赤いランプが点灯する。そして次元震は艦まで震えさせる。

「次元震です、中規模以上！」

「ディストーションシールドを！」

「ジュエルシード九個の発動！次元震、さらに強くなります！」

ブリッジは騒々しくなりクルーの報告とリンディの指示が飛び交う。

「いい加減に目を覚ませプレシア・テスタロッサ！貴女の行いはただの逃避でしか無い！」

クロノは身を乗り出し訴えかける。

「娘の死から目を背け、現実を否定しているだけだ！大切な者を失ったのなら、それを受け入れ死者を弔い、生きる。それが残された者の使命だろ！」

プレシアが笑い声を止める。

「第一、本当にそれはアリシアのためなのか！？フェイトを傷つけ、こんな危険な次元震まで起こして……そんな手段で過去を取り戻せる訳がない！余計に悲しみを募らせるだけだ！」

プレシアは目を見開き、怒りともいえる形容しがたい形相をする。

「子供ね……逃避？残された者の使命？子供のあなたに何がわかる

の…。そんな青臭いもの、とっくに通りすぎてるわ！」

再び高笑いを始める。半ば自嘲じみた笑い声だ。

「クロノ。行くわよ」

「…はい」

「二人共、どこ行くの！？」

二人はドアを開け外に出ようとする。

「彼女を止める」

「ゲートを開けて！」

そしてブリッジから駆け出した。

赤く点灯する廊下をひたすら走る。すると反対側からなのは達が走って来た。

「クレアちゃん、クロノ君、何処へ？」

「現地へ向かう。元凶を叩かないと」

「私も行く！」

「僕も！」

「まっ、大船に乗った気でいな」

なのは達もプレシアを止めに行く気らしい。

「……わかったわ」

クレアは少し考え口を開く。

「アルフはフェイトについてあげて」

「う…うん」

アルフは軽く頷く。

「カレル、君は？」

「…フェイトはアルフに任せる。俺も行く」

カレルの返事にクロノは頷き、刃の方を見る。
刃は小さく笑ったのだ。陰湿な笑みで。
そしてクロノは刃に気付かれぬよう後ろに回り込んだ。

「ふん。足手ま「当て身」ふべ！？」

鋭く手刀を叩き込み気絶させた。

「何やってるのクロノ！」

「えっと…刃、大丈夫？」

ユーノが気絶した刃を突く。

「刃が姉さんはともかく、僕の指示を聞くと思う？」

「ありえないの」

「雹が降るね」

なのはとユーノは即答した。刃がクロノの指示を聞くなんて有り得ないのはわかりきっているからだ。

「勝手に行動されては困る。これは今まで以上に危険だからね」

「……まあ、そういう事なら後で片付けてもらいましょ」

クレアも刃を無視する事にした。

実際、刃は勝手に行動するのは明確だ。それにどさくさに紛れて、クロノとカレルを虚数空間に突き落とす可能性もあったからだ。

ここで寝ていてもらうのが最も安全である。

「さあ、行こう！」

クロノは起動させたローランを握りしめ、走り出した。

EP．12　狂気の母（後書き）

多分あと二、三話位で無印は終わるかもしれません

EP．13　時の庭園（前書き）

劇場版の傀儡兵って、スパロボのオリジナル勢力にいそうなデザインだと思います

EP．13　時の庭園

時の庭園入口。
クロノ達の目の前には大量の傀儡兵が待ち構えていた。
剣や盾で武装した物、下半身が尾のようで羽を持つ物、それらより大きな斧を持つ物など、何種類もいるのがわかる。

「いっぱい居るね…」

その数に驚いたのか、ユーノは呟く。

「まだ入口よ。中にはもっと居るわ」

クレアが短く返答する。庭園内から多数の反応が確認されたのだ。
ここの傀儡兵など、ほんの一部にすぎない。

「クレアちゃん、この子達って…」

フェイトのような命のある者ではないか。なのはにとって、最も不安な事だ。

「大丈夫。近くの相手を攻撃するだけの、ただの機械よ」

振り向かずクレアが答える。それを聞いて、なのはがホッとした様に髪が跳ねる。

「そっか、なら安心だ」

「遠慮はいらねえって事か」

なのはとカレルは構え、臨戦体制に入る。だがクレアがそれを右手で制止する。

「この程度の相手に、無駄玉は必要ないよ。クロノ、倒し損ねたのはお願い」

「残ってるかどうか怪しいけど…任せて」

弟の返事に小さく微笑むと、すぐに顔を引き締める。

「はっ！」

『Ｓｔｉｎｇｅｒ　Ｓｎｉｐｅ．』

Ｓ２Ｕの先端に光が集まる。それと同時に三体の傀儡兵が迫って来た。

「はっ！」

放たれた光弾は螺旋を描きながら傀儡兵を引き裂く。

「は、早い！」

続けて次々と傀儡兵を貫き、さらに空中で渦巻き魔力をチャージする。

「スナイプショット！」

キーワードと共に再び加速。残りの傀儡兵を一気に貫いた。しかし

最後尾にいた、銀色で一回り大きな傀儡兵を貫く事はできなかった。

「クロノ！」

「ハッ！」

クレアが指示を出した時にはすでにクロノは傀儡兵のすぐ傍にいた。
スティンガースナイプに紛れ接近したのだ。
傀儡兵はクロノを叩き割ろうと巨大な斧を振り下ろす。クロノは難無く躱し頭上へと飛ぶ。

『Ｉｃｉｃｌｅ　Ｂｕｌｌｅｔ．』

投げ付けるように、身の丈はありそうな一本の氷柱を撃つ。氷柱は傀儡兵の脳天を陥没させるように突き刺さり、傀儡兵は爆散した。

「「「……」」」

姉弟だからできるのであろう連携で、瞬く間に傀儡兵を全滅させた。
三人はあまりの手際の良さに呆然とする。

「ボーっとしてないで！行くよ！」

「あ、うん！」

「すげぇ…」

走り出すクレアの後を追いかけ、庭園内に駆け込む。

庭園内は所々壊れており、崩れた所では黒いもやがうごめいている。

その不気味さになのはとカレルは目を奪われる。

「その穴…黒い空間がある場所は気をつけて」

「虚数空間。あらゆる魔法が一切発動しなくなる空間なんだ」

「飛行魔法もデリートする。もしも落ちたら、重力の底まで落下、二度と上がってこれないわよ！」

まさに奈落の底。例え飛べる魔導師であろうと飲み込む最悪の地。そこに落ちる事は死を意味する。

「き、気をつける」

「お、おう…」

もし落ちたら…そう思うと背筋が凍る程だ。

そして巨大な扉を蹴破ると広間に入る。しかしそこには門に居たのと同じ傀儡兵が、広間を埋めつくすように何体もいた。

「ここから二手に別れる。クロノ、三人を連れて最上階にある駆動炉の封印を！」

「了解！」

「クレアちゃんは？」

「プレシアの元に行く。それが私の仕事だからね。今道を作るから、そしたら！」

「でも！」

彼女一人で行かせるのが不安なのだろう。しかしクロノがなのはを制止する。

「大丈夫。姉さんは強い。だから心配はいらないよ」

「……うん！」

なのはは頷くとユーノを掴み、同じようにクロノはカレルを掴む。

『Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ．』

Ｓ２Ｕの先端に魔力が集中。そして一本の砲撃が傀儡兵を薙ぎ払う。それと同時にクロノとなのはは上に通じる階段を飛び、上って行く。

「姉さん、頼むよ！」

「クレアちゃん、気をつけてね！」

クレアは飛んで行くクロノ達に笑みを向けると、傀儡兵達を睨む。

「こんなので私を止められはしない」

残った傀儡兵はクレア目掛け走り出す。

「はあぁぁぁぁぁぁ！！！」

雄叫びと共にクレアも飛び出した。

一方クロノ達はアルフと合流。螺旋階段のような道を進んで行くが、絶え間無く襲撃してくる傀儡兵達に行く手を阻まれている。駆動炉を守るためか、戦力が集中しているのを危険視してか、傀儡兵はどんどん集まって来る。

飛び交う飛行型の傀儡兵をなのはが撃ち落とし、残りをアルフがその牙で引き裂く。

「くそっ、数が多い！」

カレルは取り囲もうとする金色の傀儡兵を、盾ごと切り裂き、続けて振り下ろした剣を避け胸を突き刺さす。

「どりゃぁぁぁ！」

駆け寄ってくる傀儡兵に投げ飛ばし、斬撃波を放つ。

「斬空牙ッ！」

『Ｙａａａａｈａａａａａ！！』

投げ飛ばされた傀儡兵を真っ二つにし、その後ろにいる傀儡兵もまとめて両断した。

「数だけだろ！」

クロノはアイシクルブレイドで切り伏せながら、アイシクルバレットを放つ。放たれた腕ほどの氷柱は傀儡兵の顔面を一撃で潰した。

「だが、時間をかけるのは得策じゃない！」

背後から襲い掛かる剣を躱し、アイシクルブレイドで首を切り落とす。

（かと言って下手な消耗は避けたいし…）

固まっている傀儡兵にローランを向ける。

『Ｄｉａｍｏｎｄ　Ｄｕｓｔ．』

氷弾の拡散弾が雨のように広がり、まとめて傀儡兵を破壊する。

（いや、焦るな。切り札は一度きりなんだから）

時間がかかれば次元震の危険は大きくなる。その事がクロノの精神を少しづつ削っていった。

「だけど、なんとかしないと…」

ユーノはチェーンバインドで傀儡兵達を拘束している。傀儡兵は抜け出そうともがくが、その鎖から逃れる事はできなかった。

いや、一本のバインドがちぎれ、大型が脱出した。その傀儡兵は斧を振り上げ、背後からなのはに襲い掛かる。

「なのは！」

「っ！？」

ユーノの声に振り向くが、反応が遅れ回避も防御も間に合わない。
だが次の瞬間…

『Ｔｈｕｎｄｅｒ　ｒａｇｅ．』

上空から鋭い雷が傀儡兵に降り注ぐ。

「あ…」

その閃光に一瞬目が眩むが、目を開け見上げると、そこには槍のようにバルディッシュを構えたフェイトがいた。

『Ｇｅｔ　ｓｅｔ．』

「サンダー……レイジ！」

先程より太く巨大な雷が傀儡兵を飲み込み、跡形も無く爆散した。

「フェイト…？」

フェイトはなのはの下まで降り、カレルも飛んで来た。

「フェイト、大丈夫なのか？」

「うん。大丈夫」

カレルもホッとするように胸を撫で下ろした。

だがそんな一時も与えないように壁が崩れ、そこから一体の傀儡兵が現れる。両手や背中に大砲を持つ銅色で大型の傀儡兵だ。

「大型だ。バリアが強い」

「うん。それにあの背中の…」

そう言い終わる前に、今度は真横の壁を壊し、大型がもう一体現れる。

「もう一体かよ!?」

二体の傀儡兵は背中の大砲を向け、砲撃をチャージする。

「十字砲火だ。なのはとフェイトは一体目を。僕とカレルで二体目をやる!」

クロノがカレルの横でローランを構える。

「大丈夫、私達なら…!」

「…うん!うんうん!!」

不安げなのはに、フェイトが勇気付けるように呼び掛ける。共に戦おう。その意味を読みとったなのは嬉しそうに頷く。

「カレル、僕がバリアを砕く!君は本体を!」

「任せな!」

『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ.』

「いくよ、バルディッシュ」

『Ｇｅｔ　ｓｅｔ.』

「こっちもだよ、レイジングハート」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ.』

クロノとカレル、なのはとフェイトがそれぞれ構え、はち切れそうなまでに収束した砲撃を撃つ前に己の一撃を叩き込む。

「全力だ！」

『Ｆｒｏｓｔ　Ｃａｎｎｏｎ.』

クロノの放った冷気がバリアを凍り付かせる。ただの氷の膜となったバリアは、剥がれ落ちるように崩れる。

「牙突…風刃！」

続けてカレルが刺突の衝撃波を放つ。いや…衝撃波と言うより、無数の斬撃の固まりだ。

斬撃波は傀儡兵の胸に直撃、切り刻みながらその身体を掘り進むように貫く。

「サンダー…スマッシャー！」

一方ではフェイトが先行。その雷の砲撃はバリアに阻まれるが、そ

の衝撃で傀儡兵は体制を崩す。

「ディバイン…バスター！」

続けてなのはも砲撃を放つ。重なり合った砲撃はバリアごと傀儡兵を、そして庭園をも貫いた。
庭園を揺らす程の衝撃が響く。

傀儡兵を全滅させたクロノ達はホッと一息つく。

「フェイト、フェイト…フェイト！」

「アルフ」

アルフがフェイトに駆け寄り抱き着く。

「心配かけてごめんね。ちゃんと自分で終わらせて、それから始めるよ……本当の自分を」

もう迷わない。決着を着ける。必ず。

「フェイト…」

「カレルもごめんね」

「良いさ。俺もたいした力になれなくて…」

フェイトは首を振る。

「ううん。カレルやアルフ、バルディッシュがいてくれたから、私

は立ち上がれた。一人じゃないって教えてくれたから」

「あ、ああ。まあ…な」

カレルは照れ臭そうに頭を掻く。

「そろそろ良いかな？急いだ方が良い」

クロノの声に振り向く。

「こっち。案内するよ」

「助かる」

フェイトの後を追うように駆け出した。

傀儡兵は次々と襲い掛かるが、クロノ達は難無く撃退し進んで行く。
そして一つの扉を破壊した。

「このエレベーターから、駆動炉に向かえる」

「うん、ありがとう！」

「感謝する」

駆動炉は目前。今だに周りには傀儡兵がいるが、数はだいぶ減って

いる。

［カレル、フェイトと一緒に行くんだ］

［え？］

不意にクロノが念話をする。

カレルもフェイトといた方が良い。そう思ったのだ。

［一緒に行きたいんだろ？止めはしないさ］

［……悪い］

するとユーノが焦るように走ってくる。

「今クレアが一人で向かっている。急がないと間に合わないかも！」

「フェイト！」

「うん。じゃあ…」

三人は下の階へと向かう。

［一応言っておくが、プレシアを助けようとして、君が虚数空間に落ちないようにね］

［……！？お前…］

クロノの言葉にギョッとする。

「詳しい事は後だ！」

「～～っ！話し、聞かせてもらうぞ！」

考えるのは後。カレルはフェイト達とプレシアの下へと向かった。

エレベーターから一気に駆動炉まで到達した。しかし、そこには多数の傀儡兵が待ち構えていた。

「…さて、封印はなのはに任せる」

「クロノ君は？」

「僕はあいつらの相手をするよ」

『Ｉｃｉｃｌｅ　Ｂｌａｄｅ．』

ローランの先端に氷の剣が形成され、クロノは二人の前に立つ。

「もし抜かれた場合、なのはの防御は…ユーノ、君に任せる」

「僕が？」

クロノは振り向き、ユーノの額を小突く。

「女の子を守る役をあげるんだ。しくじるんじゃないぞ、フェレッ

トもどき」

「誰がフェレットもどきだ！」

ユーノは怒ったように身を乗り出す。

「でも、いつも通りかも」

「え？」

振り向くとなのはが笑っていた。

「ユーノ君がいるから、私は全力で戦える。ね？」

「～～！！！」

その微笑みにユーノは見る見る顔を赤くする。

「ああ、やってやる！なのはには指一本触れさせやしないよ！僕がやってやるさ！」

真剣な表情でなのはに宣言する。その言葉になのはは僅かに頬を染める。

（そう…始めは刃君が守ってくれてるって思ってた。だけど違う…刃君は好き勝手に暴れていただけ。私の事を守ってくれてたのは、ユーノ君だった）

そう思うと、心も、背中も暖かくなる。力が湧いてくる。

『Ｓｅａｌｉｎｇ　ｍｏｄｅ.』

なのはが封印の準備に入るのを確認し、クロノは傀儡兵達の前に立つ。

なのはどころか、ユーノの所にだって行かせるものか。その気迫は周囲を凍てつかせる程である。

数の差は圧倒的。だが、恐れは無い。

「さあ…かき氷になりたい奴から……」

床を踏み締め、ローランを構える。

傀儡兵達もクロノを標的に定めたようだ。

「かかって来い！！！」

EP．13　時の庭園（後書き）

次回、無双入ります

ＥＰ．１４　氷結の魔導師（前書き）

スーパークロノタイムです
Ｔａｋｅ　ａ　Ｓｈｏｔを聞きながら読んでいただけると幸いです
あれは神曲です

EP．１４　氷結の魔導師

クロノの目の前には無数の傀儡兵がいる。
一対多は初めてでは無い。任務として数名の犯罪者を同時に相手をした事もあるし、転生者が手を組んで襲い掛かって来た事もある。
だが、この数を一人で相手をするなんて事は今まで無かった。
背筋がぞくりとするが、相手はただの機械、恐れる事は無い。

「行くぞ！」

前からは剣を持つ金色の傀儡兵が走ってくる。クロノもローランを握り駆け出す。

「だあぁぁぁ！」

剣が振るわれるよりも速く跳躍、傀儡兵の首を切り落とす。

「次！」

傀儡兵達は武器を構え、クロノを切り刻もうと襲い掛かる。クロノは前方にローランを向けた。

『Ｆｒｏｓｔ　Ｃａｎｎｏｎ．』

冷気を伴った砲撃が、傀儡兵をまとめて貫く。砲撃でバラバラになった傀儡兵の傷口は凍り付き、その場に崩れさった。
しかしその残骸を押しのけ、休む間もなく次が迫ってくる。それだけでなく、飛行型が二人を狙い飛び出した。

「行かせるか！」

目の前のマントを着けた傀儡兵の一閃を避け、頭を踏み付けて跳躍する。

『Ｉｃｉｃｌｅ　Ｂｕｌｌｅｔ．』

周囲に五本の氷柱を形成、それを一斉に発射する。氷柱はそれぞれ飛行型の胴体を貫き撃墜した。

下には着地のスキを狙い、剣を構える傀儡兵がいる。

「甘い！」

『Ｉｃｉｃｌｅ　Ｂｕｌｌｅｔ．』

着地せず飛行魔法で距離をとり、アイシクルバレットで頭を貫いた。

そのままローランを握りしめ、先端に魔力を集中させる。

「はぁぁぁぁ！！」

『Ｉｃｉｃｌｅ　Ｂｌａｄｅ　Ｍａｘｉｍｕｍ．』

最大出力のアイシクルブレイド…ジェットザンバーのような巨大な氷の剣を担ぎ、大群のど真ん中に突っ込む。

「うあぁぁぁぁ！」

豪快にフルスウィング。傀儡兵達を一気に薙ぎ払い、次々と両断する。そして傀儡兵の爆散と同時に剣が砕け散った。

続けて背後に迫る大型の振り下ろした斧を避け、懐に張り付き胸に

ローランを押し付ける。

『Ｄｉａｍｏｎｄ　Ｄｕｓｔ．』

無数の氷弾が上半身を吹き飛ばし、傀儡兵は爆散した。
その爆煙に紛れ、金色の傀儡兵が剣で突きを繰り出す。クロノは倒れるように身体を反らし回避。切っ先が前髪をかすり、髪が数本切れる。

「この！」

『Ｉｃｉｃｌｅ　Ｂｕｌｌｅｔ．』

後ろに跳びながら一本の氷柱を撃つ。しかしその氷柱は盾ごと左腕を貫き、腕を引きちぎっただけであった。

（しまった。外した！）

集団を相手にする場合は、いかに手際良く敵の数を減らすかである。常に一撃必殺でいるのが最善だ。仕留め損ねればそれだけ時間がかかり、さらに隙も生まれる。ましてや相手は機械だ。腕一本失った位で止まるはずがない。
その小さなミスがクロノの思考を一瞬停止させた。

「っ！」

背後から突き出された槍に反応が遅れてしまった。ぎりぎり回避が間に合ったため、串刺しにはならなかったものの、右脇腹のバリアジャケットを切り裂き浅くはない傷をつける。
そして傷口血が滲み出て、銀色の衣を赤く染める。

「くっ……うお！？」

痛みに顔を歪める間もなく、次々と剣や槍が襲い掛かる。もはや流れは傀儡兵に奪われ始めた。

絶え間無く繰り出される斬撃、刺突。空中から一撃離脱を繰り返す飛行型。その隙をつくように巨大な斧を叩き付ける大型。
その連携をかろうじて避けてはいるが、反撃する間もなく、少しづつ傷は増えていった。左肩のトゲは壊れ身体のあちこちに切り傷ができている。

「この…！」

大型の股下に潜り込むように斧を避ける。そのまま後ろに回り込んで飛び上がった。

「調子に…」

『Ｉｃｉｃｌｅ　Ｂｌａｄｅ.』

ローランの先端に氷の剣を形成し振り上げる。

「乗るなぁぁぁ！！」

後頭部から背中にかけて一閃。傷口から火花を散らつつ倒れ、爆散した。

（一気に終わらせる！）

幸い、クロノは敵陣のど真んで囲まれおり、あの魔法の効果は最大限に発揮できる。

「白銀の息吹よ、荒れ狂う風となり命の灯を喰らい尽くせ…」

クロノは詠唱をしながら傀儡兵の攻撃を避ける。詠唱と同時にローランの先端に魔力が集中しスフィアを形成する。

［二人共、こっちに近づかないで！］

そろそろ封印が終えていると考え、なのは達に念話を送る。

［え？封印終わったから、今から行こうかと…］

［クロノ、格好つけてないで…］

［空間攻撃魔法だ。巻き込まれるぞ！］

空間攻撃魔法。その言葉を聞いた途端、ユーノは顔を青くする。

「なのは、離れるよ！」

「ちょ！？ユーノ君！？」

ユーノはなのはを引っ張り、一目散に逃げ出す。

傀儡兵を一気に殲滅するのを悟ったのだ。自分達も巻き込まれかねないと。

クロノは二人が離れるのを確認すると魔法陣を展開し、ローランの先端を床に突き付ける。

自身の最大の魔法を発動した。

「氷河に…溺れろ！！！」

『Ｒａｍｐａｇｅ　Ｂｌｉｚｚａｒｄ』

ローランの先端のスフィアが、クロノを中心に広がる。
まるで世界の終焉のような大寒波が吹き荒れ、傀儡兵を…全てを凍らした。

「うわ…」

「すごい…」

魔力スフィアが消え、なのは達の目の前に現れたのは極寒の地と化した庭園内だった。
床はスケート場のように凍り付き、傀儡兵は身動き一つしない氷像となっていた。

「…寒い」

なのはの息は白くなっている。
辺り一面氷に包まれていりのだ。当然気温も大きく低下している。

「あ、そうだ。クロノ！」

ユーノが飛ぶと、その後を追うようになのはも飛び上がる。氷の上だ。とても歩けるような場所じゃない。
少し飛んで行くと、氷の上に座り込むクロノが見えた。

「クロノ！」

「クロノ君！」

二人はクロノの前に着地するが、滑ってバランスを崩しかける。

「おっとっと…。クロノ君、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ。でも…少し疲れたかな」

連戦に特大の凍結魔法。疲れて当然である。

「ユーノ、肩を貸してくれると助かる」

「良いよ…って、傷だらけじゃないか！今手当するから」

ユーノがしゃがみ右手を突き出す。すると淡い緑色に光り治癒魔法をかけ始めた。

「よかった、クロノ君無事で」

「そう簡単にやられはしないよ。少しきつかったけど」

クロノは頭に手をやり笑い出す。なのはは一安心すると、ふとエレベーターに視線を移す。

「フェイトが気になるかい？」

「……うん」

小さく申し訳なさそうに頷く。

「行きな。駆動炉も抑えたし」

「クロノの事は僕に任せて」

二人の言葉に一瞬止まるが、すぐに嬉しそうな顔をして大きく頷く。

「うん！ありがとう！」

飛び立つ時に滑って転びそうになったが、なのははすぐにフェイトの下へと飛んで行った。

「……所でクロノ」

「なんだい？」

「すっごく寒いんだけど」

ユーノはマントを押さえ身体を震わせる。クロノにとっても、半袖短パンのユーノは、見てる自分が寒くなりそうだった。

「バリアジャケットとはいえ、これはきついよ…」

「……フェレットに変身したらどうだ？毛がモコモコで暖かいだろ。というより変身しろ。そして僕の懐炉になれ」

「絶対に嫌だ」

一瞬手当を止めようかと思ったユーノだった。

EP．１４　氷結の魔導師（後書き）

やっぱり詠唱は厨二じみている方が良いですね
長いと支離滅裂になってしまいますが

EP．15　終わる宿命（前書き）

どうしてこうなった

EP．15　終わる宿命

時の庭園の最下層。庭園は崩れ、瓦礫の山が散乱し、床下には穴が開き虚数空間が見る。

プレシアはアリシアの傍に佇み、ジュエルシードを暴走させていた。ジュエルシードは共鳴するように怪しく光りを放つ。

だがその最中、絶え間無く響いていた振動が収まる。突然起こった事態に、辺りを慌しく見回す。

次元震を抑える。そんな事、自分でも簡単にはできないからだ。

『プレシア・テスタロッサ、終わりですよ』

響き渡る女性声。その声に驚くプレシア。

この声の主が止めたのだろう。

『次元震は私が抑えています』

時の庭園の一区画にリンディはいた。周囲には彼女が破壊した傀儡兵の残骸が散らばり、足元に薄緑色の魔法陣を展開し、背中には妖精のような四枚の羽根を広げている。

『駆動炉も直に封印。そして貴方の下には執務官が向かっています』

目を瞑り、魔力を集中させながらリンディは言葉を続ける。

『忘れられし都、アルハザード……彼の地に眠る秘術は、存在するかどうかも曖昧なただの伝説です！』

告げられた言葉に、プレシアは眉を潜めながら呟く。

「ちがうわ。アルハザードは次元の狭間に存在する！時間と空間が砕かれた時…その狭間に滑落していく輝き…道はたしかにそこにある…」

プレシアの瞳には絶対の自信があった。いや、確信と言える程のだ。

『随分と分の悪い賭けだわ』

半ば呆れるように言う。

『仮にその道があったとして…あなたはその道に行って何をする？失った時間と犯した過ちを取り戻す？』

「そう…取り戻す。私とアリシアの…過去と未来を。取り戻すのよ。こんなはずじゃなかった……この世界の全てを！」

その直後、爆音と共に水色の砲撃が壁を壊し、クレアが入って来た。

「世界は何時だってこんなはずじゃないことばかりよ！昔から何時だって、誰だって！」

激しい戦いをしてきたのだろう。彼女の額からは血が流れている。

「不幸から逃げるか戦うかは個人の自由だけど、他人を巻き込む権利は誰にも無いわ！」

そしてフェイトが現れ、アルフとカレルも彼女に続くように降りてきた。

フェイトは何も言わず、プレシアを寂しげな表情で見据えている。

「……うっ！ごふっ！ごほっ！ごほっ！」

急にプレシアは激しく咳き込んで吐血した。
彼女の身体も限界が近い。

「っ！母さん！」

「…何をしに来たの？消えなさい。あなたにもう用はないわ」

フェイトが駆け寄ろうとしたが、プレシアは彼女を拒絶する。

「……貴女に言いたいことがあって来ました」

フェイトがプレシアを見つめて言った。

「私は、アリシア・テスタロッサじゃありません。たしかに私は貴女の造った人形だったのかもしれません。だけど、私は…フェイト・テスタロッサは、貴女に生み出されて、貴女に育ててもらった…貴女の娘です」

「…クッ…フフフ…アハハハハハハハハ！」

一瞬悲しげに表情を崩したが、誤魔化すように笑い出す。

「…だから何？今更貴女を娘と思えと言うの？」

「貴女が…それを望むのなら…」

プレシアにそっと右手を差し延べる。

「……それを望むのなら、私は貴女と共にあり続けます。たとえ世界中の誰からも、どんな出来事からも貴女を守る」

プレシアはフェイトを睨むのを止めない。

「私が貴女の娘だからじゃない……貴女が、私の母さんだから！」

それからフェイトは更に前に出て手を差し延べる。

「くだらないわ」

プレシアは冷たく言い放ち、ゆらりと背筋を伸ばす。

「いいかげんにしろ！」

カレルは我慢の限界だった。決してフェイトを認めようとしない、何がなんでも拒絶する。
その異常な態度が許せなかった。

「どうしてフェイトを拒絶するんだ！何故【フェイト】として認めてやれないんだ！？」

プレシアは小さく咳込むと、打って変わって悲しげな表情をする。

「本当に青いわね…。子供が思い付くような事、私が考えないと思って？」

またも咳込み、口から垂れる血を拭う。

「フェイトと新しい人生を歩む…そう考えた事もあるわ。でもできなかった…アリシアを諦められなかった。そして何より、アリシアと同じ顔、同じ声で、別の存在であるフェイトが許せなかった。生み出してしまった自分自身にも。私は…フェイトを……愛せなかった…」

心の奥底から搾り出すような声。そしてその瞳は、言いようのない哀愁に満ちていた。

「だからフェイト、私の事は忘れて自由に生きなさい……。私のようになっては駄目よ…」

「母…さん…？」

プレシアは一瞬だけ笑うと、自身の持つ杖で床を叩き魔法陣を展開した。そしてジュエルシードが再び発動し、先程より大きな次元震が起きた。

［アルフ、カレル…フェイトの事は任せるわ］

［お、おい！］

［あんた、何を！］

プレシアの足元にひびが入り、崩れ始める。

「…アリシア、今傍に行くわ…」

そしてプレシアは重力に身を委ねるように、虚数空間へと落ちる。アリシアの入ったポッドと共に。

「母さん、駄目！！」

「馬鹿！落ちるぞ！」

今にも飛び出そうとするフェイトをカレルが押さえる。

「嫌！離してカレル！母さん！！」

フェイトは必死になるが、プレシアの姿はどんどん小さくなり、そして見えなくなった。

「二人共、早く！」

「フェイト！カレル！」

クレアとアルフが叫ぶが、フェイトは動こうとしない。すると天井を突き破ってなのはが現れた。

「フェイトちゃん！」

「なのはか。手伝ってくれ！」

「うん！」

カレルはなのはと共にフェイトを引きずるように連れ、クレア達の所まで走り出した。

「早く！」

目の前ではクレアが手招きしている。

「クレアちゃん。ユーノ君達は？」

「大丈夫。さっきエドから脱出したって」

「よかった…」

「それより急ぐわよ。二人共、フェイトをお願い」

「うん」

「おう」

時の庭園は崩れていく。その姿は、プレシアの最期を表しているかのようだった。

プレシアの視界には、毒々しい色調の虚数空間が広がっている。とっくにフェイトの姿も見えなくなってる。彼女は薄れていく意識の中、自分の行動を疑問に感じた。

何故あんな事を言ったのだろうと…

（…本当、どうかしてるわ）

改めて考えると目茶苦茶な人生だった。

夫ともちょっとしたすれ違いから離婚。女手一つでアリシアを育て

ると思えば【ヒュードラ】に奪われ、さらには裁判にも負ける。
そこから一気に壊れていった。
自らの身も顧みず危険な実験を続け身体を壊し、アリシアを蘇らせる術を必死に探った。そしてプロジェクトFに希望を見出だし、記憶転写したクローンを生み出してみれば別人だった…。

（そして私はフェイトを…）

リニスに押し付け、手駒にするために教育させた。フェイトはアリシアと違い資質が有り、実力を伸ばしていった。
そしてアルハザードの技術を求め、フェイトにジュエルシードを集めさせた。
そしてこの様だ。

（何を間違えたのかしら…いいえ、全部間違いだった。私は弱い。アリシアの死も、フェイトの事も受け入れられなかった）

悲しみや自分への怒りに涙が溢れてくる。

「ごめんなさい…こんな駄目なお母さんで……こんな所に閉じ込めて、ごめんねアリシア……辛い思いをさせてごめんなさい、フェイト…」

アリシアの入ったポッドを抱きしめる。

「ごめんなさい…」

彼女の言葉を聞く者は無く、二人は虚数空間の奥底へと消えて行った。

EP．15　終わる宿命（後書き）

刃がいたら…考えたくもないです

EP．16　呼んでほしい、名前を（前書き）

無印完結です

EP．16　呼んでほしい、名前を

アースラの一室。ここでクレア達は簡単な手当を受けていた。
ちなみにクロノはクレア達より怪我が酷かったので、医務室にて手当を受けている。

「あれ、フェイトちゃん達は？」

「三人共護送室よ。彼女達はこの事件の重要参考人だからね。申し訳ないけど、しばらく隔離になるわ」

「そんな…痛っ！？」

驚いて身を乗り出そうとすりが、動く事で包帯が擦れ痛みが走る。

「なのは、じっとして」

「うん」

ユーノに叱られシュンとする。

「今回の事件は、一歩間違えれば次元断層さえ引き起こしかねなかった重大な事件なのよ」

クレアが真剣な話しをしている最中、エドワードは包帯をリボンのように結んで遊んでいる。

「時空管理局としては、関係者の処遇には慎重にならざるを得ないの。それは分かるわね？」

「うん…」

なのはは頭では解ってはいるものの、今一納得はいかなかった。フェイトの事を思うと。

「エド、やり直し…」

「可愛いから良いじゃん」

「そういう問題じゃないの！」

「ちぇ…」

エドワードは渋々包帯を巻き直し始めた。

そうしていると外からドタドタと走る音が聞こえる。

「このＫＹィィィィィ！！！」

ドアを開けて入って来たのは、息を切らし髪を目茶苦茶にした刃だった。

「あ、刃」

「刃君、よく眠れた？」

「おう、ぐっすりと…じゃねえ！」

刃は喚きながら室内を見渡すが、目当てのクロノは別室である。

「クロノはいないわよ」

「何処にいるんだ！あの野郎、ぶっ殺してやる！」

クレアはため息をつきながら蜉谷を押さえる。

「よくクレアの前でそんな事言えるね」

「殺人予告とは、大た～ん♪」

少年二人も苦笑いしている。

「あいつ、俺が活躍するのが嫌だったんだ！ぜってえ許さねー！」

「うわぁ…」

なのはもドン引きし、冷たい視線を送る。

「……刃、君はクロノの命令を聞ける？」

「何で俺があんな奴の命令を聞かなきゃなんねえんだ？」

当然のように口を開く刃に、クレアは今にでもひっぱたきたいのを耐え、若干引き攣ったような笑顔をする。

「あのね…いくら協力者とはいえ、私達の指示を聞けないような人を向かわせる訳にはいかないの」

「フッ…俺が出遅れると思うか？」

自信に満ちた笑みをクレアに向ける。その気取った態度にクレアはなお苛立つが、笑顔を崩さずにいた。

「でもね、こっちとしても刃に万が一の事があっては困るの。だから…ね？」

あくまで刃が心配だからと、優しく言い聞かせる。
刃は格好つけるように髪をかき上げ、クレアに微笑む。

「まあ…そこまで言うなら…な。でも次は心配しなくて良いんだからな」

「はいはい。じゃあ先に食堂に行ってて。後で行くから」

「おう。席取っとくぜ♪」

刃がウインクしながら部屋から出ていく。そして部屋に嫌な静寂に満たされる。

「クレアちゃん、どうぞ」

エドワードが、ポンとクレアの頭に手を置いた。するとクレアの顔が見る見る赤くなっていく。

「あぁぁぁ～！！なんで私があんな事を言わなきゃなんないの！？民間人でなけりゃエクスキューションシフトよ！」

「どうどう」

ポカポカとエドワードを叩きながら騒ぐ。執務官としての威厳は無

く、一人の少女であった。

「普通に言えば良いのに…」

「いや、刃なら絶対聞かないと思うよ…」

二人も苦笑いするしか無かった。

「あの馬鹿！絶対野放ししないんだから！」

クレアの声が廊下まで響いた。

ここは取り調べ室。部屋にはクロノとカレルがいた。
事情聴取となっているが、実際は二人の個人的な話しだった。

［お前も転生者だったんだな］

［そうだよ］

普通に事情聴取を続けながら、念話で話しをする。

［しかし【クロノ】ねぇ…］

［本来は姉さんがなんだけどね］

［大変だったろ］

［かなり］

調書をまとめながら続ける。

［……信用して良いんだな？］

［少なくとも、僕は君を刃とは違うと思っている。だから話したんだ］

［…わかった。少しは俺も信用する］

［ありがとう］

お互いの意図は掴めていない。しかし、刃のような存在ではないのはわかる。

完全な信頼関係を築くのは少しばかり時間がかかりそうだが、二人の距離は縮まっていった。

数日後。なのは達は食堂で、リンディと朝食を食べていた。

「次元震の余波はもうすぐ治まるわ。ここからなのはさん達の世界になら明日には戻れると思う」

「よかった！」

「ようやくか」

なのはは非常に嬉しそうだ。

家族や友人の下に帰れる。それが何よりも嬉しいのだろう。

「ただ、ミッドチルダ方面の航路はまだ空間が安定しないの。しばらく時間がかかるみたい」

「そうなんですか…」

対してユーノには申し訳なさそうに告げる。

「数ヶ月か半年か、安全な航行が出来るまでそれくらいはかかりそうね」

「そうですか。その…まあ、うちの部族は遺跡探して流浪している人ばっかりですから。急いで帰る必要もないと言えばないんですが…。でもその間、ここにずっとお世話になるわけにもいかないし…」

いくらすぐに帰る必要が無いとはいえ、あまりアースラに世話になりすぎるのも気が引ける。散々世話になっているのだ。あまり迷惑をかけたくない。

「じゃあ、うちにいればいいよ」

「ハァ!?」

刃が素っ頓狂な声を上げる。

「なのは、いいの?」

「ちょっと待った！」

頬を赤らめるユーノを遮るように、刃はなのはの肩を掴む。

「こいつ男だぞ！」

「別に平気だよ。それに、お姉ちゃんもお母さんもユーノ君に会いたがっていたし」

「だからって…」

なのはは少しムッとした表情をし、刃の手を払う。

「私が良いって言ってるんだし、問題無いよ。あとはユーノ君さえよければ」

なのははユーノの手を取る。ユーノはさらに顔を赤くする。

「じゃあ、その、えっとお…お世話になります」

「うん！」

信じられないように呆然とする刃を余所に、二人きりの空間を作り上げるなのはとユーノ。まるで結界だ。

「うふふ」

そんな二人を微笑ましく眺めるリンディであった。

なのは達を地球に送り返してから数日。
クロノ達はフェイト達のために忙しかった。証拠集めに上層部への説明。やる事は山のようにあったが、苦も無く彼らはこなしていった。
三人の無罪を勝ち取るために。
そしてもう一つ。やるべき事があった。

そんなある日。

なのは達は海鳴臨海公園に来た。そう、フェイト達が本局に移動になる前に、一度会いに来たのだ。

「フェイトちゃん！」

なのはは駆け出し、その後に刃が続く。

「あんまり時間は無いんだが、しばらく話すといい。僕達は向こうにいるから」

「珍しく空気を読んだじゃな…」

「はいはい。あんたもこっち」

クレアは刃の耳を引っ張り連れて行った。

「いや、俺がいなきゃ始まらんだろ！ちょ、なのは！」

「刃君、邪魔しないで」

「なのは！？」

なのはの言葉に完全に停止した刃は、ズルズルと引きずられていった。

そして二人と少し離れたベンチに腰掛ける。

「カレルはどうなるの？」

クロノの肩に乗ったユーノが口を開く。

「一応どうにかなりそうだ。俺の方が早く裁判も終わりそうだし」

「彼は現地協力者だからね。フェイトよりも無罪を取るのは楽ね」

クレアは身体を伸ばしながら言う。

「ごめんよカレル、あたしらのせいでさ…」

「自業自得だ。気にすんな」

「だけど、母親が来た時は顔を真っ青にしていたな」

クロノが面白半分でカレルの母親の事を話した瞬間、カレルの顔が見る見る青白くなって行く。

「止めてくれ…マジで恐かったんだから…」

母親の折檻が相当きつかったのか、ガクガク震え出した。いつの時代も母は強いのであった。

「…なあクロノ。あそこでカメラを構えている連中は？」

「さあ？」

アルフが指差した所には、数人の少年少女がカメラをなのは達に向けていた。

クロノには解っている。あれは転生者だ。おそらく無印の最後を見に来たのだろう。

「……ちょっと黙らせて来て良いかい？」

「時間はあんまり無いんだが…」

「手早くやるよ」

手をパキパキと鳴らしながら、アルフは少年少女達へと走って行った。

一応彼らの行いは盗撮である。クロノは心の中で小さく十字をきったのだった。

「もう…。あ、刃。今度の日曜時間ある？」

クレアはなのは達をハレンチな目で見る刃に話しかける。

「日曜？なんで？」

「本局に来てほしいの。知り合いから刃を呼ぶよう言われてね」

本局。その言葉に一瞬びくつく。

まさか脳どもに目をつけられた?そんな不安が頭を過ぎる。しかしクレアは【知り合い】と言っていた。しかも自分の能力はレアスキルに近い。

刃は一つの都合の良い仮説に辿り着いた。

(まさか、特殊部隊への勧誘とか!?どうすっかな~♪いや、でも上手くいけば、A'sでKYに命令ができるようになるかも!そしてゆくゆくは【管理局最強】!)

そんなありもしない妄想に胸を踊らせていた。

「仕方ないな。時間空けとくぜ」

「ありがと」

顔は良いのに何故か気持ち悪いウインクに、クレアは背筋が凍るようだった。

[おい、なんかあんのか?]

カレルは不信に思い、クロノに質問をする。

[刃のリンカーコアの封印だよ]

「はあ!?」

以外な事実に立ち上がり、声を上げて驚く。

「どうしたのカレル？」

「いや…ひゃっくりだ」

ユーノに苦しい言い訳をしながら座った。

［まじかよ？］

［姉さんの言っている事は嘘だよ。刃は危険だ。だから上をなんとか説得して、リンカーコアの封印を承諾させたよ］

［勧誘は？］

［なんとか黙らせた。あんな奴をほって置く訳にはいかないからね］

［成る程…］

クロノ達はフェイト、カレル、アルフの裁判の準備以外にも、刃の処遇についても奔走していたのだ。管理局にとっては欲しい逸材だろう。しかしそれ以上に危険な存在なのだ。

なんとか刃のリンカーコア封印にこぎつけ、今度それを実行する事になった。

「時間だし、行きましょ。アルフ！」

「あいよ！」

転生者達を追い払っていたアルフも合流し、二人の下へ行く。

「時間だ…そろそろいいか？」

「うん」

フェイトは振り向き、軽く頷く。

「フェイトちゃん！」

するとなのははリボンをほどいてフェイトに差し出す。

「思い出に出来るもの、こんなのしかないんだけど」

フェイトも同じくリボンをほどく。

「じゃあ、私も」

お互いのリボンを交換した。

「ありがとう、なのは」

「うん、フェイトちゃん」

「きっとまた」

「うん、きっとまた」

そして別れの時間。クロノ達の足元には、大きな転移魔法の魔法陣が広がっている。

「バイバイ、またね。クレアちゃん、クロノ君、アルフさん、カレ

ル君、、フェイトちゃん」

手を振るなのはに応えるように、クロノ達も手を振る。そして一際大きな光りを放ち、クロノ達はアースラへと戻って行った。

なのはとユーノは気付かなかった。刃が顔を青ざめさせている事に。

刃は焦っていた。実はクロノとカレルの念話を盗聴していたのだ。

「ふざけんな…俺はオリ主だぞ！」

自室の机を叩く。

リンカーコアが機能しなければ、新月の書も無力化される。そうなれば介入など不可能だ。

A's ではなのは側でいるつもりでいた。なのはとフェイトの蒐集を阻止、はやてを途中で攻略してヴォルケンリッターとも親しくなる。そして結界を破壊したり糞猫を嬲る。

だが、魔力を封じられてしまえば戦えない。何もできない。

そしたらカレルにオリ主の座を奪われてしまう。

（そんな事させるか！せっかくここまで来たんだ。俺がオリ主なんだ！）

だがこのままでは全てが水の泡。

刃は考えた。どうすれば良いかと。そして厨二じみた結論に達した。

（突如恋こがれていた少年が行方不明に。そして再開した彼は敵となっていた。…これだ！それに修行にもなる！）

神道刃は突如行方をくらました。家族に当てた置き手紙を残して。

EP．16　呼んでほしい、名前を（後書き）

次回から空白期です
A'sは刃のせいで、荒れる予定です

クロノ「出番はまだ先だ。もう少し我慢していててくれ、デュランダル」

デュラ「OK，Boss．」

EP．17　事件が終わって（前書き）

空白期突入

EP．17　事件が終わって

「…と言う訳で、神道君について何かわかったら、警察の方へ連絡する事。良いですね？」

「「「「「はい」」」」」

教師の言葉に生徒達が返事をする。

刃が行方不明になった翌日。家族からの連絡を聞き、学校でも話題となった。

ホームルームが終わると教室は騒がしくなる。心配する女子生徒、興味の無い男子生徒と様々である。

なのはは心配よりも、不安の感情の方が強かった。今回の事件にて刃の本性を知ったなのはにとって、刃の身の安全より、彼が何かをやらかす方が恐ろしい。

あのどす黒い力を欲望のままにどう振る舞うのか、考えただけでも背筋が凍り付くようだ。

「なのは…」

「なのはちゃん…」

なのはの下に二人の少女が訪れる。アリサとすずかだ。

刃の本性を知らない彼女達は、刃の事を心配していた。何か危険な事に巻き込まれてはいないかと…

「アリサちゃん、すずかちゃん…」

彼の事を本気で心配している親友に、なのははどう言えば良いのか

わからなかった。魔法の事を話す事はできず、なのはも刃を好ましく思っていないため非常に厄介である。

「刃、どうしたのかしら…」

「うん…心配だよね」

「……そう…だね」

適当な相槌を打ち、話しを続ける。

「なのはちゃん。この前いなかった時、何かあった?」

「何か心当たり無い?」

心当たりといえば、魔法の事だ。しかし話す事はできない。管理外世界には基本的に、魔法技術に関する守秘義務が生じる。親友に対して秘密を作る。なのはにとっては耐え難い事だったが、法に従うのは当然の事だ。

「ごめん、わからないや…」

(ごめんね。アリサちゃん、すずかちゃん)

下手に否定しても怪しまれる。だから濁すような事を言って誤魔化すしかなかった。

「……なのは。刃と何かあったの?なんだか、帰って来てから刃を避けてるようだし…」

「喧嘩でもしたの？」

やはり二人は気付いていた、なのはの態度の変貌に。彼女達からすればライバルが減ったのだが、親友の行動に不信に思い、同時に心配しているのだ。

「喧嘩とかはしてないよ。ただ、刃君の事が好きじゃ無くなっただけ」

【嫌い】とストレートに言わない所が、なのはの性格を表している。しかしその態度が、刃を目覚めさせられなかったのかもしれない。

「そ、そう…」

「なのはちゃん…」

なのはの態度に戸惑う二人。今まで刃を取り合い争った事もあるのに、なのはの気持ちの変化に驚くしかなかった。
そんな二人に気付いてか、なのははあわてて笑顔で話し掛ける。

「ふ、二人はどうかな？何か心当たりある？」

アリサとすずかは顔を見合わせる。まるで二人には、何か心当たりがあるかのように。

「ねえ…【アレ】じゃないかな？」

「もしかしてなのはちゃんも知っちゃって…」

「正直驚くし」

アリサとすずかは、何かボソボソと話しだす。

「話しちゃって良いのかな？」

「……仕方ないわ。なのはにも話そ」

何か意を決したように、なのはの方に振り向く。

「なのは、今日の放課後うちに来て」

「ちょっと、学校だと話しづらいから…」

「う、うん…」

そして放課後。なのはは二人から告げられた事実に、ただ唖然とした。

ここは時空管理局本局。その一画にある休憩所にクロノはいた。

「ふう…」

フェイトとカレルの裁判で忙しい中の一時の休息。自動販売機からいつものホットミルクティーを買い、椅子に座る。一口飲むと、温かさと甘さが口に広がり、何か力が抜けるようだった。

すると、背後から人の気配がする。

「エターナルフォースブリザードは習得できたかしら、クロノ」

「俺達としては、是非とも習得して欲しいんだがな」

一組の男女の声。クロノはこの声の主を知っている。

「あれは殺傷設定のエターナルコフィンな気がするんだがな。タウ、ライル」

クロノは背後の二人組に振り向く。そこにいたのは一組の少女と少年だった。

タウと呼ばれた、顔の右半分を隠す程長い茶髪の少女は、クロノの士官学校時代からの友人である転生者だ。現在は武装局員として働いている。

その隣に立つライルと呼ばれた、くせっ毛の金髪にぐるぐる眼鏡の少年は、タウから紹介された転生者で、デバイスマイスターである。

因みにこの二人、恋人同士でもある。

「ところでさ…」

タウは辺りを見渡した後クロノの対面に座り、ライルもその隣に座り、両手に持った飲み物を置く。

「無印終わったわね」

「なんとかね」

「転生者はいたのか？」

「いたよ」

クロノは手にした端末機を操作し、モニターを出す。そこにはカレルと刃が映し出されていた。

「で、どういった連中なんだ？」

「こっちの…フェイトに付いたカレルは、まだわからない所があるけど、少なくともハーレム狙いとかいった馬鹿じゃない」

「じゃあフェイト狙いかしら？」

「おやおや…」

「可能性はある。でもフェイト曰く【カレルは友達だよ】だそうだ」

ライルは面白そうにコーヒーを口に運ぶ。湯気で眼鏡が曇るが、すぐに指で拭き取る。

「じゃあこのロンゲは？」

タウが刃を指差す。

「刃はなのは側だよ。そんで典型的な馬鹿だ」

「名前からしてアレだしな」

「勿論たたきのめしたけど、こいつは厄介でね。現在行方不明なんだ」

「…私の方でも調べてみるわ」

「助かる」

クロノは小さく頭を下げる。

「そういやさ、クロノに頼まれてた【アレ】。調べといたぜ」

ライルは一枚のメモリーをちらつかせる。

「本当か!?」

「おっと、ちゃんと取引したろ?これ手に入れるの大変だったんだぜ」

「……ああ、そうだったな」

クロノはポケットから一枚のメモリーを取り出す。

「こっちも無茶を言ったしな」

「バレたら何されるかわっかんねえし」

「でも感謝してるよ。ほら、約束の【プレシア・テスタロッサ製傀儡兵のデータ】だ。エドワードに頼んでコピーを貰ったよ」

「待ってました!」

ライルは自分のメモリーをクロノに渡し、クロノの持つメモリーを取ってキスをする。

「これでガ○ダム型の傀儡兵を作れるぜ！まずはゴ○ドガン○ムだな！」

「ちょっと！スト○イクじゃないの！？そっちの方が実用性があるじゃない！」

「これだから腐女子は…。あの漢らしさがわかんねえなんて」

額に手をやり、ヤレヤレといった風に首を振る。

「クロノはわかるだろ？あの熱血を！」

クロノに顔を迫らせ眼鏡をなおす。その気迫にたじろぐが、ライルの顔を押し退ける。

「僕は０８が好きなんだ」

「これまた渋いのを…」

「あれを見て、プロポーズは雪山でって決めたんだよ。あと檜山氏のファンに…」

拳を握りしめ、力説する。

「お前と雪山には行きたくねえ」

「温泉どころか、完全に凍り付くわ」

「うるさい！とにかく、変な事に使うなよ。こっちもヤバイんだか

ら」

そう言ってミルクティーを一気に飲む。冷めてきてはいるものの、まだ熱を持っていたそれは、クロノの喉を少しばかり熱した。

「わかってるって。あくまで趣味だよ。でもわかるだろ？こういうのがあるとさ…」

「まあ私も魔貫光〇法、練習してるし…」

「だからエターナルフォースブリザードを…」

「やかましい」

どさくさにまぎれて肩を組むライルを追い払う。

実は彼ら以外にも、転生者友達からしつこく術式を作れと言われてたりする。

「そういえば、ライルが持って来たのって何？」

タウがクロノのポケットを指差す。

「ああ、デュランダルのデータだよ」

「ええ！？それって、提と…」

「「しっ！」」

ライルはタウの口を押さえ、クロノは辺りを見回す。どうやら周りには誰もいないようだ。

そしてライルはタウを離す。

「…それって、あの【デュランダル】？」

先程とは打って変わって、小さな声で話し出す。

「ああ。ちょっと気になってね」

「だけどさ、クロノの勘は当たったぜ。ローランのデータを使ってかなりの出来だ。それにクロノ用に調整されてるし、お前が使えば、間違いなく氷結最強だ。ガチで封印できかねんぞ」

自分用。その言葉に頭を抱え、ため息が出る。

「やっぱり僕に封印させる気か…」

「どうすんだよ」

「反対に決まってるだろ。本当に違法だし」

「でもさ、万が一原作みたいに行かなかったら?失敗したら地球はおだぶつよ」

闇の書が完全に暴走したら、地球を滅ぼしかねない。アルカンシェルで蒸発させても被害は甚大。当然はやても助からない。

「はやての様子もおかしかったし。大丈夫かな…」

「お前、会ったのかよ?」

「会ったよ。偶然だけどね」

クロノは地球でのはやての事を簡潔に話した。

「うわ…キモ…」

「家に入れてもらえる事前提じゃん」

二人共、その転生者の行動に顔をしかめている。

「転生者がちょっかい出して、はやてが完成を望むのも危ないし、転生者達のせいで完成が早まるのも危険だ。それ以上に、はやてが意識を取り戻せなければ、それこそおしまいだよ」

「…ちょっと、本当にそうなったらどうするのよ?」

クロノは険しい表情で、意を決したように口を開く。

「……その時は封印する。次の主がどんな奴かもわからないし、これ以上犠牲者を出す訳にはいかないからね」

「お前本気かよ…?」

「…本気だ。正直やりたくないけど…」

俯き悲しげな顔をする。

いくらこれ以上犠牲者を出さないためとはいえ、本来助けられるはずの少女を永久的に凍結する。クロノもそんな事をしたくなかった。

「ま、そうならないように頑張りましょ。A'sは下手したら色々

と危ないし、介入しようってのも多くは無いでしょ」

「だけど、刃…だっけ？そいつがくせ者だな」

「そいつに似たような連中も少なくない。とにかくやれる事をやろう」

一人でも多くの人を助ける。そのための管理局なのだから。

「私も刃とかそういうのを遠ざけるようやってみる。他の転生者仲間にも連絡しておくわ」

「ありがとう。あ、ライル。できれば、信頼できる技術者を集めておいて欲しい」

「ん？かまわねえけど、どうしてだ？」

「実は…」

その時、クロノに通信が入った。見るとクレアからである。

「姉さん？何？」

通信を開くと、クレアの顔が映し出される。なにやら怒っているような表情だ。

『クロノ？すぐに私の事務室に来て！』

「どうしたの急に？」

相当苛立っているようだった。顔を真っ赤にしている。

「ヤッホー、クレア。ついに下の毛が生えたの？」

『違う！ってタウじゃない。悪いけど貴女の相手をしている余裕は無いの。あ、ライルも久しぶり』

「お～う」

ライルが画面に軽く手を振る。

「で、何が起きたの？まさか刃が見つかった？」

『違うわ。あの馬鹿、地球で現地住人を攻撃してたのよ！』

「「「は？」」」

そのあまりの内容に、素っ頓狂な声を上げる三人だった。

EP．17　事件が終わって（後書き）

リリなのの皆さんに、精神コマンドをつけてみた。

無印編

なのは

必中、不屈、努力、友情、幸運、勇気

スーパー系な人。特殊技能で天才を持ってそう。

フェイト

ひらめき、加速、集中、絆、熱血、覚醒

リアル系。特殊回避技能とかありそう。

ユーノ

信頼、鉄壁、祝福、根性、期待、気合

回復要員。それ以上でもそれ以下でも無い。

アルフ

集中、闘志、感応、応援、絆、直撃

回復要員その二。でも結構戦える。

クロノ

努力、直感、てかげん、突撃、熱血、ド根性

指揮持ち。技量が高そう。

リンディ

脱力、必中、狙撃、激励、直撃、愛

艦長さん。アースラでどうしろと？

エイミィ

偵察、集中、応援、かく乱、ひらめき

アースラのサブパイロットかも。脱力が被るが気にしない。

プレシア

集中、鉄壁、ひらめき、闘志、再動、愛

ボスだし気力限界突破とか…。でも指揮は無さそう。

異論は認める。

EP．18　魔法とは（前書き）

彼をここで出して良かったのだろうか

EP．18　魔法とは

放課後、アリサの部屋になのは達はいた。

「で…話しって？」

アリサとすずかは顔を見合わすと、お互いに頷く。

「なのはは、もしかしたら知ってるかもしれないけど…」

「それが怖かったのかな？私も少し驚いたけど」

「あの……よくわからないんだけど…」

二人は刃の何かを知り、なのははそれを恐れ刃を苦手になったと思ってるようだ。なのはは二人の言っている事を理解できず困惑している。

「その……【魔法】って知ってる？」

「……え？」

親友の口から告げられた言葉に、なのはは目を丸くした。

法律関係の書物や、事件のファイルが並んでいる堅苦しい部屋。

とても十代の少女の部屋とは思えない部屋だ。それも当然だ、この部屋はクレアの事務室。彼女の仕事場である。

クレアはコンソールを操作しながら、裁判に使う書類をまとめていた。

「…ふう」

ふとその手を止め、背もたれに寄り掛かる。この数日、彼女達は働き詰めなのだ。無罪はほぼ確定とは言え、二人分の裁判をこなさなければならない。簡単な事ではない。

「クレアちゃんお疲れ？」

「ん…大丈夫よ」

補佐官席で仕事をしていたエドワードも手を止める。

「時間もあれだし…お茶にする？」

「そうね……うん、お願い」

「らじゃ～♪」

エドワードは嬉しそうに立ち上がり、部屋の隅に置かれたコーヒーサーバーを操作し始めた。コポコポと音を立て、コーヒーの香りが部屋に満ちていく。

そんな最中、突如ドアが開き一人の少年が入って来た。緑の長髪に端正な顔立ちをした少年だ。

「やあクレアちゃん」

「あら、ヴェロッサじゃない」

入って来たのはヴェロッサ・アコースであった。エドワードは彼の顔を見ると、すぐさまムッと顔をしかめる。

「聞いたよ。何やらロストロギア関係の厄介な事件があったんだって？」

「早いわね」

ヴェロッサはクレアの席に寄り掛かる。

「でさ。丁度お茶の時間だし、最近できたコーヒーの美味しい店があってね。よかったら一緒に…」

「悪いけど、コーヒーは間に合ってるよ。この後も仕事があるんだから、出てってよ」

エドワードがヴェロッサを押し退け、クレアの机にコーヒーを置く。非常にいらついたような声だった。

「おや、エドワード君じゃないか。陰が薄すぎて気付かなかったよ」

「僕の存在に気付かなかったなんて、どうかしているんじゃないかな？そんな狭い視野で仕事できるの？」

二人は笑顔だったが、とても仲が良さそうには見えない。実際彼らは犬猿の仲だ。

「補佐官ごときが口出ししないでくれ。君の代わりなんかいくらでもいるんだから」

「あ、失礼。君のようなサボり魔が仕事とか関係無いよね」

二人共黙り笑顔を崩さぬまま睨み合う。一方クレアはいつもの事なので、一人コーヒーを楽しんでいた。何故彼らが争っているか知らずに。

「エドワード君とは、いつか決着を着けなきゃいけないと思っていたよ」

「僕もだよ。君のような駄目人間を、これ以上クレアちゃんに近づけちゃいけないからね」

笑顔を止め、キッと睨み合う。お互い一歩も譲りはしない。そんな漢の戦いが繰り広げられようとしていた。

「そうだね…君は非戦闘員だし、平和的な勝負にしようじゃないか」

「へえ…少し見直したよ。なら、料理で勝負しよう。お互い全力を出せるからね」

「乗った。審判はクレアちゃんだけでなく、クロノ君とリンディさんも入ってもらうよ。ハラオウン家に認められてこそ勝者に相応しい」

「良いとも。吠え面かかせてやる」

そしてお互い自信たっぷりに笑う。
負けられない戦い。どんな生き物でも、男は女を奪い合い戦うのだ。
その本能が二人を燃え上がらせている。

「「という訳でクレアちゃん。今度時間を…」」

二人はクレアの方を振り向くが、彼女は通信用のウィンドウを開いていた。

「なのは？どうしたの？」

「「聞いてないし！」」

クレアは二人の会話を全く聞いておらず、なのはと話し始めた。

『あの…クレアちゃん。ちょっと問題が起きちゃって…』

「問題？」

『実は…』

なのはの話しを聞いたクレアは、一瞬思考が提出した。余計な仕事が増えた。神道刃のせいで。
通信を切ると、すぐにリンディに繋ぐ。

「ヴェロッサ、ちょっと仕事が入ったから、また後で。エドも」

「え？あ…うん」

「はい、すぐに！」

クレアの部屋は慌ただしくなる。彼女は苛立ちたがら頭を痛めるのであった。

地球。クロノとクレアは再びこの地に来た。仕事として。

ここは月村家の庭。その一画にある、小洒落た椅子とテーブルに、五人分のティーカップが置かれ、周りでは猫がじゃれ合っている。席にはクロノ、クレア、なのはとその肩にユーノがおり、向かい合うようにアリサとすずかがいた。

「はじめまして。時空管理局執務官、クレア・ハラオウンです」

「同じく時空管理局特別捜査官、クロノ・ハラオウンです」

「はあ…」

「はじめまして…」

軽く会釈する二人に、アリサとすずかも応える。

「で、事のいきさつを詳しく話してもらえないかしら?」

「はい」

「あれは、私達が一年生の時なんですけど…」

なのはから聞いたのは、【神道刃が魔法を使い、現地住人と戦闘をした】といった内容だった。リンディの指示により、現地住人に事情聴取に来たクロノ達は、なのはの案内により当事者であるアリサとすずかに話しを聞きに来たのだ。
そして二人の話しによると、以前誘拐された事があり、その時に刃が助けに入ったといった内容だった。当然、誘拐犯達も魔法でボコボコにしている。

「成る程ね…」

クレアは額を押さえため息をつく。
人助けのためとはいえ、何の事後処理もせずに魔法を使用したのだ。
責めはしないが、誉められもしない。

「あの、刃君は？」

すずかは心配そうに聞く。

「この件については、特に罪には問われないわ。一応人助けのためだったし」

「そう。よかった。でもなのはも魔法が使えたなんてね」

「うん」

小さく返事をすると、なのはは何か考え込む。

「どうしたのなのは？」

「うん、なんか違和感があって…」

「違和感？刃が彼女達を助けた事かい？彼の性格なら、二人を助けても不思議じゃないだろ」

なのはは首を振り否定する。

「違うよ。…そんな都合良く誘拐する場面に出くわすかな？って思って」

「「……」」

なのはの言いたい事を察し、クロノとクレアは顔を見合わせる。

「ちょっとなのは！それって、私達の誘拐は刃が仕組んだって言いたいの！？」

「刃君はそんな人じゃないよ！」

刃の事を信じている二人に、なのはは悲しくなる。やはりこのままではいけないと。

［なのは。君の口から言ってあげて。私達じゃ信用してくれないと思うわ］

［うん…］

なのはは意を決して、刃の事を二人に話した。神道刃という人間の本性を、自分の見た彼の人柄を。

「……本気で言ってるの？」

「なのはちゃん…」

なのはは黙って頷く。なのはの口から告げられた事が、より一層信憑性を増している。

「これが事実だ。たしかに彼なら、君達の気を引くために誘拐を捏造するのも簡単だ。しかし証拠もない」

「彼は二人が女の子だから助けたの。神道刃は、そういう人間…」

アリサとすずかは呆然としていた。しかし次第に身体をワナワナと奮わせ始めた。

「あの、クレアちゃん。刃君はどうなるの？」

笑顔だが、何か得体の知れない威圧感にギョっとするが、すぐさま気を取り直す。

「えっと…危険行為とかで捜索対象になっているわ。そんな重い罪じゃないけど、彼を捕らえる必要はあるわ」

「なら地球ではこっちに任せて。何かわかったらなのはに言うから」

アリサも青筋を浮かべ拳を握りしめている。

「覚悟しなさい刃！乙女心を踏みにじった罪は重いわよ！」

「うふふ…」

そんな二人の気迫にたじろぐクロノ達であった。

地球での一件が終わり、数日後。六月三日の夜。
その夜、仕事を終えたクロノは自宅のリビングで、ある映像を見ていた。

『…先程、全クルーの避難を確認しました。こちらのアルカンシェルのチャージは、あと一分程度で完了してしまいます』

その映像には額から血を流す男性が映し出されている。
そう、クロノの父、クライドが最後に送った通信だ。

『こちらのチャージタイムのカウントを出します。発射前に、落として下さい』

そして敬礼をし、映像ノイズが走る。映像はここまでだった。
物心つく前に亡くなってしまったため、クロノは父の事をよく知らない。この映像を見るのも一度や二度では無い。
地球との時差を考慮しても、あと数時間で闇の書が起動する。その現実味の無い奇妙な気分を紛らわすため…いや、気を引き締めるために、父の最期を見直したのだ。

「今の…父さんよね？」

クレアが後ろからソファーに寄り掛かる。

「うん。……姉さんは、父さんの事どの位覚えてる？」

「私も小さかったからなぁ…あんまり覚えてないわ」

「そう…」

クロノは再び映像を見る。

（絶対に止めてやる。もう、こんな事はあっちゃいけないんだ。助け出してみせる）

最後の闇の書事件に。クロノは決意を新たにした。

一方地球。

はやては自宅のベッドで寝転びながら、今日買った本を読んでいた。ふと時計を見ると、もうすぐで六月四日。自分の誕生日である。先程主治医である石田先生から、明日食事に誘われていおり、勿論行くつもりでいる。彼女ははやてにとって信頼できる、数少ない人物だ。

（寝よ…）

本を枕元に置き、スタンドの明かりを消そうと手を伸ばす。

その瞬間、部屋の空気が変わった。何か重苦しく、そして混沌が渦

巻くような異質な雰囲気。
それは本棚にある、一冊の本から放たれていた。自分が一度も読んだ事の無い、鎖の巻かれた分厚い本から。本は妖しい光を放ちながら生き物のように脈動し、はやてに浮かんで来る。
はやては目の前の出来事に圧倒されている。その摩訶不思議な光景に、目を逸らせずにいた。

「な、何…！！」

そして本が膨張するように鎖を引きちぎり、本が勢いよく開きの白いページが次々とめくられていく。

『封印を解除します』

全てのページがめくれ本が閉じ、金色の十字架が装飾された表紙を前に、はやての目の前に浮かぶ。

『起動』

黒く強い光りを放った。

EP．18　魔法とは（後書き）

精神コマンドA-　s編

はやて

必中、不屈、応援、熱血、覚醒

公式指揮官型。ミストルティンの性能が凶悪そう。

ヴィータ

信頼、ひらめき、熱血、必中、突撃、根性

万能な子。底力が高い。

シグナム

闘志、必中、鉄壁、気迫、期待、魂

一応リーダー。切り払いは必須。

シャマル

信頼、応援、ひらめき、偵察、かく乱、脱力

回復要員その三。ＭＡＰ回復とか欲しい。

ザフィーラ

鉄壁、不屈、気合、ど根性、闘志、必中

みんなの盾。援護防御が無いと、存在がなくなる。

リィンフォース

加速、直感、気合、絆、熱血、祝福

ユニゾンするとサブパイロットに。祝福が無いなら意味が無い。

リィンフォース？

祝福、努力、狙撃、信頼、ひらめき、再動

彼女も初代と同じ。サイズＳＳ。

EP．19　時は動く（前書き）

寒いです

EP．19　時は動く

石田医師にとって、八神はやてはかなり風変わりな患者と言えた。幼い身でありながら、病に侵され身寄りも無い。さらに非常に人嫌いと来たものだ。しかも異性…特に同年代の少年には嫌悪すら感じている。

幸い、男性看護師には立場上そこまで嫌っておらず、自分の事も信頼してくれているようだ。時折食事に誘えば彼女は喜んでついて来るし、相談事もされる。

そんなある日、急にはやてが病院に担ぎ込まれた。彼女の誕生日になった直後の事である。

幸い何も無く、はやての身体に異常は見られなかった。しかし、それ以外が異常だ。

はやてを担ぎ込んだのは、どう見ても外国人である四人組。二人の若い女性に褐色肌の男性、そしてはやてと同年代か少し年下の少女。言葉は通じるようだが、話しの内容が支離滅裂。怪しい事この上ない。

「…で、誰なの？あの人達は」

こっそりとはやてに耳打ちする。

「…？あ…！」

「どういう人達なの？春先とはいえまだ寒いのに、はやてちゃんに上着も掛けず運び込んで来て…。変な格好してるし、言ってることは訳わかんないし、どうも怪しいわ…」

「あー、えっと…、その、なんと言いましょうか…」

双方に視線を彷徨わせ、しどろもどろに呟くはやて。それを見兼ねたのか、背の高い女性…シグナムがはやてに念話を飛ばす。

［ご命令をいただければお力になれますが。如何いたしましょう？］

「え…？」

突如頭に響く声。耳からでなく、直接頭に来る声にはやては目を白黒させる。

［思念通話です。心でご命令を念じていただければ］

「……」

状況が理解できたのだろう、覚悟を決めたように四人を見据える。

［ほんなら、命令というかお願いや］

命令でなくお願い。そんな今までと違った反応に、少しキョトンとする

［ちょう私に話合わせてな］

「…はい」

小さいが、つい口に出して返事をする。

「えっと…石田先生。実はあの人達、親戚で…」

「親戚？」

石田医師は疑わしげに首を傾げる。

「遠くの祖国から、私のお誕生日をお祝いに来てくれたんですよ。そんで、びっくりさせようと仮装までしてくれてたのに、私がそれにびっくりし過ぎてもうたと言うか、その、そんな感じで……な？」

引き攣ったような固い笑顔を四人に向ける。その口調も自信なさげになっていく。

「あ、そうなんですよ」

「その通りです」

即座に意図を察した金髪の女性…シャマルに続き肯定する。

「あ、あはは…」

はやてが苦笑いしつつも、事なきを得た。

石田医師も【グレアムおじさん】関係と判断し、はやても何も言わなかったので家に帰す事にしたのだった。

そして八神家。はやての寝室にて、はやては四人…ヴォルケンリッター達から闇の書について説明を聞いていた。車椅子の少女に跪く

…端から見れば、非常にシュールな光景である。

「そうかー、この子が闇の書ってもんなんやね」

「はい」

顔を上げずシグナムが答える。

「物心付いた時には棚にあったんよ。綺麗な本やから、大事にはしてたんやけど…」

闇の書を持ち上げ、いじくりながら眺める。

「覚醒の時と眠っている間に、闇の書の声を聞きませんでしたか？」

「うーん、私魔法使いとちゃうから漠然とやったけど…。あ、それより質問あるんやけど、ちょっとええか？」

「なんなりと」

闇の書を膝に置き、シグナムの前に移動する。

「えっと…たしかみんなは【守護騎士】なんやろ？そんで私はご主人…」

「その通りです」

「我々は闇の書の蒐集、そして主をお守りするために存在する騎士です」

シグナムとザフィーラが答えた。
自分を守る騎士。その言葉に、物語の中にいるようなお姫様になったような響きを感じる。

「私を……ほんまに？」

今までとは違った人達。本当に自分を見てくれている。
たしかに従属というのは、はやてにとって気分が良いものではない。
しかしそれ以上に、彼女達の言葉が魅力的に思えた。

「我々は如何なる時であろうとも主をお守りします」

シグナムは顔を上げ、真剣な表情ではやての目を見る。その凛とした態度に圧倒されそうになる。しかしそれと同時に、言いようの無い嬉しさが沸き上がる。
彼女達は自分の傍にいてくれる。邪な気持ちも無く、心の底から自分を想ってくれると。

「ほ、ほな…それじゃあ……ん、あった」

はやては照れを隠すように車椅子を操作し、机の中を漁り出す。そしてメジャーを取り出した。

「わかったことが一つある。闇の書の主として、守護騎士皆の衣食住、きっちり面倒見なあかんということや。幸い住むとこはあるし、料理は得意や。皆のお洋服買うて来るから、サイズ計らせてな？」

「「「「……」」」」

今までの主と違った反応に、四人は驚きを隠せなかった。

両手を上げたヴィータの胴にメジャーを巻き、サイズを細かにメモしていく。

「ん～と…」

「……」

ヴィータも緊張し顔を強張らせている。先程計り終えたシグナムてシャマルも似たような反応だった。

「うん、おしまい。楽にしてええで」

「あ…はい…」

まだ緊張が解けないヴィータに軽く微笑んだはやてだったが、すぐさま顔を硬直させる。最後に残ったザフィーラである。

はやても男性が苦手とはいえ、大人であれば耐えられるのだが、流石にザフィーラのような厳つい風貌は怖いらしく、対応に困っていた。

［ザフィーラ］

［ああ…］

はやての心情を察したのか、シグナムはザフィーラを小突く。

「主、私の衣服でしたら必要ありません」

「せやけど…」

はやてが言い終わる前にザフィーラの身体が光り、一匹の蒼い狼となった。

「おお！犬や！」

「いいえ、狼です」

「私犬飼うの夢やったんよ！」

「ですから狼です」

はやては目の前の犬…もとい狼に大興奮だった。シグナムに車椅子から下ろしてもらい、暖かな毛に抱き着く。

「モフモフ最高やわ。ずっとそのままでいてや♪」

「はあ…」

完全にペット扱いの彼に、三人は笑いを必死に堪えていた。

［よかったな。主に気に入っていただいて］

［首輪とか用意してもらえば良いんじゃねえか？］

［それより犬小屋じゃないかしら？］

［解せぬ…］

こうして、八神はやてとヴォルケンリッターは出会った。未来に何が待ち構えているかも知らずに。

夏。日光が身を焼き夏休みが近づく最中、カレルは学校に戻って来た。
現地協力者といった立場のためか、特に罪に問われず、フェイトより早く裁判は終わった。しかし事件に関わっていた事は変わらないため、デバイスも持てず、行動も制限されている。

（学校、久しぶりだな）

クラスメートと話しをしながら、先に帰ってしまった事に申し訳なく思っていた。
そして休み時間。カレルはクラスメートに呼ばれた。カレルの転生者仲間だ。

「よう小川」

「山崎か」

山崎と呼ばれた糸目の少年が軽く会釈する。

「無印おつかれさん」

「お前は気楽だな。こっちは大変だったのに」

「俺はそういう人間なのだ。それよりさ、この娘誰？」

山崎は一枚の写真をカレルに差し出す。そこにはなのはとフェイトを抑えるクロノとクレアが映し出されている。そう、二人が介入した瞬間の写真だ。

「念写か」

「俺の魔改造ハーミット・パープルに不可能は無いぜ。で、転生者か？クロノも微妙に変だし」

カレルは一瞬黙る。クロノは自分が転生者である事を隠していた。ならば話さない方が良い。

「二人ともクロノだよ。これが原作との相違点だ」

「成る程ね」

納得したように写真をしまう。

「お前、全部撮ってるのか？」

「もち！映像もあるし、編集したやつを日曜に転生者仲間を集めて、上映会するんだが来るか？小川がプレシアにフルボッコにされたシーンもあるぞ」

「ふざけんな！てかそんなのを撮れたのかよ！？」

「チート念写嘗めんな」

今山崎の右腕には茨が巻き付いているのだが、スタンド使いではないカレルには見えていない。

「なのはとフェイトのリボン交換の写真なんか、かなり良い値段で売れ……ふべら!?」

カレルのドロップキックが顔面に直撃。山崎は派手に吹っ飛んだ。

「殴って良いか？答えは聞かないが」

「蹴るなよ…」

顔を摩りながら起き上がる。

「売ったのは冗談だよ」

「そんな冗談は止めろ。全く…」

「はいはい。で、お前は嘱託魔導師やるの？」

「やるぜ。今度フェイトと試験に行く」

「そっか。頑張れよ」

「おう」

二人は壁に寄り掛かる。

「A'ｓ頼むぜ?下手すりゃ地球はおしまいだ」

先程と違い真剣な声で話す。

「わかってる」

「A'ｓは介入しないで傍観するやつは多いけど、それでも全員じゃない。こっちでも神道刃はどうにかしてみるし、馬鹿を弾くのもやってみる」

「ありがとな」

カレルは山崎と拳をぶつけ合う。

「裏方は任せな。頼むぜ、俺達の【オリ主】♪」

「もう一辺ぶっ飛ばすぞ?」

カレルは今にも殴りそうに拳を握りしめた。

EP．19　時は動く（後書き）

ザッフィーペット化
解せぬ

EP．２０　嘱託魔導師試験（前書き）

お気に入り１０００超え…

皆さんありがとうございます！

EP．２０　嘱託魔導師試験

嘱託魔導師試験。その試験場にカレルとフェイト、アルフはいた。
筆記試験も難無く終わり、先程フェイトとアルフの儀式魔法試験が終わったため、三人は昼食にしている。

「しかし凄いな儀式魔法。切るしか能の無い俺には無理だわ」

「ムグムグ…ん。そういやカレルって、フェイトよりランク下なんだよね？」

かぶりついた肉を飲み込み、口元を拭きながらアルフが質問する。

「え？そうだったの？」

「おう。フェイトはＡＡＡで、俺はＡＡＡ－。魔力もフェイトに負けてるしな」

「ふ～ん…。でも、カレルも凄く強いよね」

「あ、ありがとな…」

誉められた事に嬉しいのか、頬を赤らめながらポリポリとかく。

「でさ、次の戦闘試験の相手ってどんな人なんだろうね」

「俺達のランクからして、結構強い人だろ」

「だよね」

そう言ってフェイトはサンドイッチに手を伸ばす。

そうしている内に昼休みは終わり、試験の時間になった。指定された場所に付き、試験官の到着を待った。

しばらくすると目の前に水色の魔法陣が展開される。転移魔法で、試験官が到着したのだ。

「え？」

「ハ？」

「…やっぱり」

驚く二人に対し、カレルは予想通りといった表情だった。

そこに現れたのは黒髪の少年と少女。少年は自らの髪と対するかのような銀の衣装をまとい、少女はその長い髪に溶け込むような黒い衣装をまとっていた。

そう、クロノとクレアである。

「ＡＡＡランクの相手ができるのってそんなにいないのよ。だから私達が相手」

「僕はカレルの、姉さんはフェイトの相手だ。身内だからって手加減しないよ」

二人共デバイスを起動させ、カレルとフェイトの前に立つ。

「フェイトとアルフはこっち。まずはフェイト単体での試験からだから、アルフは見学ね」

「ちぇ」

アルフは若干不満そうだったが、渋々フェイトの後についていった。

「さて、僕達もやろうか」

「あ、おう！」

ある程度の距離を置き対峙する。一瞬で空気が変わり、二人の表情も真剣なものになる。

「では受験者。名前と出身世界を」

「カレル・小川。第９７管理外世界、地球出身」

「確認しました。戦闘試験の試験官を勤めさせていただきます、クロノ・ハラオウンです」

「…よろしくお願いします」

お互い知らない仲ではないとはいえ、形式上は必要な手順。しかし堅苦しさに二人共笑いそうになるが、表情一つ崩さず淡々と続けた。

「では…戦闘試験を開始します。準備は？」

「万全！」

二人も各々のデバイスを構え、細く笑う。

実戦では無い、ただの試験。しかしお互い手加減はしない。

「試験…開始！」

「どるぁ！」

開始の合図と同時にカレルが飛び出す。その斧と槍に魔力を込めて。

「風刃一閃！」

「っ！」

勢いよく振り下ろした一閃をバックステップで避ける。刃が地面に減り込み、衝撃で砂埃が舞う。

そして、続けて地面に刺さった刃を持ち上げるように、そのまま突きを繰り出す。クロノはそれを瞬時にシールドで受け止める。

「爆裂剛波！」

「くっ！」

すると槍の先端から魔力が炸裂。爆発を起こし爆煙が舞い上がる。

「そら！」

さらに一回転するように煙りごと斧で薙ぎ払う。しかしその一閃は空を切り、手応えすら無い。そして煙りを切り払った先にはローランを突き付けるクロノがいた。

「な…どお！？」

前方から魔力弾が迫るがゼファーで切り払う。

（こいつ、爆発の威力を利用して離れたな）

次々と放たれる魔力弾を切り伏せながらクロノ目掛け駆け出す。

「やすやすと接近させるか！」

飛び上がりながら魔力弾で牽制、距離を離す。カレルも魔力弾を切り伏せながら追いかけるが、一向に距離は縮まらない。

（今だに一発も直撃せず…か。速度の速いスティンガーを切り払うなんて、反応も良い）

そう、カレルは魔力弾を一つ残らず切り払っている。反応速度も高いが、それ以上に近接戦闘技術が高レベルだ。

（切り合いでは不利だな。…よし）

足元に魔法陣を展開、さらに周囲に四本の氷柱を形成する。勿論、先端を丸くし、殺傷能力を低下させたものだ。

『Ｉｃｉｃｌｅ　Ｂｕｌｌｅｔ．』

「シュート！」

一斉に発射、四方から囲むように迫る。

「こなくそ！」

ゼファーを回転させ、次々とアイシクルバレットを破壊する。カレルの周囲には、砕け散った氷の破片が光りを反射し美しく輝いて見える。が、格好付ける間も無くスティンガーが次々と命中する。

「ぐお！？…この！」

だが大したダメージにはならず、すぐさま回避行動に入り魔力弾を避ける。

（固い……やっぱり近接重装甲型か！どうりで飛行速度が遅い訳だ）

実際、カレルの回避速度は遅く、ゼファーでの迎撃が主だ。

カレルの戦闘スタイルは、堅牢な装甲と自身の優れた動態視力による迎撃技術の【静】に特化したタイプだ。フェイトとは逆にスピードを捨て、相手の攻撃を防ぎ、斬撃波等で牽制しつつ接近する。そういった戦法を得意とする。

「だが、逃げられればどうする！？」

『Ｆｒｏｓｔ　Ｃａｎｎｏｎ．』

「こうすんだよ！」

迫り来る砲撃をシールドで防ぎながら強引に接近する。フロストキャノンをものともせず、一気に距離を詰めた。

「ハッ！」

「っ！」

『Ｉｃｉｃｌｅ　Ｂｌａｄｅ．』

斧の一撃を氷の刃で受け止める。さらに回し蹴りを繰り出すが、後ろに下がり避ける。しかしカレルは止まらず、突進しながら次々と斬撃を浴びせてくる。その太刀筋は速いが、クロノに見切れないほどではない。

「うおぉぉぉ！」

「う…！？」

しかし、受け止めてもその力に押されだし、氷の刃にひびが入る。

「もらった！」

『Ｈｏａａａａａ！！！』

横薙ぎに一閃。アイシクルブレイドが砕け散った。

「しまっ…」

「どら！」

叩き付けの一撃をシールドで防ごうとするが、受け止めきれず力付くで押し飛ばされ、地面に叩き付けられた。

「とどめ！」

『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ．』

ゼファーの柄がスライドし、カートリッジの熱があふれる。

「せい！」

横に振るい、細い三日月のような魔力刃を生み出す。斬撃波のようだが、飛ばずカレルの前で漂っている。

「斬空牙・五月雨！」

そしてクロノ目掛け、打ち付けるようにゼファーで叩き割る。バラバラに砕けた魔力刃はガラス片のように鋭く尖っており、まるで雨のように降り注いだ。

「！！！」

次々と着弾する魔力はクロノごと周囲を吹き飛ばし、辺りが土煙に包まれる。

（やべ、やり過ぎたか？）

煙が晴れると、そこには魔力刃の破片で周囲はうめつくされ、その中心に針鼠のようになった人影があった。

「おい、クロノ！俺がやっといてアレだが大丈夫か！？」

しかし返事は聞こえずピクリとも動かない。あまりの反応の無さに、サーッと血の気が引く。

「ちょま…『上！』っ！？」

ゼファーの声に上を向くが完全に出遅れ、身も凍るような冷気の砲撃が上空から襲い掛かる。

「ぐあ！？」

砲撃によって地面に叩き付けられ、仰向けに倒れる。いくら固いとはいえ、砲撃の直撃は効く。

「くそ！…あら？」

起き上がろうとするが動けない。よく見ると、身体が氷で地面に張り付いている。

「ここまでだね」

クロノが降りて来て、額にローランを突き付ける。若干息が上がっており、頬に汗が伝う。

「……質問良いっすか？」

「どうぞ」

カレルに纏わり付く氷を壊し、手を引いて立たせる。

「どうやって五月雨から抜け出したんだよ」

「ああ、あれさ」

クロノが指差したのは針鼠のようになった人影。

「いや、わかんね…ん？」

調度その時、魔力刃が消える。そこにあったのは、クロノの形をした氷の固まり…いや、氷でできた抜け殻だった。

「……おい」

「アイスドール。攻撃が命中する瞬間、僕の表面を氷で硬化する防御魔法さ」

「…わかったぞ」

カレルはその説明だけで理解できた。やられた、といった風に頭をかく。

「全身にくらったのを利用して、できた氷の殻をダミーにする。自分は煙に紛れて脱出、俺が状況を理解できてない隙に上に回り込んでズドン…ってとこか」

「正解」

「なんだよ、心配して損したじゃねえか」

「だったらあんなの使うな」

カレルは一瞬言葉に詰まるが、座り込み腕を組んで胡座をかく。

「逃げられねえようにするには、あれしかなかったんだよ！」

「はいはい」

クロノも相槌をうちながら笑った。

「強い…」

試験が終わり、クレア達の所に行ったクロノ達の前にいたのは、がっくりとうなだれるフェイトとアルフだった。

「…姉さん？」

「え？普通にやったけど…」

「ニアＳハンパねえな」

どう声をかければ良いかわからず、クロノとカレルは真顔のクレアの隣で同時にため息をついた。

そして後日、カレルとフェイトは無事に嘱託魔導師試験合格したのだった。

EP．20　嘱託魔導師試験（後書き）

カレルのまともな戦闘って始めてな気が…

EP．21　試みる者達（前書き）

偶然地球に転移する確率は？

宝くじより低いでしょ…

EP．21　試みる者達

闇の書覚醒から数週間がたち、はやてとヴォルケンリッターも戦いの無い、家族のいる生活に慣れ始めた。
当初は幼く蒐集を望まないはやてに戸惑い悩みはしたが、しだいに彼女と共にいる平和な時間、家族としてすごす事に安らぎを見つけ、その生活を受け入れ出した。はやても魔法という不可解な現象、自分以外の存在が家にいるといった状況に違和感を感じていたが、下心なく自分と接してくれる四人にしだいに心を開いていった。

そんな八神家のある夜。はやての料理に舌鼓しつつ、彼女達は幸せな時間をすごしていた。

「シャマル、醤油とって」

「どうぞ」

身を乗り出すヴィータに醤油を手渡す。

「ありがと」

受け取り小皿に注ごうとした瞬間、家の庭に魔力を感じた。

「「「「！！！」」」」

「？」

ヴォルケンリッター達はすぐさま異変に気付き立ち上がる。一方はやては何が起きたのかさっぱりわからず、急に立ち上がった四人に

驚いていた。

「みんな、どないしたん？」

「…外で魔力を感じました。私とヴィータで外を見てきます。シャマル、ザフィーラ、主を頼む」

「うん」

「任せろ」

シャマルとザフィーラが頷く。

「行くぞヴィータ」

「おう！」

二人はデバイスを起動させ外に飛び出す。そして一人状況を理解できてないはやては、ただ首を傾げるだけであった。

シグナムとヴィータは先程の魔力を確認するためにいた。

「シグナム…」

「……ああ」

ヴィータが指差した所には一人の少女が倒れていた。長い金髪に整った顔立ちだ。

「おい、起きろ」

シグナムが揺するが反応は無い。

「シャマルに診せるか？」

「そうだな。だが…」

何かを探すようにシグナムは少女の服をまさぐる。すると目当ての物を見つけたようだ。

「やはりデバイスを持っていたか」

その手には赤い六角形の宝石のついたペンダントが握られている。

「万が一管理局の人間だと面倒だ。こいつは預かっておこう」

「うし。行こうぜ」

二人は少女を抱え、家に入って行った。

朝には少女は目を覚まし、ヴォルケンリッターによる尋問が始まった。一応はやても見学している。

「…で、貴様は何者だ？何故この家の庭にいた」

「……ごめんなさい、わからないの」

少女は俯きながら答える。

「ハァ？嘘つくなよ」

「嘘じゃないわ。それに私、記憶が無いの」

「記憶喪失なんか？」

はやての質問に小さく頷く。

「怪我とかはしてなかったけど、こういうのは専門外ね…」

「気に病むな。しかし彼女をどうするか…」

突如庭に現れた記憶喪失の少女。しかも魔導師だ。怪しい事この上ない。

「あの、私の事は気にしないでください。介抱していただいただけでも助かりました」

「せやけどこのままほっとくのも…」

何者かもわからないが、無視はできない。全員が頭を悩ませいる最中、少女はこっそりとニヤついた。そうしていると、シグナムが意を決したように口を開く。

「主、近くの管理世界に連れて行きましょう。管理局に任せるのが得策かと」

「たしかに、そこなら彼女の身柄がわかるかもしれんな」

ザフィーラもシグナムに賛成する。その瞬間、少女の顔に小さく驚愕の表情が浮かぶ。

「なんかよくわからへんけど、シグナムに任せるわ」

「はい。シャマル、転移を頼む。私が途中まで送る」

シグナムがデバイスを手渡し少女を掴む。

「は～い」

「え？ちょ…」

少女は目の前の展開に焦っていた。当然だ。彼女は転生者で、このまま八神家に居座るつもりだったのだから。

「あっちでお前も自分の事とかわかると良いな」

「な、なんで？え？」

「ほな、気をつけな～」

はやてが手を振りながら見送り、シグナムとシャマル、そして少女は転移した。

三人は無人世界を経由しながらとある管理世界に到着した。

少女はずっと呆然としたまま目を丸くしていた。自分の計画が潰れた事に愕然としながら。

「あそこの街で【時空管理局】を尋ねるんだ。きっと保護してくれる」

「私達はここまでしか案内できないけど、頑張ってね」

シャマルは手を振り、シグナムは仏頂面で転移し地球へと帰っていった。

「嘘…」

一人ポツンと残された少女は地面に座り込む。彼女の予定では、今頃はやてに歓迎され八神家の一員になっていたはずなのだから。その目論み外れてしまい、丁寧に管理世界に連れてかれてしまった。実は少女は家族も無く、直接この年齢で転生したため、戸籍も何も無いのだ。

「私のオリ主人生があぁぁぁ！！！」

少女の叫び声が虚しく響いた。

時空管理局の一画。そこの休憩室に、クロノとカレルはいた。二人共自動販売機で買ったコーヒーを飲みながら何枚かの写真を見ていた。

「どれもこれも、居場所を探るには足りない…か」

クロノは手にした写真を置く。その写真には神道刃が映し出されていた。

「悪いな、あんまし力になれなくて」

「いや、地球で探してくれてるだけありがたい。しかし凄いな、本当に神道刃の写真が用意できたなんて」

何枚かの写真を手に取る。全部刃の写真だ。戦っているような写真から、何か訓練のような事をしている写真まで様々である。

「探索能力のある奴らの情報から念写した写真だ。画質も良いだろ」

「うん。これを配って情報を集めよう。だいぶ追い詰められそうだ」

クロノは写真をまとめ、封筒に入れ、鞄にしまう。

「悪いな、忙しいのに時間とらせちまって」

「いや、寧ろ大歓迎だ。こいつの情報なら…」

「やっほークロノ」

休憩室に誰かが入ってきた。若い女性の声だ。
長い茶髪の少女、タウである。

「タウか」

「調度話しがあった所なのよ。ん?君、カレルよね?」

「おう。あんたは?」

「私はタウ・ジーン。転生者よ」

自動販売機で紅茶を買い、クロノの隣に座り手を差し出す。

「…ああ、よろしく」

カレルは少し驚きながも、軽く握手をした。

「で、本題は？こっちも話しがあるんだ」

「ふふふ…神道刃が見つかったわ。逃げられたけど」

自慢げに顎に手をやりながらニヤつく。

「「何！？」」

「本当」

タウは端末を操作し、映像を出す。そこには、三十代位の男性魔導師と戦う刃の姿があった。

「これは？」

「先日逮捕した違法魔導師のデバイスに残された映像。ま、逮捕できたのも、刃がボコっといてくれたおかげで楽だったみたいだけど」

「違法魔導師？」

「そう」

続けて先程と似たような映像を、いくつか映し出す。

「どうやら刃は違法魔導師や転生者を襲って、トレーニング紛いの事をしてるみたい。しかも質の悪い事に、まじめにやってるらしくてさ。動きも確実に良くなってるのよ」

「面倒だな…」

クロノは頭をかきながら映像を見る。たしかに自分と戦った頃より、格段に動きが良い。

「戦った子から話しを聞いた所、頭の中身は変わらず、自分がオリ主（笑）てのでね。頭痛くなるわ…」

「うへ…。てか、犯罪者も襲ってるのがやりにくいな」

「【俺は正しい】なんて思ってるんだろうな。でも、犯罪者でない転生者を襲った時点で刃も犯罪者だ。逮捕する証拠には十分だ」

「逮捕ねえ……できるかな？」

タウは紅茶を口に含む。何か嫌な予感がするかのように。

「最悪殺害命令がくる。刃は逮捕してもおとなしくさせられないからな。かといって管理局にいさせるのも危険だし」

口にするのも嫌そうに呟く。当然だ。命を奪うなんて事は、普通はしたくない。

「まあそれは見つけてからにしよ。でさ、クロノは何なの？」

「ああ、この写真をコピーしてみんなに配ってほしい。刃の写真だ。もしかしたら場所がわかるかもしれない」

クロノから受け取った封筒の中身を見て、タウはニヤリと笑う。

「最高！あ、そうそうカレル。地球で介入しようとしている馬鹿の対象は大丈夫？」

「大丈夫だ。はやて自身もかなり転生者を弾いてるし、地球の転生者仲間もなんとかしてる」

「うん、お願い」

タウは満足げに笑い紅茶を飲みだす。

「そういえば昨日、ロストロギアをわざと暴走させた馬鹿がいたね」

「誰だよそれ」

「あ、私知ってる。結局本人は身体の右半分だけ転移して即死、現場は他の局員で抑えられたってやつでしょ」

「そうだ。大方事故で偶然地球に。そしてはやての家に世話になるって目論みだろう」

呆れたように苦笑いする。

「そんなん天文学的確率だろ。てかわざと暴走させるなんて馬鹿か？」

「馬鹿なのよ」

「馬鹿だな」

そして三人は同時にため息をつき、それぞれの飲み物を口にした。八神家の扱いに、そしてご都合主義を期待し失敗した者達に呆れながら。

（…あの魔法の術式、完成させなきゃな。もう一つのもデュランダルがあれば使えるんだが…）

一人クロノは考えていた。これから起きるであろう激闘に必要なものを。必要な力を。

EP．21　試みる者達（後書き）

姉さんの出番が少ない…
次こそは…

EP．22　戦いの足音（前書き）

もう少しで…

EP．22　戦いの足音

アースラ内にあるクロノの部屋。その日の朝、クロノは非常に気分も悪く、寝付きが悪かった。

「……今日…か」

カレンダーを見ると、今日は十月二十七日。そう、闇の書の蒐集が始まる日。昨晩は気になってよく眠れなかったのだ。

（…まあ考えても仕方ないか）

着替えて部屋から出る。すると、丁度クレアと鉢合わせになった。

「おはよう姉さん」

「おはようクロノ。どうしたの？なんか眠そうだけど」

「ちょっとね…寝付きが悪かったんだ」

クロノは誤魔化すように笑う。

「…まあ良いわ。朝ごはんにしましょ。少しは目も覚めるでしょ」

「そうだね」

二人して食堂へと向かう。その後ろ姿は、何の変哲もない普通の姉弟の姿だった。

そして食堂に着き、二人は朝食のセットを頼んで席につく。勿論濃いめのコーヒーも忘れずに。

「で、どうしたの？何か悩みでもあるの？それとも恐い夢でも見た？」

よく眠れてない。そんな些細な事でも心配するのが家族だ。優しげな声で、心配そうに言う。

「違うよ。たまにはこういう日もあるさ」

「そう、なら良いんだけど…」

二人は朝食に手を出し始めた。パンにバターを塗ったりハムん挟んだりと、思い思いに朝食を食べ始めた。

「クレア、クロノ、おはよう」

「おはようさん」

フェイトとアルフも朝食を持って来た。

「おはようフェイト、アルフ」

「おはよう」

二人共クロノとクレアに向かい合うように座り、朝食を食べ出す。

「そういえばなのはからのビデオメールは？」

「昨日見たよ。返事も早く作ろうって思ってる」

そんな平和な会話が続く。その夜、新しい事件が始まるとは知らずに。

そして夜。とあるビルの屋上、そこにヴォルケンリッター達は騎士甲冑を装備し集合していた。全員深刻な表情で、空気もピリピリとしている。

実は今海鳴のあちこちで介入しようとする転生者と、阻止しようとする転生者が争っているが、彼女達は気付いていない。

「よし…行くぞ」

「ちょっと待ちな！」

シグナムの言葉に三人が頷く。だが、その瞬間に上空から一人の少年が現れる。

「誰だてめえは！」

ヴィータがアイゼンを突き付けるが、少年は微動だにせず、余裕の表情を崩さない。

赤く長い髪に胸元の開いた黒いコート。そう、少年は神道刃だ。

「はじめましてヴォルケンリッター。俺は神道刃」

「「「「っ！」」」」

自分達の事を知っている。まずありえない事だ。第一ここは管理外世界。そして自分達の騎士甲冑の姿も今までとは違う。そう簡単に自分達の正体を知る事はできないはずだから。

「驚いているようだな。お前達の事は【新月の書】が教えてくれた。何をしようとしているのかもな」

目の前に赤黒い魔導書を浮かべる。勿論言っている事は嘘だ。

「知っている…か。何が目的だ？返答次第ではただではすまんぞ」

レヴァンティンを突き付けると同時に、三人が刃を囲む。

「勘違いしないでくれ。俺はお前達を助けに来たんだ」

「私達を助けに？」

「ああ。俺はお前達が何をしようとしているのか知ってしまった…」

大袈裟に手を広げ、ヴォルケンリッターを見回す。

「そして、俺はお前達の【主を救いたい】という想いに感銘を受けた。俺も蒐集を手伝う。一緒に戦おう！」

魅了するかのように、美しさに富んだ笑顔を向ける。しかし疑いの視線は止まらなかった。美貌だけで信用を得られる程、ヴォルケンリッターは甘くはない。

「信用できんな」

（チッ…うっせんだよ糞犬）

刃にとって、ザフィーラもハーレムの邪魔でしかない。しかしシグナム達の手前、顔には出さずに笑顔を崩さなかった。

「俺には信用してくれとしか言えない。わかってくれないか？」

怪しい。ヴォルケンリッターには信用できなかった。何故か自分達を知り、さらにははやての事も知っているそぶり…あまりにも不気味である。

「ならば…手始めに魔力を貰うぞ」

「おい、シグナム！」

「こっちは時間が惜しい。苦も無く貢を稼げるのなら、利用させてもらう。文句は無いな？」

「かまわないぜ」

刃も予想はしていた。魔力を渡すだけで信用を得られる。安いものだ。

しかし彼は知らない。自分がどう思われているのかを。

「シャマル、頼む」

「わかったわ。闇の書、蒐集」

『Ｓａｍｍｌｕｎｇ』

闇の書が開き、さらに刃の身体からリンカーコアが浮かび上がる。
蒐集が始まると見る見る頁が埋まっていく。

「う…ぐおぉぉぉ！」

予想以上の苦痛。刃は苦しそうに目を見開き、額には冷や汗が伝う。
そして十数頁埋まった所で、蒐集は止まった。

「…結構いったわね」

シャマルが少し嬉しそうに呟く最中、刃は息を荒げ座り込んでいた。

（やべえ、これをなのはとフェイトにさせる訳にはいかねえな。だけどこんだけきつけりゃ、淫獣やＫＹ、あのモブ転生者にはやりたいな）

少しづつ息を整えながら、今後の計画を考える。

（人を襲わせたくないが、転生者やムカつく連中は襲ってほしいんだよな…。かといって下手するとなのは達と関わらなくなっちまうし…）

なのはとフェイトは蒐集させたくない。しかし男キャラは痛めつけたい。
そんな歪んだ事を考えていたが、結局は二人だけ理由をつけて蒐集を阻止すれば良い。そう結論付けた。

「なあ、今後管理局がくる事を考えると、やっぱりダミーの主が必

要だと思うんだ。だから俺が…っていねえ!?」

ビルの屋上には刃しかおらず、ヴォルケンリッター達は既に移動していた。

海鳴上空。ヴォルケンリッター達は刃から離れ、別の場所にいた。

「おい、あいつどうすんだよ」

「放っておくのも危険だな…。主に近づけさせてはならん」

「だが協力を受け入れるつもりは無い。おそらくまた現れるだろうが、相手にしないのが得策だ」

全員、刃の事で頭を悩ませていた。

「やっぱり、誰かがはやてちゃんの傍にいた方が良いわね」

「だな。今夜はあたしがいるよ」

「頼む。シャマル、ザフィーラ、行くぞ」

「うん」

「応」

三人は蒐集に、ヴィータは家へと向かった。
彼女達にとって、刃は得体の知れない人物だった。かつて自分達を【雌】として扱った主のような瞳、訳のわからない力。その全てが、彼女達の不信感を煽っていたのだった。

刃が一人残された屋上。隣のビルからそこを眺める一人の人物がいた。

（神道刃…噂通りだな）

一つ目の機械の仮面をつけ、背中にはスラスターと大型のスナイパーライフルを背負っている。さらに腰には二丁の拳銃を装備してる少年だ。
彼も転生者。カレルの友人である山崎の同志でもある。

（丁度魔力も無い。ここでリタイアしてもらうぜ）

少年はライフルを持ち、仮面のスコープを起動させ、さらに迷彩で姿を消す。窓から狙撃をし気絶させ、管理局に渡すつもりなのだ。

「その綺麗な顔をフッ飛ば…」

いざ引き金を引こうとした瞬間、刃がこちらを振り向き飛び出し、さらに結界を展開した。

「なっ！？」

急な事に驚き反応が遅れる。魔力は無いはずなのに、何故飛べ、さらに結界を展開できる？と。

「くらえ！」

さらにアカシックセイバーから魔力弾を乱射する。少年はすぐさまそこから離れ、ビル内部に潜り込む。

「くそ！どうなってやがる！？」

理解ができなかった。闇の書に魔力を奪われたはずなのに、魔法を使い姿を消した自分を見つけたのだ。少年は混乱しながらも迎撃体制に入る。

刃の撃った魔力弾はビルの壁を破壊し、そこから刃が入って来た。

「モブ転生者が…。貴様らが襲撃して来るのは予想済みだ」

「ちっ…どういった手品を使いやがった」

「簡単な事だ。魔力の半分を、新月の書に隠しといたのさ。貴様の姿も、眼に魔力を通わせ特殊な眼にしたからな」

「魔力の自己輸血か。準備の良い事で…」

迷彩を解除し拳銃を持つ。

「さあ、オリ主に喧嘩売ったんだ。覚悟しろ」

「ふざけんな！余計な事をして、地球を滅ぼされちゃかなわねえんだよ！」

二丁の拳銃から魔力弾を連射する。刃は転がっている机を盾にし、姿をくらます。

「っ！？」

身の危険を感知し前に転がり込む。その瞬間、アカシックセイバーが少年の背後を空振る。少年はそのまま刃が開けた穴から外へ脱出、他の仲間に連絡をとりながら魔力弾を連射する。
一人で相手をするのは危険だと判断し、援軍を呼ぶためだ。

［こちら矢吹！神道刃と戦闘に…グハ！？］

突如背中から激痛が走る。見ると鳩尾からアカシックセイバーの刃が生えている。いつの間にか刃がビルから脱出していたのだ。

［矢吹！？どうした！おい！］

仲間の少年の念話が聞こえるが、深々と突き刺さる刃に返事すらままならない。

「う……ぐ…」

「安心しろ。はやても助けて、俺が幸せにしてやるよ」

串刺しになった少年を真上に持ち上げ、銃口に魔力を収束させる。

「死体すら残さねえ！ゲシュタルトバスター！」

「!?!?!?」

虹色の砲撃が少年を包み、その肉体を跡形も無く消しさった。

「フッ…雑魚が。オリ主の邪魔をしようとしても無駄なのさ」

結界を消し、すぐさまその場から転移する。もたもたしていると、他の転生者が集まってくるからだ。

（俺は力を使いこなせるようになった。ククク…少なくとも初遭遇は充分だ。もう少しで信頼も勝ち取れる）

刃にとって、ヴォルケンリッターの反応も予想通り。次は魔力の高い転生者を手土産に会いに行くつもりだ。そしてはやてとも会いフラグを建てる。

刃はこの闇の書事件で知らされる事になる。

自分の醜さを、どれだけ嫌われていたのかを。その事が刃をさらなる邪悪な存在にするのかを。

EP．22　戦いの足音（後書き）

A-Ｓはオリジナルの展開を追加する予定です

刃とも……

EP．２３　大戦前（前書き）

やっとここまでって感じです

EP．23　大戦前

刃が再び地球に現れてから数日後。その日の蒐集を終え、留守番であるザフィーラを除いたヴォルケンリッター達は、いつもの集合場所に集まっていた。

「今夜はここまでね…」

シャマルが闇の書をめくり、頁を確認する。刃のような大物は蒐集できなかったものの、順調に頁を稼いでいった。

「じゃあ帰ろうぜ。そろそろ寝たいし」

「そうだな…ん？」

空から一人の少年が降りて来る。それが誰だかわかった途端、特にヴィータが顔をしかめる。神道刃だった。肩には同年代であろう少年を担いでいる。

「久しぶりだな。今日は手土産を持って来たぜ」

少年を投げ付ける。少年は怪我をしており、衣服は赤く息も荒げている。

「抵抗されたんでボロっちいけど、魔力はあるから結構稼げるぜ」

勿論少年は転生者。そして刃は自慢げに胸を張る。

シグナムは無言で少年の状態を確認すると、顔をしかめて振り向く。

「シャマル、手当を頼む」

「ええ」

すぐにシャマルが少年の治療を始めた。蒐集をしない事に刃は思わず呆ける。

「おい、何やってんだよ。さっさと蒐集しちまえよ」

「馬鹿か？こいつ死んじまうぞ」

そう、少年は蒐集に耐えられない程重傷だったのだ。死者を出したくない彼女達にとって、少年は蒐集対象にはできなかった。

「余計な手間を取らせおって…。我々は死者を出したくないのだ。邪魔をするな」

シグナムにいらついたように言われても、相変わらずふてぶてしい態度を崩さない。

「そりゃあ悪い事をした、何分こういうのは初めてでな。でもわかったろ？俺がいれば蒐集は楽になる」

その口調は、少年を傷つけた事に一切負い目を感じさせない堂々としたものだった。かつての自分達も、人を傷つける事に罪悪感は無かった。しかしそれと違い、人を傷つける事を誇らしげに言う刃に不気味さを感じざるをえなかった。

「結構だ。これ以上邪魔されてはかなわん。行くぞ」

「もう出てくんなよ」

「私達でなんとかするんで、さようなら」

シグナムが少年を担ぎ、ヴィータとシャマルが追いかけるように飛び立つ。またも信頼を得られなかった刃は、一人策を練っていた。

（予想以上に固いな。だが、今回で俺の強さはアピールできた。焦るな、はやての攻略もヴォルケンの信頼を得てからの方が確実。無印は焦ったせいで失敗したんだ）

相変わらずの自信であつた。学習しようとした態度はあるものの、そのベクトルは一向に変わる事はなかった。

ここは学校の一画。放課後、カレルを含む数人の少年少女が集まっていた。

「矢吹はやられたし、石橋も襲われて今度は橋本だ。なんなんだよあいつ…」

「石橋はヴォルケンに介抱されたって言ってたぞ」

「だとしても、神道があたし達を狙い始めたのは事実よ」

最近はもっぱら神道刃の話題。ヴォルケンリッターに襲撃された転生者もいなくはないが、原作より完成が早まる事を危惧し皆逃げ回

っているので、転生者で蒐集された者は今の所は聞いていない。

「小川君、管理局は何をやってるんだ?特に猫姉妹の連中」

「こっちは情報無し。管理局の転生者も、転生者の妨害に忙しいらしくてさ」

部屋の奥の壁にもたれ掛かっているカレルが口を開く。

「猫姉妹は、多分傍観してるんじゃないか?下手に報告すると、自分達が地球にいるのも不信に思われるし、はやての事がばれる可能性もある」

「闇の書を封印できればそれで良い…か。気に入らねえな」

皆顔をしかめながら口々に言う。

いくら主の出身世界とはいえ、管理外世界に、そうぶらぶらと居るはずがない。はやての事を隠すのが最優先なのだから。だから無印も介入しなかったのだろう。

「私達だけじゃ無理なのかな…」

「けど、管理の親族がいるのって、四年前のなのは争奪事件で殆どいなくなっちゃったし…。正直大人は当てにはできないわ」

「元々転生者絡み、僕達でどうにかするしかありません。それに…」

少年は机の上に置いてある写真を取る。ヴォルケンリッターと刃が写っている写真だ。

「偵察組の報告によると、神道はストーカーをしながら手伝ってはいますが、今だに避けられています。彼が孤立している分、対処は可能です」

「でもさ、こいつ自称オリ主でしょ？小川曰く、今は自分のなのは達の評価に気付いてないけど、自覚したらチョーヤバくない？下手したら暴走するよ」

「すでに暴走している気がするけど…。でも信じないで終わるかもしんないし。とにかく今は神道を捕まえる事だね。一人で行動しないようにしないと」

結局話しは進展せず、彼らは一向に刃を捕らえられず時間だけが過ぎて行った。その間もヴォルケンリッターや刃に襲撃された者もいるが、逃げに徹した転生者達は蒐集を免れていった。

しかしそれは、神道刃の捕獲、討伐の失敗を意味する。実際、地球の転生者の大半が正式な訓練を受けておらず、我流に鍛えた者が殆どだ。この平和な日本で戦闘技術を磨くのは難しい。さらに基本スペックも刃に劣るため、さらに彼らの身の危険を増加させていったのだった。

十二月一日、アースラの食堂にクロノ達の姿があった。

明日はフェイトの裁判の判決の日。無罪は確実とはいえ、打ち合わせは必要だ。

「さて、じゃあ、最終確認ね。被告席のフェイトは、裁判長の問い

にその内容どおりに答えること」

「うん」

「今回はアルフも被告席に入ってもらうわ」

「わかった」

フェイトとアルフが頷く。もう少しで終わる。その事に少し嬉しそうな声だ。

「で、私とユーノは証人席。質問の回答はそこに書いてあるとおりね」

「うん、解かった」

そう言って解答の内容が書いてあるモニタを見る。その内容を一つづつチェックしながら目を頻りに動かす。

「僕とカレルは傍聴席だ」

「あいよ」

「事実上、判決無罪、数年間の保護観察という結果は確実と言って良いんだけど……一応、受け答えはちゃんと頭に入れておくようにね」

「「うん」」

フェイトとアルフの返事に笑みを浮かべると、クレアはコーヒーに

手を伸ばした。
明日で一段落つく。その事に少し気が抜けそうになるクレアだった。

十二月二日。海鳴にある図書館に月村すずかはいた。
本を探していると、丁度借り出されている本の隙間から向こう側が見えた。そこには、車椅子の少女が本を取ろうと手を伸ばしているのが見える。そう、八神はやてだ。しかし、彼女は本に届かず手こずっているようだ。
すずかは棚を回り込み、少女の代わりに本を取る。

「この本ですか？」

その瞬間、はやての身体がびくつく。そしてキョロキョロと辺りを見渡し始めた。最近は減ったものの、いつも同年代の子が本を取ってくれると、喧嘩が始まったりロクな事が無いのだ。

「…あの……何か？」

「え？あ、ありがとうございます…」

おどおどとした様子で本を受け取る。

「あの…もしかして私、余計な事しちゃいました？」

「へ？」

その言葉にはやては驚く。いつもは馴れ馴れしく接してくるのだ。まるで自分が好意を持たれているかのように。しかし彼女は違い、一歩引いた態度だ。

「その、ごめんなさい。じゃあ私はこの辺で…」

一礼して立ち去ろうとする。が…

「ま、待って！」

はやては呼び止めた。自分でもどうしてこんな事をしたのかわからない。ヴォルケンリッター達との生活が、はやてを変化させたのかはわからない。しかしはやては、すずかが今までの子達とは違う気がしていた。

「あの、私八神はやていいます」

自分の名を告げた。

「私、月村すずか」

応えるようにすずかも名乗る。

「本取ってくれて、ありがとうございました」

「ううん、気にしないで」

そんな小さな会話。それがはやてとすずかの出会いだった。

そしてはやては一人の少年を思い出す。すずかと同じような一歩引いたような態度の少年。春先に出会った、黒髪の少年を。

彼にも名前を聞けばよかった。そんな事を考えながら、はやてはすずかの所へ車椅子を走らせた。

裁判は無事終了。無罪を勝ち取り皆で喜びを分かち合った。

「やったねフェイト♪」

「ちょっと、痛いよアルフ…」

アルフは嬉しさのあまり、フェイトを力いっぱい抱きしめる。その豊満な胸に顔が埋もれるが、流石に痛いようだ。
その光景を、若干うらやましそうにクロノとカレルは眺めている。
実に男らしい反応である。

「姉さんがやったら尚更痛そうだね」

「固いだけだもんな」

二人してクレアをちらりと見ると、小さくため息をついた。

「…何が言いたいのかしら?言っとくけどね、私だってもう少ししたらちゃんと成長するんだから!母さんを見れば希望は無くならないの!」

アルフと比べられたのが悔しいく、さらに自分も気にしているため必死に抗議する。

「大丈夫だよ姉さん。需要はあるんだから」

「うるさい！どうせ私はツルッツルのペッタンコよ！」

「はいはい」

アルフはクレアの頭をポンポンと叩く。

「えっと…なのはに連絡しよう。フェイトの裁判終わったって」

「うん…あれ？」

勿論フェイトの無罪を報告するためだ。なのはも気にしているはずだから。

しかしフェイトが急に険しい表情になる。

「繋がらない？どうなってるの？」

クロノとカレルがハッとする。そう、今日はヴィータの襲撃があるのを忘れていたのだ。

怪しい雰囲気を察したクレアは、すぐさま通信モニターを開く。

「エド、すぐに調べて！」

『ちょっと待ってよ……って、広域結界！？』

モニターには、ドーム型の結界が張られた海鳴が映し出される。

『しかもミッド式じゃない。なんだよこれ…』

「エドワード、古代ベルカは？」

『古代？…クロノ君ビンゴ！』

予感は的中した。やはりヴィータに襲撃されているのだ。

「すぐに行こう！なのはが危ない！」

戦いの火蓋は切られた。

その道は物語の通りに進むのか？はたまた、歪み狂ってしまうのか？

少女の命運、そして悲劇の連鎖を止めるための戦いが始まる。

EP．23　大戦前（後書き）

すずかとのエンカウントが無理矢理な気が…

EP．２４　開幕そして…（前書き）

A-ｓ、本格的に開始です

EP．２４　開幕そして…

なのはは絶体絶命の危機に陥っていた。その夜、突如結界に閉じ込められ、ハンマーを持った赤い少女…ヴィータに襲われたのだ。彼女は強かった。その火力に押され、ビルにたたき付けられ、そして今、最終防衛機構であるリアクターパージまでも発動してしまった。バリアジャケットは弾け、自身も壁にたたき付けられる。

「うう…」

ヴィータは身体を動かすこともままならないなのはに、とどめを刺すように歩み寄る。

なのはもレイジングハートを構えようとするが、腕は力が入らず震え、視界も霞んでいる。頼みのレイジングハートもひび割れ、弱々しく点滅している。

息を荒げながらヴィータは無言のまま、ハンマーを上段に構えた。

（こんなので…終わり？嫌だ、嫌だよ…）

まるで走馬灯のように人々の顔が脳裏を駆け巡る。

「終わりだ…」

ヴィータの声と同時、ハンマーが無情に振り下ろされる。来るであろう衝撃に固く目を閉じた瞬間、キィンと金属同士がぶつかり合うが鳴り響く。

痛みも無く何も衝撃は来ない。

「…？」

恐る恐る目を開ける。そこに映るのは二人の少年。銀色の少年は手にした杖でハンマーを受け止め、もう一人の緑の少年はなのはの盾になるように立つ。

「なのは、大丈夫？」

「ごめんなのは、遅くなった」

金髪の少女と少年が、なのはを介抱するように両隣にしゃがむ。

「フェイトちゃん…ユーノ君…」

二人の姿に安堵したように呟く。

「く…！仲間か！？」

ヴィータは銀色の少年、クロノから離れ、グラーフアイゼンを構え直す。

「少し違うな。フェイト、ビシッと言ってやれ！」

フェイトは小さく頷くと、立ち上がってバルディッシュを構える。

『Ｓｃｙｔｈｅ　Ｆｏｒｍ.』

バルディッシュの先端から金色の魔力刃が展開し、大きな鎌の形になる。

「私達は…友達だ」

静かに、そして怒りを孕んだような声で言い放つ。

「さて、民間人への魔法攻撃。軽犯罪では済まない罪だ」

クロノは両手でローランを持ち直し、先端に氷の剣を形成する。

「なんだテメェら？管理局の魔導師か？」

「失礼、僕は時空管理局特別捜査官、クロノ・ハラオウン。抵抗しなければ弁護の機会がある。同意するなら武装の解除を」

「誰がするかよ！」

勢いよく後ろに飛び、穴の開いた壁から外に逃げる。

「カレル、フェイト！」

「逃がすか！」

「っ！」

カレルとフェイトがヴィータを追いかけるように外に飛び出す。

「ユーノ、なのはを頼む。何があっても、絶対になのはから離れないで」

「う、うん」

ユーノが返事をするよりも早くクロノは飛び出す。

万が一の事を考え、なのはの蒐集を阻止するつもりだ。ユーノが傍にいれば、シャマルも迂闊に手を出せないと考えたのだ。

外では新たにアルフも加わり、四人でヴィータを取り囲む。

「ちっ…」

辺りを見回し、舌打ちをする。一対一ならまだしも、こう囲まれては危険だ。

「卑怯だなんて言うなよ。こっちも仕事なんだ」

「カレル、なんか私達が悪者みたいだよ…」

「でも、正々堂々と戦う必要も無い。さて…戦力差は歴然だ。投降してほしい」

「この…！」

悔しそうにギリリと歯を鳴らし、クロノを睨みつける。一人で相手をするには分が悪すぎる。しかし投降する事はできない。その事が、ヴィータを余計に苛立たせた。

「…っ！？来る！」

アルフが何かを感ずき上を向く。次の瞬間、上空から虹色の砲撃がクロノとカレルに襲い掛かる。

「くっ！」

「ちい！」

間一髪で避け、上を見上げる。すると一人の少年が降り立ち、ヴィータの前に現れる。

「お前…！」

「ヴィータ、大丈夫か？」

赤い長髪の少年…神道刃だった。刃はヴィータに笑みを向けると、すぐにクロノとカレルを睨む。

「貴様ら、それでも男か？少女を集団で襲うなんて…最低だな。それにフェイトにまでこんな卑劣な事をさせるなんて…」

「いや、最初になのはを襲ったのはその子だし。卑劣と言われて…っ！？」

フェイトに何者かが切り掛かり突き飛ばし、続けてもう一人の人物がアルフを蹴り飛ばす。

「フェイ…この！」

「行かせねえ！」

カレルの前に刃が立ち塞がる。
そしてフェイトを攻撃した女性…シグナムがヴィータの所まで飛んできた。

「ヴィータ、落とし物だ」

シグナムが帽子をヴィータに被せる。

「破損は直しておいたぞ」

「ありがとう、シグナム」

嬉しそうなヴィータに小さく笑みを向けると、次は刃の方を向く。

「今回だけは礼を言っておく」

「おいおい、礼だなんて気にすんな」

刃はウインクをするが、シグナムは眉をひそめる。が、すぐにフェイトを追いかけ始めた。

［カレル、君はヴィータを。僕が刃をやる］

［あいよ］

カレルはゼファーを構えるとヴィータに突撃する。

「お前の相手は俺だ！」

「上等だ！」

そして二人は何度もぶつかり合ながら飛んで行った。クロノは横目でなのはとユーノを確認すると、刃に氷の剣を形成したローランを突き付ける。

「久しぶり…と言うのも変だな。彼女達の事も含めて、とりあえず君を確保しなきゃいけないからね。覚悟してもらう」

「フン。こっちの台詞だＫＹ」

アカシックセイバーを構える。そこには以前とは違い、自惚れや慢心以外のものが感じられた。

「うおぉぉぉ！！」

「だあぁぁぁぁ！！」

ゼファーとグラーフアイゼンがぶつかり合い火花がちる。鍔ぜり合いとなり、お互い一歩も引かない。

「やるじゃねえか！」

「上から目線で…」

ゼファーを裏向きにし、後ろの鉤を引っ掛ける。

「言うな！」

そのまま背負い投げのようにヴィータを投げ飛ばす。

「うお！？」

「だらぁぁぁ！」

投げると同時に追撃、横薙ぎに振るうが避けられ、ヴィータは体制を直しながら距離を開ける。そして自分の目の前に四つの鉄球を浮かべる。

「くらえ！」

『Ｓｃｈｗａｌｂｅｆｌｉｅｇｅｎ．』

鉄球を一斉に放つ。鉄球はそれぞれ赤い光りの尾を描き、カレルに襲い掛かる。

「斬空牙！」

斬撃波を放ち、鉄球を次々と真っ二つにしていく。しかし一発だけ撃ち落とせず、ゼファーで直接切り伏せた。だが、両断すると鉄球は爆発し、目の前に爆煙が広がる。

「うおぉぉぉ！」

「くっ！」

爆煙に紛れ、ヴィータが突っ込んでくる。カレルはゼファーで突くが、ヴィータは帽子を押さえながらしゃがむように避け、側面に回り込む。

「うりゃあ！」

「が！？」

フルスウィングで左脇腹を叩く。カレルは吹っ飛びビルの屋上に激突。煙りを上げながら中に突っ込む。

「どうだ……って、まじかよ…」

煙りを突き破り、カレルが飛び出して来た。息を荒げ脇腹を押さえながら、痛みに顔を歪めている。

「固えな。モロに入ったと思ったんだけどよ」

「ハア、ハア。頑丈さが…取り柄でな…」

痛みと吐き気にふらつきながらもゼファーを構え直す。ヴィータは心の中で舌打ちをし、シャマルに念話を飛ばす。

［シャマル、あたしが狙った白いやつ。蒐集できそうか？］

［ダメ。近くに男の子がいて難しいわ。かといって、他の子も隙が無いし…］

［くそっ…］

一方カレル達にもユーノから念話が入った。

［みんな、今からなのはが結界を破壊する。それと同時に転送するから、撤退の用意を］

［あいよ］

［うん］

［わかった］

原作では、ここでなのはがやられた。カレルはユーノがなのはを守ってくれるのを祈りながら、痛む身体を鞭打ちヴィータと対峙した。

クロノは切り掛かる刃を避け、後ろを向いた瞬間を狙い、スティンガーを放つ。しかし刃はすぐに振り向き、撃ち落としていく。

「貴様にはそろそろ退場してもらうぞ！」

魔力弾を撃ちながら飛んでくる。クロノは避けながらアイシクルブレイドを展開する。

「そうは行くか！」

お互いの刃がぶつかり合う。だがすぐに刃は後ろに飛びのき、新月の書を開く。その行動ににクロノは身構える。

「だがその前になのはを守らなければならなくてな」

「なのはを？」

新月の書の頁が破れ、足元にミッド式の魔法陣が展開される。

「フフフ…新月の書に不可能は無い！」

『Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｒａｇｅ　Ｏｃｃｕｒｓ　ｏｆ　Ｄｉｍｅｎｓｉｏｎ　Ｊｕｍｐｅｄ.』

放ったのは、プレシア・テスタロッサの魔法だった。

その時、シャマルはなんとかリンカーコアを摘出しようとチャンスを伺っていた。丁度砲撃と転送準備をしているのを感知し、好機とばかりに旅の鏡を展開する。

しかしその瞬間、雲行きが怪しくなり、雷が鳴り響く。

「え？…キャァァァ！？」

旅の鏡に集中していたせいか、反応が遅れる。シャマルに雷が襲い掛かかった。威力も低く、ダメージにはならなかったが、断続的に降る雷は妨害するには十分だった。

怪しい雰囲気を察知したシグナムは、シャマルの方角を見る。すると、彼女を襲う雷が見えた。

「…っ！？あの魔法は」

フェイトには見覚えがあった。母が使っていた魔法だ。しかしその色は目に痛いような虹色の光りだった。

［シグナム、私が行く］

［ザフィーラか。頼む…なっ！？］

天を貫くような桜色の砲撃が、結界を破壊するのが見えた。

（潮時か…）

シグナムはレヴァンティンを鞘に収め飛び出す。

「勝負は預けたぞ！」

フェイトは彼女を見ているしかなかった。このまま戦いを続けても、負けるのは自分だから。

［みんな、大丈夫？］

［うん。結界が壊れたら、撤退して行った］

［こっちもだ］

カレルも地面に座り込んでいる。

［クロノは？連絡がつかないんだ］

［あたしが探しに行く］

［お願い］

アルフは人の姿に変身し、飛び出した。

結界が破壊される少し前、クロノは驚愕の表情で刃を見ていた。

「君が、何故その魔法を…」

「新月の書にかかれば、見た魔法のコピーくらい簡単さ。さて、とどめだ」

銃口をクロノに向ける。だがクロノもおとなしくやられはしない。ローランを構えるが、その時声が聞こえた。

「…？」

見ると小学校低学年くらいの少女が、泣きながら現れた。

何故こんな所に？転生者？事故？クロノは混乱しそうになる。

だが、刃はニヤリと笑うと銃口を少女に向けた。クロノはゾッと顔を青ざめる。

丁度結界も破壊され、それを合図に刃が砲撃を放つと、クロノは無我夢中で少女の前に立ちシールドを展開する。間一髪で防ぎ、少女の方に振り向く。

「君、大丈夫か？」

すると少女はピタリと泣き止み、笑顔でクロノに振り向く。

「バーカ」

その瞬間、クロノは理解した。これは罠だと。

「しまっ…」

「死ね！」

『Ｉｃｉｃｌｅ　Ｂｕｌｌｅｔ．』

慌ててアイスドールを発動させるが、一瞬遅れたせいか、一本の氷柱がクロノの右腹部に突き刺さる。さらに続けて次々と氷柱がクロノに襲い掛かり命中、クロノの身体はその勢いで吹き飛び、少女を通り抜け建物の壁を突き破り突っ込む。

そう、少女は幻影だったのだ。

刃は醜悪な笑みを浮かべながら感動したように息を吐く。邪魔者の排除と同時に、自分の策の成功を確信したのだ。

「クロノー！」

丁度アルフも現れる。アルフは刃をキッと睨み身構える。そして気付いた。辺りに漂う血の臭いを。

「あんた、クロノに何をした！」

「ちょっと待て、あいつは自滅したんだ」

「自滅？」

「ああ。あいつは結界に迷い込んだ女の子を人質にしたんだ。なんとか外に逃がしたんだが、あいつ殺傷設定で攻撃してきたんだ。そ

れに気付かず反射しちまってな。あいつは自分の魔法にやられたんだ」

「そんな見え見えな嘘、信じるか！」

アルフは怒りをあらわにし、今にも飛び掛かりそうだった。

「事実さ。なのはとフェイトに伝えてくれ。クロノと連んでいるユーノとカレルは危険だ。絶対信じちゃいけないってな」

刃はそう言うと転移魔法で消えていった。

（ふざけるな！誰が信じるかってんだ！）

アルフは追いかけるのを後にし、崩れた壁に走り出す。今はクロノの無事を確認するのが先だからだ。

中に入ると、血の臭いとひんやりとした空気が漂う。そしてそこに、一つの人影があった。

「クロノォ！」

先端の折れた氷柱が散らばり、身体の表面数ヶ所に氷をまとったクロノがいた。しかし腹部から血を流し、氷柱が突き刺さった状態で。

EP．２４　開幕そして…（後書き）

刃キメェです…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7276y/

魔法姉弟ツインクロノ

2011年12月17日09時09分発行